

資料

(平成二年十月)

第三十五回「合宿教室」(阿蘇)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

“合宿教室”35年の歩み

回数	年 度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	" 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	" 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	" 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	" 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	" 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	" 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	" 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	" 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	" 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	" 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	" 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	" 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	" 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	" 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	" 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	" 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	" 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	" 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	" 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	" 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	" 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	" 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	" 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	" 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	" 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	" 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	" 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	" 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	" 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	" 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	" 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	" 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	" 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
累計・参加人員				10,204名

第三十五回 “合宿教室（阿蘇）” 全参加者の感想文と和歌詠草



と き 平成元年八月五日（日）から九日（木）まで四泊五日間
 ところ 熊本県・阿蘇国立公園「阿蘇の司・ピラバークホテル」
 参加総数 二〇四名

目 次

“はしがき”に代へて……………	理事長・小田村寅二郎……………	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……………		5
“合宿教室”の日程表（四泊五日）……………		6
第35回 “合宿教室”のあらまし……………		7
感想文と第二回目の “短歌詠草”……………	参加者全員……………	29
短歌詠草……………	合宿中の第一回目の創作作品……………	101
あとがき……………	参加者全員……………	124
カメラ・レポート34枚（31ページから97ページの左頁に掲載）……………		

“はしがき”に代へて

小田村寅二郎

(本会理事長・元亜細亜大学教授)

昭和三十一年の本会創立以来、一年も欠かすことなく続けて来た“合宿教室”は、本年は第三十五回目を八月上旬の四泊五日間（リーダー学生による事前合宿をそれに先立って三泊、事後検討合宿を本合宿後一泊、従ってリーダー学生にとっては合計八泊九日間）、九州・熊本県・阿蘇の「阿蘇の司 ビラパークホテル」で開催しました。このホテルの朝の集ひの廣場からは、雄大な阿蘇連山が間近く眺められ、その景色に参加者一同は心のなごむ思ひをしたことでもありました。宿舎側の設備も大變に使用ひよく、この“合宿教室”独自の日程の運びにも、きはめて好都合でした。

全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君（三十五大学から、男女学生一〇九名、社会人及び関係者九五名、計二〇四名）は、旅装を解く間もなく開会式（八月五日午後二時）に列席し、開会宣言、国家斉唱二回、ついで、祖国のために尊い生命いのちを捧げられた先人の御霊みたまに一分間の黙禱を捧げたあと、参加学生を代表して、リーダー学生の一人、早稲田大学四年の鶴野光博君が「合宿ではいろいろな日程が組まれてみますが、その中味を本当に作っていくのは僕たちです。本音を語り合ひ、合宿をお互ひに充実したものにさせう。」と呼びかけたのに対して、全参加者は“この合宿教室に参加したかには、自分から進んで飛び込んでいかなくては”との気持ちにさそはれていったやうでした。場所もよし、空気が殊のほか澄み切つてゐる阿蘇高原で、夏山の展望を窓外に眺めながら、今年の合宿教室はこのやうにしてスタートいたしました。

お招き申し上げた講師の、作曲家・黛敏郎先生は「日本文化と天皇」と題してお心こもる御講義を、また質疑に対する御応答を、長時間にわたつてしてくださいました。特に今秋に予定される御即位式ならびに大嘗祭についてのお話は、一同に

深い感銘をお与へくださいました。また、主催者側の諸講師の講義をはじめ、登壇者諸氏の発言に対し、それらを一言も聞き洩らさずとの思ひで、熱心に聴き入ってゐた参加者たちでしたので、場内には、ピンと張りつめた緊張感がみなぎり、この「合宿教室」ならでは、真摯な求道場が、日を追ふにしたがつて次第に充実感を深めていくことになり、まことに嬉しい次第でした。

さて、この「合宿教室」では、「感動と出逢ひのこの夏」とのキャッチフレーズのもとに、「学問」と「人生」と「祖国日本」と「世界平和」といふ四つの命題を今年も掲げました。いまの日本の大学生活では、これら四つの命題に何らの統一性・関連性が見られず、バラバラな教説が無反省に錯綜してゐる気配が多いため、この合宿教室では、そのことへの指摘と反省の上に立つて、この四つの命題を何とかして各自の心中に統一的に把握してもらはうと、参加者諸君に強く期待しました。はじめのうちは、いろいろな抵抗や反感を持たれた方もをられました。しかし日程が進むにつれて、濃淡の差こそあれ、ごく一部少数の学生を除き、ほとんどの参加者諸君は今日の大学が「心を鍛へることの重要性」を忘れてゐること、また「知識偏重」と「学問の分化」が精神の混迷をもたらしてゐることなどについて、これらの欠陥を欠陥として認識し直すと共に、それらへの対処には、結局一人ひとり、学問の名に値する真の総合的な学問を求めて学生生活を確立するのだからなければならないこと、さうしなければ、これからの日本の発展に寄与することにはならない、といふ重要事を把らへてくださった、と思はれました。このことは、主催者として何よりも頼もしく思ったことでした。特に今回は、日本の文化のすばらしさが、諸講師、特に若い諸講師によって具体的に説かれたことは、参加者一同の心に沁み入る成果であつた、と回想されます。それは同時に、三十五年間つづいたこの「合宿教室」が、次の世代の人々に継承されつつあることを、確認出来た喜びにも連なることでした。

一方、大学生諸君にとつて、「友情、友との付き合い」の問題は、大切な関心事でありますので、「上っただけの遊び友だちだけでなく、真に心を許し合ふことの出来る友だちを持ちたい」といふ願望に対して、この「合宿教室」では、「こ

ちら側がどういふ心掛けで自分自身の心を整へて相手に相対していけば、真に心を許し合へる友と出会ふことができるか、それにはどう努力すべきか」についても、各班ごとの、胸襟を開いての班別討論、輪読、各自が詠んだ和歌についての相互批評などを通じて、真の友だち付き合ひについての具体的な経験を積んでくれたことは、各自の大きな収穫となったと思はれます。また合せて、「読む書物の選び方の如何が、自分の人生にとってどんなに重要なかかはりをもつか」また、「読書に際して『輪読』といふ勉強の仕方が、独りで読むのに比してどんなに深い意味合ひを持つか」についても、真剣に考へてもらへたことと思ひます。

さて、ここに編した『この感想文集』は、全参加者が「解散の間ぎは」に走り書きしてくださったものです。紙面の都合上全文をそのまま載せ得なかつたことは、なにとぞご容赦いただきたく存じます。「この文集全体の編集」は、日本油脂・技師の上村栄章さん、日本真空技術・技師の北浜道さん、運輸省・技官の久米秀俊さん、竹中土木・社員の国分俊喜さん、千葉県安房市庁・職員の秋山信之さん、タマポリ・社員の吉川理夫さん、早大大学院生の八木秀次さん、船橋市立小学校教諭の竹内孝彦さん、新井組・社員の垣迫太市さん、ならびに在京会員多数の協力によつて進められました。また「合宿教室」のあらましについては、在京の若手会員諸氏が纏めて下さり、巻末の第一回目の「短歌詠草」については、日本興銀行員の小柳志乃夫さんが選歌してくださいました。

今夏の「合宿教室」に参加された方々、またこの文集をお読みいただく方々にお願ひ申し上げたいことは、どうか全ページを通して御判読いただきたい、といふことであります。

なほ、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に対しまして、会員一同に代り心から厚く御礼を申し上げます。

来年（平成三年）の合宿教室（第三十六回）は、八月七日（水）～十一日（日）の日程（四泊五日）で、神奈川県「厚木市立七沢自然教室」に於て行ふことに決定してをります。



「第35回合宿教室」記念撮影（参加者204名）於・熊本県 阿蘇の司ーピラパークホテル

参加者

（学生班 三五大学）（洋数字は参加学生数）

- 拓殖大22 早稲田大11 亜細亜大11 鹿児島大10
- 九州大7 長崎大4 尚絅短大4 西南学院大3
- 中央大3 九州女子大3 中村学園大3 尚絅大2
- 防衛大2 日本大2 福岡大2 東北学院大1
- 東京大1 星稜女子短大1 お茶の水女子大1 国学院大1
- 千葉大1 駒沢大1 実践女子大1 神田外語学院1
- 武蔵野服飾美術専1 同志社大1 帝塚山学院短大1
- 広島大1 梅光女学院大1 第一経済大1 九州リハビリテーション理学療法学院1
- 佐賀大1 大分大1 香川大1 熊本大1

計 一〇九名（うち女子三五名）

（社会人・教員班）会社員 教員など

計 一七名

（招聘講師）一名（国民文化研究会）六九名

（事務局）六名（見学者）一名（写真）一名

総合計 二〇四名

第35回「全国学生青年合宿教室」日程表 — 平成2年8月 { 5日(日) } 4泊5日間
(1990年) { 9日(木) }

主催 { 社団法人・国民文化研究会
大学教員有志協議会

	8月5日(日) (第1日)	8月6日(月) (第2日)	8月7日(火) (第3日)	8月8日(水) (第4日)	8月9日(木) (第5日)
(注 意) ↓	6:30 (起床)	6:30 (起床)	6:30 (起床)	6:30 (起床)	6:30 (起床)
会場入口受付で、所属する班を確認のこと。	8:00 (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚と国歌斉唱・体操) 朝食	8:00 (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚と国歌斉唱・体操) 朝食	8:00 (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚と国歌斉唱・体操) 朝食	8:00 (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚と国歌斉唱・体操) 朝食	8:00 (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚と国歌斉唱・体操) 朝食
	8:30 (講義) 福岡県立福岡中央高校教諭 占部賢志氏	8:30 (講義) 作曲家 藤敏郎先生	8:30 (講義) 作曲家 藤敏郎先生	8:30 『聖徳太子の信仰思想と日本文化』 輪読導入講義 金文図書出版・社員 廣木寧氏	8:30 運営委員所感 参加者による(全体感想自由発表)
	10:00 (10:00)	10:00 (10:00)	10:00 (10:00)	10:00 (10:00)	10:00 (10:00)
	10:10 (10:10)	10:10 (10:10)	10:10 (10:10)	10:10 (10:10)	10:10 (10:10)
	11:00 (班別討論)	11:00 (班別討論)	11:00 (班別討論)	11:00 (班別討論)	11:00 (班別討論)
	12:00 (12:00)	12:00 (12:00)	12:00 (12:00)	12:00 (12:00)	12:00 (12:00)
	1:00 (1:00)	1:00 (1:00)	1:00 (1:00)	1:00 (1:00)	1:00 (1:00)
	2:00 (2:00)	2:00 (2:00)	2:00 (2:30)	2:00 (2:30)	2:30 (2:30)
	2:50 (2:50)	2:50 (2:50)	2:50 (2:50)	2:50 (2:50)	2:50 (2:50)
	3:00 (3:00)	3:00 (3:00)	3:00 (3:00)	3:00 (3:00)	3:00 (3:00)
5:00 (5:00)	5:00 (5:00)	5:00 (5:00)	5:00 (5:00)	5:00 (5:00)	
7:00 (7:00)	7:00 (7:00)	7:00 (7:00)	7:00 (7:00)	7:00 (7:00)	
8:30 (8:30)	8:30 (8:30)	8:30 (8:30)	8:30 (8:30)	8:30 (8:30)	
8:40 (8:40)	8:40 (8:40)	8:40 (8:40)	8:40 (8:40)	8:40 (8:40)	
10:00 (10:00)	10:00 (10:00)	10:00 (10:00)	10:00 (10:00)	10:00 (10:00)	
10:30 (10:30)	10:30 (10:30)	10:30 (10:30)	10:30 (10:30)	10:30 (10:30)	

(合宿心得)

- 1 同じ班の人々のあひだに限らず、全参加者一体となつて、心の交感をはかっていたいただきたい。
- 2 上記の日程は、合宿中途において一部変更されることもある。
- 3 集合は迅速に行ふこと。
- 4 講義の時間には、会場に講義開始5分前までに、必ず入場すること。
- 5 講義のはじめと終りは正坐し、司会者の指示に従つて講師に礼をすること。
- 6 講義中は服装・姿勢に留意し、不作法は慎むこと。
- 7 講義会場、自室をとはず、部屋に入るときは、スリッパを、必ず向ふむきに、そろつてぬぐこと。
- 8 質問は、司会者の指示をかりけて行ひ、質問のしだに
① 班名 ② 学校名と学年(社会人は勤務先) ③ 氏名を、明確な言葉で告げること。
- 9 講義会場における席席は、その都度移動するので、必ず班別に、指定の場所にまよつて、着席すること。

第35回 “合宿教室” のあらまし

第一日

(八月五日・日曜日)

平成二年八月、全国各地大学・職場の学生・青年諸君が阿蘇国立公園「阿蘇の司・ピラパークホテル」へ暑中遠路はるばると集まつて来た。「友よと呼べば友は来たりぬ」と会場玄関に掲げられた垂幕のこの言葉は、参加者の心にすがすがしい気持ちと合宿に対する期待を抱かせた。

開会式

参加者が一堂に会し、緊張の高まる講義室に、九州大学三年生の大瀬博幸君の「開会宣言」が響き渡り、「国家斉唱」に続いて合戦時、平時を問はず、祖国日本の為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊に對し、一分間の黙禱を捧げた。続いて主催者を代表して国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生は「この合宿教室では、一人の人間として将来の皆様御自身の生活にプラスになる様に学んでください。」と語られ、続いて、「この四泊五日は大学の格差や学年差を取り払って各自心ゆくまで語らひ、真心を披瀝し合ひ、喜びや悲しみの経験を忌憚なく話し合へる様努力して下さい。」と参加者にこの合宿にのぞむ姿勢を語られた。次いで、参加者を代表して早稲田大学四年の鶴野光博君が「合宿教室の中身を作っていくのは、僕達一人一人の気持ちだと思ひます。班別討論の中で共感でも、反感でもいいですから、真剣に自分の思つたことを出していくやう心がけて頑張つていきます」と参加者に強く呼

びかけた。

続くオリエンテーションでは、本合宿教室の運営委員長の今林賢郁氏（新日本製鉄㈱勤務・46歳）が登壇され「真剣に周りの人の話しを聴いた上で、思ふ存分自分の言葉で語って下さい。」と参加者全員に強く訴へられた。

続いて、合宿細部にわたる注意事項が指揮班長矢永誠二氏（福岡県立玄洋高校教諭・32歳）によつて伝へられた。この後、直ちに参加者は各自に割り当てられた班室に入り、合宿参加の動機や、日頃の生活ぶり等を含めた「自己紹介」を行ひ、昨年の合宿教室のレポートである『日本への回帰―二十五日集』の輪読に入つた。

合宿導入講義 「学は極りなき所に極り出来る也」

神奈川県立湘南高校定時制教諭・亜細亜大学非常勤講師 山内 健 生 先生

先生はまづ、現在の日本の状況について、マスコミや学校教育等による「勘違い」のために情報の片寄りが生じ、そのために我々は様々な事実を知らされてゐないことを嘆かれ、そのことに気付いて欲しいと語られた上で講義の中心に入つていかれた。

最初に元号の問題に触れられ、最近西暦は国際化に対応するといふ事を理由に、新聞各紙が元号表示を西暦優先に変へてきてゐることに大変なショックを受けた事を述べられ、これは重大な事であると指摘された。更に日本の元号制度について先生は「御代替りの時には年号が変はるといふことが、大化の改新から今日まで一度の中断もなく続いてきた。さらにその元号の文字には、天皇の



その時代に対する理想がこめられてゐると同時に、それは自主独立の印でもあり、年号を重んじない事は、歴史的に見ると重大なことである」と話された。又、先生は、改元や元号法等についても詳しく説明され、「元号を中心に必要に応じて西

曆を併記すべきであり、国際的にもユダヤ曆・回教曆・仏教曆等があり、西曆と併用し、自国の文化を維持継承してゐる」と、民社党の見解を交へながら、元号の重要性について繰返し強調された。

続いて、国際化といふ言葉が流行語として盛んに使はれるやうになつた今日の現状を憂へられ、「国際社会とは、国と国とが必死になつて向き合ふ事であつて決して自分を捨てる事ではない。国際化といふ言葉は国際交流といふ意味で使ふべきである。自分の文化を捨てるといふことが元号の問題にも端的に表れてをり、お互ひの国の事実を知らない事が、いかに恐ろしい判断を生むかといふ事を知つて欲しい」と話された。

次に、日本国憲法について、先生は根本的なことを考へて欲しいと語られ平和憲法といふ言ひ方は日本人の独断の典型であると話された。そして、言論の自由が全く無かつた占領下当時の日本に於いて作られた日本国憲法の中から、特に前文と第九条を取り挙げられ、ベルサイユ条約との比較をされ乍ら、「これは日本人にとつては自己不信をかきたてるものであり、国際常識に反したをかした文章であり、誇るべきものではない」と話された。また「憲法とは先祖から受け継いできた国の基本的な骨格であり子孫に伝へてゆくものである。」とリンカーン米合衆国大統領「ゲチイスバーグ演説」並びに柳田国男の文章を引用されて語られた。

続いて、国民の祝日に言及され「祝日には祖先から受け継いできた由来があるにかかはらず、元号と同様、学校では教へられてゐない。」と語気を強められて語られた。

最後に先生は、標題に掲げられた山鹿素行の『学は極りなき所に極り出来る也』の言葉を引かれ、素行の学問観、人間観に触れながら「かういふすばらしい言葉を心の依所として、日々学び大きく育つて戴きたい」と参加者に強く訴へられた。

講議の後、全参加者は各室に戻り、班別討論に入つた。講師の訴へられんとされた事はどのやうな事か、各々がどこに感銘を覚え、たかを中心に討論が進められた。

尚、この班別討論は各講義の後に行はれ、お互ひが心に湧き上がる思ひを率直に語り合はうと務めながら討論を行つた。最初は自

らの思ひをなかなか言葉にできないもどかしさを感じてゐたが、回を重ねる度に熱気を帯び、時には反発し合ひ、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流は深められていった。

第二日

(八月六日・月曜日)

合宿の日程は、毎朝六時半の起床から始まる。洗面後、参加者は、阿蘇谷の清々しい冷気の中を朝の集ひの会場に向ふ。「国家斉唱並びに国旗掲揚」「ラジオ体操」「連絡事項の伝達」が行はれ、一同、今日一日を過ごす心の準備が整へられる。

講義 「ロシアと廣瀨武夫―清く、直く、温かく、しかも力あり―」

福岡県立福岡中央高校教諭 占部賢志氏



まづ占部氏は日露戦争開戦当初、旅順港口閉塞作戦で壮絶な死を遂げ、軍神と称へられた廣瀨武夫中佐の生涯について話された。そして文部省唱歌になつた「廣瀨中佐」の歌詩を読まれ、戦死した状況について説明された。また占部氏は「廣瀨武夫中佐といふ明治の軍人として生きた人間がいろいろな事件に遭遇する、或いはいろいろな人間に出会ふが、さういふ際にどんな心持ちを湛へてどんな決断や判断をしながら生きていつたかといふことを廣瀨中佐の言葉にそつて偲んでいただきたい」と述べられ、日記、手記そして書簡を紹介された。

最初に廣瀨武夫中佐がオーストラリアへ遠洋航海した際の日記「航南私記」を紹介され、部下の「水兵が船内で行方不明になるといふ事件に遭遇し、さうした状況で廣瀨武夫の何としても部下を捜しださうとする心情、

その行動に心を留められた。そしてそのやうな行動は後に廣瀨中佐が部下の杉野兵曹長を探して戦死した時の行動にもつながらやうに思へると話された。その後廣瀨武夫中佐は五年間に亘りロシアへ留学を命じられ、そこで様々な出会いを経験するとともに、祖母や父の死といふ大きな別れにも遭遇した。占部氏はさうした出会いや別れに接した廣瀨武夫中佐の心情を書簡をもとに思ひ偲ばれ、特に父の死に際し、「武骨一筋であつた廣瀨武夫中佐がロシア生活の中で多くの人と出会い、交流を積んでいくうちに、父の死に接するが、そのやうな状況で自分一身の悲嘆にくれるだけではなく、激しい慟哭にくれるなかでも、故国にゐる義母や永年仕へた女中さんを思ひやり、心のこもるいたはりの手紙を書けるやうになつた。さういふ細やかな心情を感じとるやうにまでなつた廣瀨中佐の心の広がり心打たれた」と話された。またアリアズナといふロシア人女性との交流を書簡や短歌をあげて紹介された。その頃中国で義和団事件が勃発し、南下政策をとるロシアの動向が日本にも大きな影響を及ぼすやうになつたが、占部氏はさうした中で適確にロシアの情勢を踏まへてみた廣瀨武夫中佐の「随想」を引用され、ロシア研究の充実ぶりをも指摘された。その後廣瀨武夫中佐は日本へ帰朝し、旅順口閉塞作戦に参加し、戦死する。占部氏は、さうした中で廣瀨武夫中佐は旅順口閉塞作戦がもし成功したならば単身旅順口へ渡り、ロシアの提督に赤心を披瀝し、以て降参を勧めようとしたことを指摘された。そして最後に占部氏は「軍人であれ、文人であれ、何かの為に生涯を生きてゐる中で人の心に響くドラマが、そして言葉がある。廣瀨武夫中佐は大半を軍人として過ごしたが、二千通あまりの書簡や多くのロシア研究、遠洋航海の記録を残してゐる。先入観に囚はれず自分の目と心でさうした文章を読み、廣瀨武夫中佐の生の言葉に触れ、祖母や父を亡くしたことや、アリアズナといふ女性との恋愛の体験などを通して、自分の悲しみだけでなく、周囲の人たち、故国のことにまで思ひを致し、そして旅順口での最期の行動につながつた廣瀨武夫中佐の豊かな心の広がりを感じてほしい。」と述べ講義を終へられた。

講義 「今上天皇の御歌」

九州造形短期大学教授・国民文化研究会副理事長 小柳陽太郎 先生



先生は先づ昨年八月四日の両陛下下の記者会見を例に挙げられながら、現代の皇室についての情報の乱れを嘆かれた。その中で陛下は憲法問題に対する質問に対して「天皇は憲法に従ふ立場があるので憲法に対する論議には言を慎みたい」と仰せられた。しかし翌日の新聞は会見の模様を護憲宣言との印象をもつて報じた。そして陛下のお言葉の中でも、昭和天皇を始め歴代天皇を貫く皇室の伝統を尊重するとの御言葉は伝へられなかつた。先生はマスコミを通して陛下の御心をお慰び申し上げる事が如何に難しいか話された。そこで先生は今上天皇の御歌を一首一首詠まれながら大御心を慰ばれてゆかれたのである。敗戦後の混乱の中赤坂離宮にて詠まれた「ぬばたまの夜は来つれど空理む鳥の群のいつ寝つくらむ」との御歌には、戦災で家を失った国民への御心が慰ばれると語られた。また先の戦争に於て激戦の地となつた沖繩に古くから伝はる琉歌を、今上天皇が学ばれたことに触れられ、国民一人一人の中へ入つて行かうとなさる御姿を慰ばれた。最後に先生は夜久正雄先生の言葉を引用しながら昭和天皇が終戦時に詠まれた「国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり」との御製を拝し、「天皇が国民のことを詠まれ国民が天皇の御心に随順する。これが国がらでないか」と強調された。そして同じ夜久先生の「天皇の心を信じて敬ふことはその心を知る努力をしなければできない」「日本歴史はこの国民の努力によって支へられてきた」との文章を引かれ、私達は「大御心を慰ぶ努力なくして」「他に何ができるだらうか」と訴へられた。

映写会 「天皇陛下」

映画では、天皇陛下下の御生涯がその折々の御製と共に映し出され、我々国民を思はれる大御心に参加者一同は深く感動した。中でも、沖繩ご訪問の際に火炎びんを投げつけられ、陛下ご自身が非常に危険であつたにもかかわらず、側かたはらにゐた人を御心配なさり、御声をかけられてゐた御姿や、また身体障害者の方々一人一人をお訪ねになり、温かく語りかけられる御姿には、目頭の熱くなるのを禁じ得なかつた。

第三日

(八月七日・火曜日)

講義 「日本文化と天皇」

作曲家 黛 敏郎 先生

先生は初めに「日本人として生き、死んでゆく私達は、好むと好まざるに關はらず、自分を把握するに當つて国體觀を持つてゐなければならぬ。日本の国體と他國のそれとを區別する唯一の拠り所となるものは天皇の御存在である」と述べられて、天皇に対する認識を深めることの重要さを説かれていつた。先生は「天皇は政治概念と文化概念の二つの側面を持つてゐる」と言はれ、まづ前者について、終戦時の御聖断に触れられ、「日本に於いて『いくさとどめけり』と言へるお方は陛下しかをられなかつた。日本が後のドイツや朝鮮のやうな分割の悲劇を免れたのは御聖断のお陰である」と話された。歴



史上天皇親政の時期は僅かであるが、一朝大事が起った時に天皇は政治に関はつてきたと言はれ、「明治維新においては、天皇の中心的御存在があつたからこそ、列強により国が二分されることを免れた」と指摘された。また今日の京都御所の手薄な防備を見ればわかるやうに「天皇の御存在は武力によつてではなく、その権威によつて守られてきた」と語られた。そして天皇の地位はその血統によつて継承されてきたのであり、金銭や一時的な権力により得られるものではない」と世襲の安定性を主張され、世俗とは区別される必要があると言はれた。

次に先生は文化概念としての天皇に触れられ、「天皇は現存する他の国王と違ひ祭祀王であられ、国民を代表して作物の豊穰を天に祈られる御存在である」と言はれた。そして十一月に行なはれる大嘗祭は天皇が即位後初めて新穀をきこしめされる儀式であり、冬至以降、一陽来復太陽の日差しが長くなるにつれて、天皇が再び霊力を更新されるとされた。そして「収穫を神に感謝し国民と共に喜ぶ儀式は、古代では一般普遍のことであつたが、それを今に皇位継承儀礼として受け継がれてゐるのは日本の皇室だけである。御代替りが行はれるこの時に、三千年にも亘る皇室の歴史・文化を、占領軍による現在の憲法等によつて変へてしまふやうなことがあれば、悔いを千載に残すことになる」と訴へられて御講義を終へられた。

短歌創作の手引き

福岡県立玄洋高校教諭 矢 永 誠 二 氏

まづ、矢永氏は自身の体験を振り返られつつ「この合宿教室において皆様は、物に感ずる心、言葉に感ずる心を鍛へるといふ経験を識らず知らずにやつてゐるのです。この心を鍛へるといふ貴重な経験によつて、このあと、雄大な阿蘇に登山



し、短歌を創作する時においても、短歌を作る対象が見えてくる、そして歌が出来るといふことを実際に体験されるはずで。」と語られ、短歌を始めて作る人達を励まされた。

次に、去年の合宿教室で、班付をされた青山氏（戸田建設勤務）の深夜に及んだ班別での短歌相互批評の折の連作短歌「友ら皆心尽くして言の葉を直さむとすれど思ふにまかせず」「やうやうに己が思ひにかなひぬる歌でまし時の友の喜び」を紹介され、「この班の人達は、短歌相互批評に際しての青山さんの班員に寄せる思ひのこもつたこの連作短歌を読んで、うれしく、そしてありがたく感じたはずで。真心から発せられる言葉は、人にそのまま伝はるのです。」と語られた。さらに、矢永氏が初めて合宿教室に参加した時に紹介された吉田松陰の自らの処刑が確定したことを肉親に知らせる短歌「親思ふころにまさる親心けふの音づれ何ときくらむ」を詠み、松陰の肉親を思ふ痛切な思ひに感動した経験が語られ、「古来、日本人は、『しきしまの道』として、短歌を詠むことに務めてきたのであり、その痛切の思ひは、時代を越え、立場を越えて、人の心から心へ伝はるのです。人と人との心の交流、それが短歌を通じて実現されるのです。」と短歌を学ぶことの意義を話された。

続いて、作歌上の留意点として、「感動を素直に、そして正確に詠む」「一首一文」「字余り字足らず」「用語」等について、学生の実作短歌に即しつつ丁寧に説明された。

最後に、正岡子規の「金槐和歌集を読む」と題した五首の連作短歌を紹介され、子規が終生大事にした「写生」とは、あるがままのものを素直に詠むことであるとともに、脊椎カリエスといふ重病の病床の中にあつて、虚飾の短歌や俳句を排すべく、革新運動に全力を傾けていつた子規の生きる姿勢にも通ずるものであつたことを語つてゆかれ、講義を終へられた。

レクレーション

この後、全参加者は、各々バスに乗車し、楽しみにしてゐた阿蘇中岳へと出発した。バスの中では唱歌を皆で歌ひ、なごやかな中で中岳へと向つた。中岳頂上では、噴煙湧き上がる火口を背に記念写真を撮つたり、火口を覗き込んだり、短い時間ではあつたが、阿蘇の大

自然を満喫した。幸ひ天候にも恵まれ、往復のバスの中からは世界一の大カルデラも全望できた。また、途中、阿蘇の赤牛が道路を横ぎるといふのどかな場面も見られ、中岳登山の感想を和歌にした者も多く見られた。

青年体験発表

最初に、福岡県立須恵高校教諭の那須三元氏（福岡教育大学教育学部、昭五十七年卒）が登壇された。先づ、氏は「輪読は、輪読書に書かれた先人（著者）が、どのやうな気持ちで言葉を残したかといふことを読み味はふことが大切です。」と語られた。続いて氏は聖徳太子の片岡山の御歌を紹介され乍ら、「かつて、この御歌を読んでも何も感じませんでした。が、大学時代、私の先輩が片岡山の御歌を声を出してくり返し歌まれた時、その朗声にあるリズムを感じました。そしてこの経験を基に、私は言葉を読み味はふといふことを知りました。」と話され、さらに吉田松陰の講孟余話の文章を引かれ「松陰の味はつた学問する楽しみがレジャーしか楽しみを知らない我々にあるだらうか。」と疑問をなげかれ、「私達はこの様な古典を通して自分自身の生き方や考へ方を掘んでいけると思ひます。」と話しを結ばれた。次いで日本油脂㈱の上村栄章氏（九州大学農学部大学院修士課程、昭60卒）が登壇された。氏はまづ学生時代「学問に励む」といふことは、万人の苦しみ悲しみを、自分の心の中に人一倍敏感にうけとめ得るやうに自分の心を鍛へていくこと、を意味することではなければなるまい」といふ小田村寅二郎先生の言葉を心の指針にしようと思つたと語られた。その言葉を最近痛切に感じたこととして、病床の父上が氏の送られた手紙を病苦の中でもくり返し読まれたのを見て「私が親を思つてゐる以上に親は私を思つて下さり、自分一人で生きてゐるのではないと実感した。」と父上との触れ合ひを話された。さらにその際同じく病に倒れられた、知人の小田正三氏の母を思つて詠まれた短歌を紹介され「小田正三氏の母上を思はれる心の深さと、私にも心を寄せられる心の広さを感じました。」と語られ、「学問に励む」といふことが己にとちこも



らうとする生活の中より豊かに、また伸びやかにしてくれること」と語られ発表を終へられた。

慰霊祭

森田仁士氏（北九州市立八幡病院勤務・34歳）によつて慰霊祭の説明が行なはれた。その後阿蘇中岳の稜線がわづかに残る夜のしじまの中、屋外の広場に設置された祭壇の前に全員が整列した。まづお祓に代へて、故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の和歌朗詠により慰霊祭は始められた。

次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする、降神の儀が行なわれた。献饌の後、参加者一同を代表して、宝辺正久先生が祭文を奏上、明治天皇・昭和天皇の御製を松吉基順先生が拝誦された。続いて玉串奏奠の後、全員で「海ゆかば」を斉唱、最後に昇神の儀が行なはれ、撤饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は終つた。左に慰霊祭に於ける祭文と拝誦された御製を記しておく。

祭文

炎熱の日はかくろひ草原にそよ風吹きて、ここ阿蘇の野にわれら第三十五回全国学生青年合宿教室を営むものら、奇し火噴き立つ地熱畏みその山裾の清しき広野を齋庭と定めまつりてとこしへに国守ります遠つみ祖達をはじめ国のためにのちを捧げ給ひてわれらが祖国日本を守りまししもろものはらから達のみたまを招きまつりてみたま祭りを仕へまつらむとす。

いぬる年、昭和天皇神去り給ひ、今上天皇御位を践ませ給ふ折しもや歐洲諸国の変動起こりて全世界に波及しつつ地上に生くる者その拠るべき方をさだめむと思ひを潜むる世とはなりぬ。われらいま今の世を感じ考へ互ひに心を語る友を得むとこの集ひに加はりて全日程の半ばに至りしを、ある時は気付かざる用語を正し、ある時は一軍人の生涯に生き

たる心と時代を偲び、また今上天皇の御製に天皇の御心をたづね、また来るべき大嘗祭に伝統文化を守る意味の厳肅さを目覚めしめられつつ心あはせてこの集ひを過ごし来れるさまを畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひみ国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り謹み敬ひ恐み恐みも白す。

明治天皇御製

をりにふれたる

はからずも夜をふかしけりくのためにのちをすてし人をかぞへて

述懐

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめねざめに世をおもふかな

秋夕

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

蟲聲

さまざまの蟲の聲にもしられけりいきとしいけるもののおもひは

紅葉

うつろひて散らむとすなるもみち葉をうつくしとのみ思ひけるかな

昭和天皇御製

社頭寒梅

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり

佐渡の宿にて

ほととぎすゆふべききつつこの島にいにしへ思へば胸せまりくる

稚内公園にて

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

祭り

わが庭の宮居みやゐに祭る神々に世のたひらぎをいのる朝々

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

第四日

(八月八日・水曜日)

講義 黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』に就いて

金文図書出版販売(株) 廣木寧氏



廣木氏は、学生時代、九州大学の信和会で輪読をしてゐた頃の話をされ、「最初、信和会で学んでゐた時、週一回、二時間半は、『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の御本を読まされたが、難しくて感想など一言も言へなかつた。ただ先輩にひかれてこの御本を読み続けた。その後、わかるところだけを何遍も読んでいきました。皆さんも心に残つた言葉を反芻するやうに読んで欲しい。」と訴へられた。

次に、黒上正一郎先生が、御祖父様の遺骨を納められた時の書翰を紹介され、「人生は悲痛動乱

であるからこそ、人生の意味を問ふ学問がある。学問を通し、皆で一つにつながっていく道があるのではないか。この本から、黒上正一郎といふ人の話が聞けるぞと思つた。」と、この御本に対する氏の転機を語られた。そして、「黒上君之碑」を紹介され、「人柄は温雅であり、体は強健ではないが、学を好まれ、道を求められ、睡眠や食事を廢されても後輩の問ひに何時間でも付き合ひ、友人に休養を勧められても意に介さず、学問への苦業を続けられ、そのために僅か三十一歳にして御亡なりになられた。まさに学問に殉じた人だつた。」と述べられた。

更に、聖徳太子の憲法十七條の第十條を紹介され、「人間には、自分より優越した者を認めたくないといふ悪い心がある。しかし我も彼も必ずしも聖人ではない。お互ひに欠陥のある凡夫である。凡夫であるから相共に助け合ふといふその道の体現宣布者が太子であつた。」と述べられた。

最後に、正宗白鳥の対談より、嘗て、ギリシャの感化を受けて、それからサラセンに侵入され、ついにはローマに化せられてしまつたエトルスクといふ国の事を紹介され、「現代日本に於いて、西欧文化を排斥する事はないが自国の文化を壊すものに対しては批判綜合摂取しなければならぬのではないか。」と述べられ、講義を終へられた。

講義 「われらが祖国・日本を、眞の独立国に立て直すには」

国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授 小田村 寅二郎 先生

先生は始めに、「現在日本は、形式的には独立国の形態と体制を整へてをりますが、いざ問題がその中身に及びますと随所でおかしな状況が現はれ、そして状況は今日までそのまま推移してをります。何とか日本を一日も早く本当の独立国にしたいといふのが私の志です。」と前置きされ、御講義に入られた。

続いて先生は、「現代の日本の教育、学問の一般的傾向は、祖国日本のすばらしい歴史、伝統について、かなり自信を無



くしてゐるがなぜさうなつたのか。皆さんはマッカーサーの占領政策なるものについて、概括的には知つてをられるが、具体的にはどういふものだつたのか、それをお知りになつておく必要がある。かつて生きてゐた人が実際にどういふ心持で生きてゐたかを偲ぶ力が学問です。占領政策がどういふものであつたか、それを当時の人々の氣持にできるだけ近づいて追体験して欲しいものです。」と話され、占領政策につき、一つ一つ事例を挙げて説明してゆかれた。

中でも昭和二十年十二月十五日に出された「神道指令」及び翌昭和二十一年一月の「新日本建設の詔書」に関して、「ここで留意して頂きたいのは、この指令を出したGHQ及びその手伝ひに駆せ参じた日本の知識人達は、ゴッドと神の違いを全く区別できないでこの指令を出したといふ事です。キリスト教に於けるゴッドは全知全能の存在です。ところが日本の神様はさうではない。存命中に、実に素晴らしい人物であつたと皆が讚へ親しみ、慕ひ申し上げた人が死後神様として祭られてゐるのが日本の普通の神社です。日本の神がどうして西洋のゴッドと同一視されるに至つたかといふと、明治の始めにバイブルと讚美歌を日本語に翻訳する時に、ゴッドを神と置き換へたためにそこから誤解が発生したのです。(明治の始めの翻訳の時に大失敗をしてつた。文化の輸入に対しての配慮が欠けた。)明治より昔の織田信長、豊臣秀吉の時代だと、ゴッドの翻訳はゼウスとしたのが多い。(少なくともゴッドと神を一つにはしなかつた。)さういふ所からつひに日本の敗戦後神道指令なり天皇に詔書を強要する形になつた事は是非御記憶頂きたいと思ひます。」と強調された。

先生はこの後、我が国の政府は一日も早く占領政策の軛から抜け出し「占領政治終結宣言」を打ち出す事の必要を強く訴へられた。又政府による「宣言」のみでなく、国民の側からの「占領政治終結宣言」への動きも必要であり、その方途を考へる上で思ひ返す必要のあるものとして、フィヒテの「独逸国民に告ぐ」に話を進めてゆかれた。

「一八〇八年ベルリンにナポレオン軍が蹄の音を立てて侵攻してきた時に、軍鼓の音を聞きながらフィヒテといふ四十六歳の哲学者は『独逸国民に告ぐ』といふ大演説をしてゐます。その中でフィヒテが最も主張してゐる事は、ドイツ人の魂が籠

つたドイツ語といふ言語をこの戦争によつて失ふ事があつてはならないといふ事であつて、ドイツ領土を守れといふ事ではなかつた。日本において、私達の祖先達は、心の細やかな動きを表現できる言葉を実に長い間掛けて育み、整へて来ました。先人達の命を籠めた言葉といふ文化遺産を私達は与へられてゐます。私達はさうした言葉に籠められた魂を汲み取る営みを通して自らの心を整へ、鍛へてゆく事ができるのです。さういふ事を可能にして下さつた事の有難さを私達は忘れてゐるではありませんか。ところで過日のテレビ朝日の大嘗祭に関する報道番組は、言語道断な言葉を勝手に自分で作つてしゃべつてゐるだけです。これでは日本の歴史伝統といふものときあふ道は無いでせう。自分で自分の心を閉鎖してゐるのですから。情け無い事です。このやうな事は何もテレビだけに限つた事では無く、新聞、週刊誌の上にも氾濫してゐるのです。といふ事は、現在の日本語は目茶苦茶になりつつあるといふ事です。日本語が目茶苦茶になるとは、その言葉をしゃべつてゐる人の心に何の統一性も、歴史伝統に連ならうとする意志も無いのです。皆さんもこの問題については是非考へて頂きたいと思ひます」と先生は強く訴へられた。

最後に、先生は「今年の秋に行はれる大嘗祭は、大昔からつながつて来た一つの儀式です。儀式の形態、システムその他は、我々の先人達がいのちを懸けて、最もこれがふさはしいと決めて来た伝統です。皆さんと共に、今年の秋の即位の大典並びに大嘗祭が、できるだけ歴史伝統に則して行はれる事を祈念してをります。」と述べられ御講義を終へられた。

創作和歌全体批評

戸田建設(株) 技師 青山直幸氏

氏は先づ、「昨日実際に短歌を作つてみて如何でしたか」と問ひ掛けられた後、「確かに苦しかつたでせう。自分の受けた感動を言葉にしようとしてもなかなか適切な言葉が浮んで来ない。苦しまれたでせうけれども、あれだけの短時間で皆さん



全員きちんと立派に歌を作られました。初めての方がこれだけ立派に歌を作れるといふ事はどういふ事なのでせうか。それは皆様方が歌心といふものを持ってゐるからなのです。日本の古代の人々は、この歌心といふものが人生に於て如何に大事かといふ事を一足早く気付いて、お互ひに歌を詠み交はす習慣を作られました。その中で心を鍛へてゆく事を実践されてきた。この歌心といふ物を皆様もちゃんとお持ちになつてゐる訳ですね。」と述べられて、参加者の短歌の批評に入つてゆかれた。先生は「かういふ歌を読むと本当に楽しくなりますね」「少しわかりにくい表現になつてます」等、作者の気持を推量しながら丁寧に指摘してゆかれ笑ひの漏れる和やかな雰囲気の中で講義は進められた。

最後に先生は、班別で相互批評する上の注意として、「友達の気持に近づいてゆく努力をして頂きたいと思ひます。友達の歌を直すのも、気持を正確に表現するにはどのやうな言葉が最もふさはしいかといふ事を一生懸命考へていくといふ事をやつて頂きたいと思ひます。そして班の皆さんで本当に心の交流を繰返していつて頂きたいと思ひます」と述べられ、御講義を終へられた。

第五日

(八月九日・木曜日)

合宿最終日の朝が来た。前夜は最後の夜の集ひの後も、各班で心尽きせぬ語らひが持たれたらしく、夜遅くまで明りの灯つてゐる部屋が多く見られた。四泊五日に亘る合宿教室の日程も、あと半日を残すのみである。参加者一同は、阿蘇の山々がさやかに見ゆる集ひの場所で朝の爽かな空気を胸一杯に吸ひ込み、声高らかに国歌を斉唱し、力一杯に体操を行った。

全体感想自由発表

閉会式も間近に迫り合宿教室を通して各自の所感を全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間となつた。始め

に合宿教室運営委員長、今林賢郁氏（新日本製鉄(株)勤務）により次のやうな所感が述べられた。「この合宿教室を通して皆様は相手の言葉を正確に聴き、自分の思ひを正確に語ることがいかに難しいかを痛切に感じられたと思ひます。しかし相手の言葉を正確に聴き、正確に語ることが学問の基本姿勢なのです。」と語られた後、氏は「日本人とは一体何か」と問はれたら『それは俺だ』と僕らはなりたいたいものです。この為日本といふものを考へる糸口だけは提供しました。後は皆様がそれを自分のものにするため勉強して下さい。今後この合宿に参加する時は、自分の言葉で話さうといふ氣持で来て下さい。」と語り御話しを終へられた。

続いて、参加者の感想自由発表となつた。参加者の胸には、どのやうな思ひが渦巻いてゐるのだらうか、参加の動機はそれぞれ違つても、この五日間寢食を共にし、友の言葉に、そして先人の言葉に心を寄せ合つた体験は、各自の心にしつかりと刻み込まれたに違ひなかつた。一人の学生がこみ上げる思ひのままに登壇して発表を始めると、一人また一人と次々に壇上に立ち、所感を披瀝していつた。「和歌相互批評では本気で歌を詠むと相手の心と通ひ合ひ和歌を作るのが楽しくなつた。また自分の心を言葉で言ひ表はせた時はうれしく思へた。」「自分の言葉で語つた人のまごころを感じられた。」「班友の温かな心で胸襟が開けた。」「班友との付き合ひは時々苦しいこともあつたが、自分と相手の氣持が通じ合へるのは相手の心を偲ぶ時であつた。」「心から深く物事を考へてゐる合宿であつた。」「小さな勇氣を持つて友達作りをしてゆかう。」「時には涙を浮かべ、時には笑顔で心からの思ひを率直に語る友らの真摯な姿は、実にはすがすがしく、聞く者に深い共感と感動とを呼び起した。

感想文執筆

全参加者は班室に戻り、合宿感想文の執筆と第二回目の和歌創作にとりかかつた。走馬燈のやうに蘇つてくる合宿での様々の思ひがうちつけに綴られた。ここにまとめた「感想文集」はその文章と和歌を編集したものである。

全参加者が心を合はせ精魂を傾けて営んできたこの合宿教室も、最後の日程である閉会式を迎へた。先づ全員で国家を斉唱した後、参加学生を代表して九州大学四年の三沢茂美君が「この合宿教室を通して色々学ばれたと思ひますが、私は占部先輩が御紹介されました廣瀬中佐の父君の訃報に際し、悲しみの中にありつつ、お母様や使用人にまで心が働く廣瀬中佐の文章に接し、人の悲しみのわかる豊かな人となりたく思ひます。合宿を通して心に残つた事や言葉を心にとどめ今後もお互ひ励まし合ひ乍ら学んで行きませう。」と挨拶した。

続いて主催者を代表して、国民文化研究会事務局長、長内俊平先生が、「この四泊五日は一言で言ふならば、おふくろの味を求め合ふ営みであつたと思ふ。この合宿を通して祖国日本には祖国のおふくろの味があり、我々の血の中には祖先が赤々と流れてゐることを信じ氣付いてほしい。」と語られた後に、「志は一度立てたからといつて、変はらないではありません」と話され、御孫さんから合宿地の先生の許にとどいた御手紙を紹介されながら「この一通の手紙がどれだけ私の励みとなつたのかわかりません。皆様もどうか二人とない友達に手紙を出し志を励まし合つて下さい。私達は素直なお一人／＼の言葉にこの合宿を続けてゆく勇氣を与へられたことを感謝します。」と語り閉会の挨拶を終へられた。

その後、全員で「神州不滅」「進めこの道」を斉唱し、亜細亜大学三年の茅野輝章君が力強く「閉会宣言」を行ひ、四泊五日に亘る合宿教室は無事全日程を終了した。

式の後、お互ひに別れを惜みつつ、来年の再会を約して阿蘇の地を後にしたのであつた。

助言者の紹介

(元)日特金属工業(株)常務取締役

(元)熊本県砥用町立砥用東中学校校長

人権擁護委員

(株)中央塩ビ製作所 代表取締役

九州女子大学教授

(元)政法大学 人事部長

(株)宝辺商店 代表取締役

舞岡八幡宮 宮司

日本銀行監事

佐賀県立佐賀商業高校講師

(株)不動産コンサルタント 代表取締役

浄土真宗本願寺派光隆寺僧侶

(株)サンデン交通取締役兼(株)山陽自動車学校社長

熊本市立湖東中学校校長

航空自衛隊航空教育隊生徒隊第一教育課

新技術開発事業団 管理部署事業課 課長

(株)日商岩井大阪本社・エネルギー第一部部长

拓殖大学外国語学部教授

(株)講談社広告局広告企画部部长

富山県立富山工業高校教諭

(株)BBS全明 代表取締役

東急建設(株)東京支社建築部 審査課課長

福岡県立新宮高校教諭

中島法律事務所弁護士

亜細亜大学助教

熊本市役所 技師

熊本県立熊本第二高校教諭

熊本県立球磨農業高校教諭

山口県立高森高校教諭

久留米大学附設高校教諭

金文図書販売(株)教育部青雲学館中央青雲学館館長

福岡県立水産高校教諭

大分県立大分豊府高校教諭

(株)日本興業銀行広島支店営業課課長代理

大阪府立交野高校教諭

九州大学医学部循環器内科

倉岳町立倉岳中学校教諭

(株)日立製作所エネルギー研究所第三部三二四ユニット

福岡県立玄洋高校教諭

出光興産(株)店主室

岸本 弘

中田 一義

奥 富 修 一

小野 吉 宣

中島 繁 樹

東中野 修 道

折 田 豊 生

白 濱 裕

田之上 正 明

實 辺 矢 太 郎

名 和 長 泰

廣 木 寧

菅 原 亨 二

石 井 雅 晴

小 柳 志 乃 夫

絹 田 洋 一

長 澤 一 成

松 岡 幹 男

松 井 哲 也

矢 永 誠 二

磯 貝 保 博

津 田 忠 雄

福岡市立奈多小学校教諭

タマポリ(株)関東事業部ラミネート営業部

早稲田大学大学院

(株)竹中土木 工事本部工事部工務課

福岡県立山田高校教諭

(株)不動産コンサルタント

九州大学大学院国文学科

福岡県立玄界高校教諭

船橋市立古和釜小学校教諭

日本青年協議会研修局

神奈川県立津久井高校教諭

(株)東和銀行昭島支店融資課

小緒市役所総務部税務課主課

熊本県文化課 嘱託

愛媛県八幡浜地方局総務福祉部徴収課

是松 秀文

吉川 理夫

八木 秀次

國分 俊喜

與島 誠英

松吉 基光

竹内 昭彦

日比生 哲也

竹内 孝彦

佐瀬 竜哉

大日方 学

長場 真一

中澤 榮二

久保田 真

鳥生 秀雄

航空自衛隊幹部候補生学校(学生)

(株)橋本染工 社長秘書

合宿運営委員

八木 秀次

指揮班

矢永 誠二・森田 仁士・吉川 理夫・竹内 孝彦

大日方 学・鳥生 秀雄・佐藤 信知・國分 俊喜

事務局

名知 長泰・磯貝 保博・石井 雅晴・菅原 亨二

長場 真一(事務協力者)・蘇原 幸枝・田籠 榮一

(本会職員)福岡県立城南高校二年 稲田 靖子・

福岡県立明善高校二年 合原 順子・福岡県立新宮

高校一年 西崎 将・福岡県立新宮高校一年 長谷

川 和也

記 録 班 松吉 基光

写 真 班 S W 佐藤写真事務所 佐藤 道明

佐藤 信知

橋本 加枝

寧・與島 誠英・

八木 秀次

矢永 誠二・森田 仁士・吉川 理夫・竹内 孝彦

大日方 学・鳥生 秀雄・佐藤 信知・國分 俊喜

名知 長泰・磯貝 保博・石井 雅晴・菅原 亨二

長場 真一(事務協力者)・蘇原 幸枝・田籠 榮一

(本会職員)福岡県立城南高校二年 稲田 靖子・

福岡県立明善高校二年 合原 順子・福岡県立新宮

高校一年 西崎 将・福岡県立新宮高校一年 長谷

川 和也

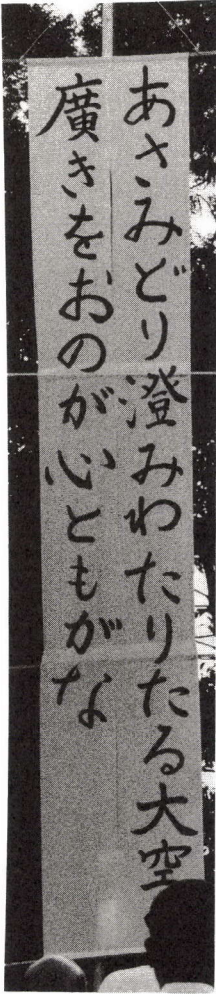
記 録 班 松吉 基光

写 真 班 S W 佐藤写真事務所 佐藤 道明

走り書きの感想文集（各班別に集録）

これは閉会間ぎの一時余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてある和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のもので、この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回目の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してある跡が分りいただけることと思ひます。



第一班—男子学生—

“体現”といふことを思ふ

(早稲田大学 政経 四年 鶴野光博)

今回出会った班友は僕の至らぬ所、勉強の仕方の弱い所を色々と感じさせてくれる人達だつた。班別討論での意見交換は一人一人の個性や普段の生活が話す言葉の内に感じられて、聞きながら僕はちゃあ俺は一体何だらう、どんな“確かなもの”を自分の内に持つてゐるのだらう、と問ひかけざるを得ぬ気持ちにさせられた。“体現”といふことを思ふ。小田村先生方は学生の頃毎朝御製拜誦をされてゐたといふ。御講義を聴いて天皇の御歌はいいなあと思ひ日本文化の中心に天皇が居られるといふ話に納得するならば、僕は天皇の御言葉に寄り添ふ努力をするべきだらう。しかし、今までやつてゐないしこれからそれを続けていけるといふ自信はない。だが、班別討論で喋つた自分の言葉を嘘にしない為にはどうしたらよいか。「日本とは何かと聞かれたらそれは私です。と言へるやうになつて欲しい」と今林先輩は言はれたが自分はこの言葉に随分遠いやうな気がする。

全体感想自由発表にて

班の友壇上に上り感想を述べゆく見れば嬉しかりけり

班員と語り合えた事は良い経験になつた

(防衛大学 理工 二年 濱口和久)

今回の合宿をふり返り思う事は、私と同じ考えを持つ人がいるんだなあと思つた事です。日本の伝統や天皇制について諸先生方の講義を聞き、その後の班別討論を通じて班員と語り合えたことは良い経験になつたと思います。又占部先生の講義を聞いていて、私も将来幹部自衛官に成る一人として広瀬中佐のような軍人(自衛官)に成れたら最高だなあと思います。小田村先生の講義は私が常日頃考えている事なので大変な共感を覚えたし、これから私自身も積極的に勉強して行きたいと思います。この合宿で初めて和歌を作つたわけですが、今回の和歌創作を通じて和歌を作る喜びや感動を得ることができたので、今後は何かの折にふれて和歌を作つていきたいと思ひます。

班長にあてて

班長の苦勞を思ひ顔を見て我の気持ちには感謝の思ひ

日頃感じていた事の裏づけをしてくれた

(早稲田大学 教 二年 玉置泰史)

友人のK君から「お前もぜひ来い」とさそわれて今回はじ

めて参加致しました。お金のない僕のために合宿費を貸してくれたK君を信じて本当に良かったです。正直に言いますと少しばかり国歌に対して疑問を抱いていた僕ですが、朝の集いで歌っている時、伴奏の中の「ゴン、ゴン」という音が自分の心に鮮烈に響いて来たのを実感できたので迷いが一扫されてしまいました。それ以降は班別討論の時でも自分なりに皆の気持ちを考えながら言葉を一つ一つ考えて発言できる様になったと思います。質問と最後の感想を発表できたのは、小田村先生のご講義でやっぱり国文研の人達の考えていらっしやる事が自分の漠然と日頃感じていた事の裏づけをしてくれた事が大きいと思います。これからは、僕なりに小田村先生のお言葉を頼りに行動していきたいと考えています。実は合宿に出発する一カ月前頃から東京裁判史観等に対する疑問を皆にもってもらえる様に友人と学生の全国的な運動を僕らなりに起こそうと思ひ、行動しています。今回の合宿での全ての体験がその成功を僕をして確信させます。

合宿、特に班別討論を通して

人は皆全てにおいて違へども共に持ちたる日本の文化

僕もまた背負ひしものは君と同じ言葉を尽せばわかりあふはず

素直な心がよみがえってきた

(日本大学 文理 一年 真田詳三)

班別討論の時、私が本当の気持ちをうまく表わすことがで



カメラレポート1

開会式。いよいよ合宿教室の幕は上がった。緊張した面持で国歌を斉唱する。

きない為、それを言わずにいってしまうことなどあったのにくらべ、みんなが必死に自分の気持ちをおかつてもらおうと努力していたのを思うと努力しなかつた自分がなさげなく、話を聞いていても皆それぞれ問題意識を持ち自分の目標に向かい普段から努力していることが感じられ、だからだと生活を送つて来たことを反省しました。反省するとともに無気力になつていた私にとっては大変良い刺激になり力づけられました。

最後の全体感想発表の時は非常に感動し、自分の中にかくれていた素直な心がよみがえつてきたように思いました。

壇上で涙を流し語られる言葉は私の心を晴らす

短歌相互批評はとても楽しかった

(拓殖大学 外国語 一年 菅原慶一)

はじめの方の講義は難しくてよくわからなかつたので班別討論の方も意見が的を得ていないことが少々ありました。そんな時僕は家に帰りたくなります。しかし第四日目の短歌相互批評はとても楽しかったです。おかげでこの合宿全体が楽しく思われてなりません。大学では討論など一度もやらず変な話ばかりしていました。この合宿に参加してこれが討論というものかと思ひ自分の無知に気づきました。

つらかつた心も時が経つにつれわれの心は楽しくなれり

短歌を詠んでいきたい

(九州大学 法 三年 大瀬博幸)

短歌相互批評で自分の心が何にひかれていのかはつきりとせず班付の田之上さん、班長の鶴野さんをはじめ班員の方々にいろいろと批評してもらつてうれしかったです。と同時に自分の心というのがいかにも感じる力が無かということを知りました。ですから班員の人たちの批評もすることができなくて辛かつたです。でもその事をよく考えると「言葉」というものに対して、自分がいかにいい加減に使っているかということに突き当たると思えます。だから帰つたら短歌を詠んでいきたいと思ひます。

短歌相互批評の折に

わが友に批評をされて気づきたるわが短歌への心得違ひを

勉強の姿勢が問われた

(同志社大学 工 三年 村木隆広)

今回この合宿には三度目の参加で、自分自身最初あまり行く気がせず重苦しい気持ちであつた。しかし合宿が進み班員一人一人と心が通ひ合つていくうち心の底からやっぱり来て良かったという思いがわきあがつてきた。とりわけ班別討論では全員が意見感想を言うような感じではなく、何人かは活

発に意見を言うが残りの人はほとんど発言しないといった感じで、なかなか一人一人の思いというものが感じられず、どうしたら互いに心を開き通い合すことができるのだろうかとも最初思っていた。しかししだいに自分が相手の気持ちを、思いやるということが欠けていたことに気づかされた。また講義で一番印象に残った言葉として「学問に励む」ということは万人の苦しみを自分の心の中に人一倍敏感にうけとめ得るように自分の心を鍛えてゆくことを意味することではなければならないまい、といふ小田村先生の言葉であるが今までの自分の勉強の姿勢が非常に問われた思いがした。本当に今合宿を通じて心を鍛えるということの難しさ、また少ししか鍛えられないような気がするが、少しでも相手の心に感じることができたことに喜びを感じる。

友どちと交す言の葉少なければその言の葉にあたかき感じぬ
言の葉の上では議論になりにしが国思ふ気持ち互ひに感じぬ

充実した合宿だった

(拓殖大学 外国語 四年 鎌田淳一)

昨年の合宿同様とても感動しました。まず一つには山内先生の講義に際してですが、国家は現在生活する国民のみで構成されているのではなく、我々の祖先やまた将来生まれてくべき我々の子孫も国民であるという、柳田国男の言葉なのですが私自身とても感銘を受けました。我々の祖先が築き上

カメラレポート2



主催者を代表して、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「この合宿では、一人の人間として将来自分の生活にプラスになるやうに学んで欲しい」と挨拶された。

げて下さった日本の伝統または文化を我々を通じて我々の子孫へと受け継いでいってこそ素晴らしい国家が誕生するのではないでしょうか。とかく国際化の勘違いだと先生はおっしゃられて居りましたがまさしくその通りだと共感いたしました。外国の文化を取り入れて行くだけでは真に独立した日本にはなりえないということにです。結局一つしか書けませんでしたが本当に充実した合宿となりました。

夜の集ひにて

学友と声高らかに歌ひたる応援歌の音に胸高鳴りて

第二班—男子学生—

いろいろな立場の人の考えを聞けた

(拓殖大学 外国語 一年 野崎恭裕)

この合宿は結構楽しい合宿だった。自分は天皇制をそれほど大切とは思っていなかったが、昭和天皇の人柄などについて悪い固定観念を持っていることに気づいた。そして、いろいろな立場の人の考えを聞けたことに、合宿を支えてくれた人々に感謝したい。ひとつわかったことは、いろいろな立場でそれぞれの考えを持った人を認める心の広さを持った上で「志」を立てることである。そうすることで廣木寧氏の講義

された黒上正一郎先生のおっしゃられた「志」の立て方に沿うのではないかと思った。

本心を語りたる時の爽快さは言葉なきほどうれしきものかな
来しわけを恥かしまじりにうちあくればあたたかく笑む先輩ありがたし

日本はこのままではいけない

(早稲田大学 教育 一年 真庭宜幸)

私は日本に生まれ日本で育ちそして日本語を話します。私が日本を愛する理由はそれだけで十分です。私が天皇を慕う理由もそれと全く同じです。長内先生はこうおっしゃいました。「お母さんが好きな理由を説明できるかい。私が天皇様を好きなのもそれと同じなんだよ。とにかく天皇様が好きなんだよ。」私の母は私を愛してくれています。そして天皇陛下も我々国民を愛して下さっています。それは御製を詠めばわかります。そして映画「第百二十五代 天皇陛下」を見て終戦の時に今上陛下がお書きになった作文に「新日本建設の責任は私の双肩にかかっています」というお言葉のあることを知った時、私は涙をおさえることができませんでした。天皇陛下ほど真剣に日本とその将来について心配されている方が果たしているでしょうか。このままでは日本は、日本の文化・日本語は滅びてしまうかもしれません。もしそうなったとしたら、我々日本国民は天皇陛下に、そして祖国のために命を捧げていつた英霊たちに何とってお詫びをしたらよい

のでしようか。そう思うとたまらなく涙がこみ上げてきます。日本は今のままではいけないのです。その危機感を感じられただけでも大きな収穫だつたと思います。

時忘れ友と語りて気がつけば一番鶏の鳴く声聞こゆ

日本の国に生まれしこの身なればわれは護らん大和島根を

慰霊祭の折に

国のため命ささげし英霊の御霊安かれとわれは祈りき

御製詠み大御心を感じればおのが小さき恥つかしく感づ

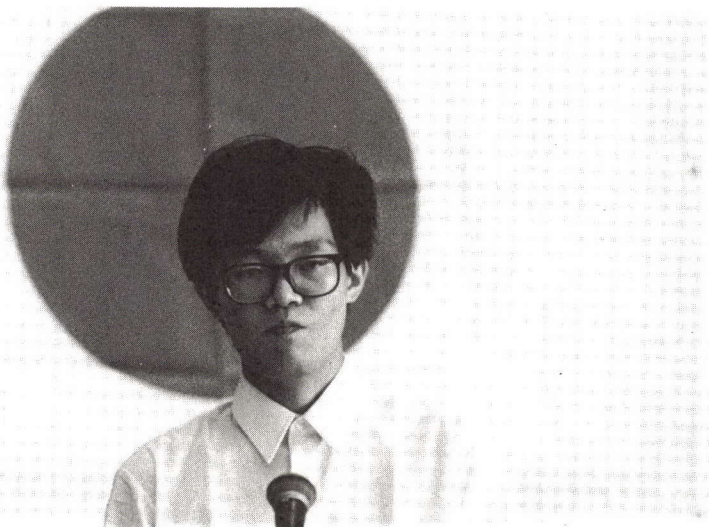
班別討論で感動した

(九州大学 法 二年 花田芳夫)

この合宿の目的は学生に対し知識を与えることでは決してなく、物事を正しく見る目を養い、心を鍛えるということだと思ふ。講師の先生方はたいへん多くのすばらしい言葉を使われて講義をされるが、その言葉をそのまま暗記して持ち帰るのではこの合宿は意味をなさない。大切なのは、その言葉から自分が何を感じとるかである。「あの先生のお話には感動した」「あの和歌を詠んだ時は涙が出た」といった心の働きが一番大切である。実際、講義や歌から得た感動というものは理屈では説明できないし、頭で考えるものではないからだ。合宿教室に参加するのは三回目だが、班別討論で何度も感激・感動し、とても満足した。

班別短歌相互批評にて

カメラレポート③



参加学生を代表して、早稲田大学四年鶴野光博君は「合宿の中身を本当に作っていくのは僕たちです。本音を語り合ひ、この合宿をお互ひに充実したものにしませう」と呼びかけた。

友どちの言葉を聞きてその思ひ皆で偲びつ詠み直しけり

自分の感動を正確に伝えたい

(亜細亜大学経済 二年 福富賢介)

自分には高校の時から負い目を感じている事があつた。修学旅行の際に原爆養護老人ホームを訪問して被爆者の方と話をした時のことを、級友に話さなければ、と思つていたのにうまく言葉にできず、また感想文集に載せる文章もまるで解説のような感情の伝わらぬものになつてしまつた。そして今回の合宿で、昭和天皇の御製や聖徳太子の御歌に触れた時に自分には本当に感じる心がないのではないだろうかと思ひ、班員にその事を話した。すると「本当はかなり感じていたのに、言葉にできなかつただけだよ。」と言つてくれた。自分はこの言葉に救われた思ひがした。高校時代の思ひは今でも時々蘇つて来る。それを少しでも言葉にできるよう努力したい。そして少しでもいいから、他人に自分の気持ち伝えていきたい。

胸の中に伝へんと思へども言葉にするはいと難しき

偏つた情報で物事を判断していた

(拓殖大学 外国語 二年 矢嶋弘幸)

僕はこの合宿への参加はあまり乗り気ではなかつた、とい

うのが本音でした。ところが討論をくり返すうちに、自分の勉強不足を思ひ知らされ、また偏つた情報だけで物事を判断していた自分に気が付きました。そして考え方の違う人の話でもしつかり耳を傾けることを学びました。このことは違う視点からものを見て、柔軟な発想をするためにとても重要なことだと思ひます。また最後の夜に行なつた短歌の相互批評では、一人一人の素直な思ひをこめた歌を詠むためにみんなが助け合つていました。この合宿でこのような体験ができると思つてもいませんでした。短い間でしたが大切な事を学んだように思ひます。ここで得たことを今後の生活で生かしていきたいと思ひます。

友の思ひ写し出さるる言の葉に心奪はれ疲れ忘る

「占領政治終結宣言」実現へ努力したい

(大分大学 工 三年 佐藤健之)

今回初めてこの合宿に参加させていただき、そして大変すばらしい御講義を聞き、大変良い体験をさせていだいたことに感謝申し上げます。御講義を拝聴して共鳴することこの上もなかつたのですが、班別討論で語ると班員の方々に激しく反論されてしまい、自分の天皇の見方は間違つていたのかとか、自分のしゃべり方は味気ないとか言われて、殻にこもることもあつた。しかし、和歌批評の時は、班員みな心がこもって添削に取り組み、また自分も取り組めたことを大変嬉し

く思いました。この合宿で聞いたすばらしい話を大学の友に語ってゆきたいと思いました。特に小田村先生の話された「占領政治終結宣言」実現に努力して行きたいと痛切に思いました。

自他共に心かたむけ添削する一首の和歌に一体となる

真心を尽して友に語りかけることの素晴らしさ

(鹿児島大学 農 四年 原 一文)

私は今回でこの合宿教室は三回目の参加になります。この合宿に参加していつも思ふことは、ここは人の心にたまつてゐる日頃は気づかない心のゴミをきれいに洗ひ流してくれる所だなあ、といふことです。先生方の誠意溢れる御講義、班別討論、短歌創作等、密度の濃い時間を過していきますが、その中で一貫してゐるものは、人の真心から出づる言葉を全身で聴き、かつ、真心を尽して友に語りかけるといふことだと思ひます。この合宿教室で先づ先生方がそれを実践され、そして我々が班長を中心に必死になつて心を働かせて語り合ふ。本当にこのやうにすばらしいことにはないと思ひます。私は二年前初めて参加して、このやうな学び方を身を以て教へられました。そして今、私の回りには十名の仲間がゐて、この仲間は二年前私がこの合宿に参加しなかつたならば、ゐなかつたであらう仲間であります。このやうな、仲間と真の學びの道を私に興へて下さつたこの合宿教室並びに国文研の先

カメラレポート4



合宿運営委員長である新日本製鉄㈱部長代理・今林賢郁氏は、合宿運営を支へるスタッフの紹介と四泊五日間の研修を過ごす上での心得を述べられた。

生方に心より感謝してをります。有難うございました。

全体感想自由発表の折に語りゆく吾が友、指宿みき姉へ

とつとつこのひととせの辛きをば友は語りぬ涙流して

君とともに語り悩みし吾なればその言の葉に涙流るる

ひととせを耐へ来し君の顔やがて笑顔となりぬ壇の上にて

自分のいたらなさを感じた

(中央大学大学院 博士前一年 土井郁磨)

班長をさせていただいたものの、班員に思ひのたけを喋つてもらへたかどうか心もとない。又、御講義の内容を把握してもらへてゐるかどうかも疑はしい。討論では色々意見を出してもらへたものの、合宿の内容を消化し切れるやう手伝へなかつた。又班別の短歌相互批評の時も、班員の短歌を直してあげることなどとても出来なかつた。しかし、班員の原君が、他の班員の気持ちに沿つて語りかけ、僕の足りない点を充分補つてくれた。その姿に接する度に自分のいたらなさを感じ、頭張らうといふ気持ち湧いて来た。

班別討論の折

言の葉につまりて話のできぬ時語りてくれる友の有難し

第三班 男子学生

心のこもった表現ができるよう生活していきたい

(西南学院大学 経 四年 田崎恭士)

三度目の合宿で、自分は分っていないことが分かりました。聞くこと、話すことに、もっと注意すべきだと感じました。飾りはしないけれど心のこもった表現ができるように生活をしていきたいです。本当の言葉を聞きたく、本当の言葉を話したいと思います。班友、参加者、先生方、関係者の皆様、ありがとうございます。

阿蘇に来て胸はずませてタオル持ち友とつかりしラジウム鉱泉

参加してよかつた。来年もまた来ます

(早稲田大学 教 三年 山下拡男)

一番心を感じたのは「全体感想自由発表」でした。この合宿に参加して先生方の御講義を聞きまた班友の語るのを聞いて、思うところ、感じるところ多くありました。壇上で友たちの語るところはみな、僕自身が切実に思うところでありました。班も違い言葉を交わすこともなかつた仲間の語る思いがなぜこうも自分と同じであるか不思議であり、また何かしらうれしくもありました。

僕自身何度壇上にながろうと思つたか。言いたいことがたくさんあるが語るべき言葉が出てこず、とにかく今一番強く

感じ思っていることを話そう、そう決めました。「この合宿に参加してよかった。来年また来ます」と。けれど最後の発表者の指名になっても胸の動悸が激しくなるばかりで、最後の人が指名された瞬間、びくりと心臓が驚いたぎり「ああ、しまった」との思いがこみ上げて来ました。

来年は大学四年です。学生としては最後の合宿になります。きつと壇上へ上ります。

全体感想発表の折りに

壇上ゆ思ひを述ぶる友どちはこみ上げるものこらへ居りたり
阿蘇の地に集ひし友らのせつせつと語る思ひの胸に迫り来

鶴野先輩に

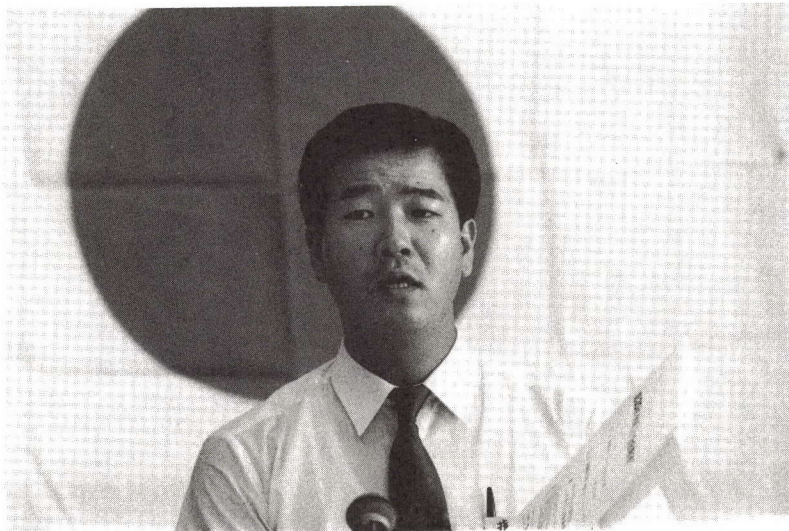
合宿を拒みし我を誘はれし心を今はありがたしと思ふ

逃げていた自分に憤りが込み上げてきた

(香川大学 農 二年 森田真史)

今まで会ったこともない人達と寝食を共にし、自分の意見を出し合って、とことん話し合う。不断の学生生活ではとても起こり得ないような経験をさせていただきました。世の中にこんなな社会の事を真剣に考えている人もいるんだなと感動させられました。そして自分がとても情けなくなってきました。こんなな一所懸命になつて学生生活を送っている人がいるのに自分はなんと甘ったれた学生なんだと思われてきたのです。大学生になつて一年と半年が経つたわけですが入学

カメラレポート5



指揮班長である福岡県立玄洋高校教諭・矢水誠氏から合宿教室全般に関する諸注意がなされる。

した頃に持っていた向学心というものをすっかり忘れてしまいました。勉学というものの苦しさから、楽な方、楽な方へと逃げていた自分に対しての憤りが込み上げてきたのです。この合宿が終わって数週間ぐらいは向学心を保ち続けることができるでしょうが、またすぐ苦しくなつて逃げだそうとすると思います。その時は、この合宿で出会った方々の勉学に対する誠実を思い出し、逃げ出さないようにしたいと思いません。

同輩らをみて

世の中を真剣に見るまなざしに我のまなこのにがり悲しき

班員の率直なことばが嬉しかった

(亜細亜大学 経営 三年 佐藤順一郎)

最初の頃の討論では、班員が自分から意見を言つてくれるということはほとんどなかった。どうして何も言ってくれないのだろうと随分悩んだ。そんなことを思っているうちに、自分が一年生のとき、初めてこの合宿に参加した時のことを思い出した。あの時は先生方のご講義が分からず大変苦しくそして何も言えなかった。多分彼らもわからないことが多くて苦しいのではないか、そんなことを思った。しかし日がたつうちに、口数は少ないが、自分の疑問点を率直に出してくれる班員も出て来た。僕は大変嬉しかった。彼ら是一所懸命考えてくれていたのだと思つた。

来年もまた班長をすることになるかもしれない。班員の疑問に少しでも手助けしてやれるように勉強して出直したい。

田崎先輩へ

いつの日か再会せむ日があらばまた共に語らん海舟のことを

森田君へ

率直におのが疑問を語りくる後輩の目をゆめ忘るまじ

幸君へ

東京に来ることがあらばわが寮に寄りてくれればうれしと思ふ

森君へ

面白き話の数々飛び出して班友らは皆大笑ひせり

吉岡君へ

胸をはり元寇歌ふ後輩の姿に九州男児を思へり

山下兄へ

どれほどに心強きか同輩の我が班の中に居てくれしことが

松井さんへ

いつもいつも兄貴のごとく三班の友達のこと見守りにけり

仲間と親睦を深めることができた

(拓殖大学 外国語 二年 森 洋一郎)

僕は期待よりも不安の方が多く、この合宿にやって来ました。仲間たちと話し合うことができるのだからかと不安な気持ちでいっぱいでした。初日の日に班の仲間と会いましたが、なかなか話すきつかけがもてず沈黙が続いてしまいました。講義にしても自分はあまり勉強していなかったので難し

く感じ、合宿の雰囲気全体が重々しく感じられ耐えられなくなることもありました。けれども、せっかくこの合宿に参加したのだから何か一つ得るものをもって帰ろうと思い、自由時間や夜寝る前などにいろいろ笑いな話などをふくみながら積極的に話をしました。それで結構みんな笑ってくれ、それからはみんな沈黙もなしに和気藹々と話すことができました。結局この合宿に参加して日本のことなどあまり深刻に考えることができませんでした。仲間たちと夜おそくまで和気藹々と話すことができたことで親睦を深めることができ、得るものがあつたと思えました。

すみわたる空は晴れても外へ出ず部屋にこもりて友と語りぬ

人生の再出発が出来そう

(広島大学 理 一年 幸 紀宏)

この合宿に初めて参加する私としては、合宿の意義、内容目標等、そういうものをあまり把握出来ていずに阿蘇に来て非常に不安でいっぱいでした。しかし四泊五日のこの合宿を終えて、自分にとって本当に様々な面で勉強になりました。私は内気で自分というものに自信がなく、又生きがいを見つけない事が今まで出来ず、大学生活に対して充実感が感じられず、ただ世の中の流れに身を任せて生きてきて、自分が本当に嫌になる思いでいました。そして合宿が始まって、先生、先輩の方からの熱意のこもった講義、講義の感想・意見を述

カメラレポート6



合宿導入講義。神奈川県立湘南高校定時制教諭、亜細亜大学非常勤講師・山内健生先生は「事実を知らない知らされないが為の勘違いが広がり、マスコミがそれを助長してゐる」現代日本の状態を、元号や平和憲法を例に上げながら指摘された。

第四班 男子学生

生まれて初めて心が洗われる思い

(長崎大学 工 一年 來島正幸)

べ合ひ考え合う班別討論、自分の感動を素直に詠う短歌創作等を通して、私は、今まで自分の内にあつた汚れたもの、他人まかせであつた事、日本社会に対してほとんど関心を持たなかつた事、些細な事でも感動すると、他人にばかりにされるのではないかという思い等々、そういうものが自然に洗い流されて、今は、すがすがしい、新鮮な気持ちでいっぱいです。講師の方々のあまりの熱弁に自分も共感し、また、ハードスケジュールでしたが充実感を覚えました。生きがいや大学生生活の過ごし方について結論は出ませんでした。そのヒントになるものを得たような気がします。今日から人生の再出発が出来そうです。是非参加者全員に感動を与えるこの合宿をずっと続けていきたいと思います。

五日間ふりかへりみれば早けれど呼び覚まされし感ずる心を

己の勉強不足を痛感した

(九州大学 工 一年 吉岡良太)

この合宿においては冷静な観察者たらんと思つていたのですが、演壇にお立ちになられた諸先生方のお話には甚だ啓発される所が多く、又、己の勉強不足を痛感させられ、ますます一層の努力の必要(若輩ですから当然ですが)の思いを新たにしました。

時たちて今や親しき友となりぬ始めは見知らぬ人なりしかど

最近愛国心などについて考えつつありましたので、この合宿の講義は、それほど抵抗なく受け入れることができました。そのおっしゃられた事を自分で文献等を探して調べ、確かめていかねばならない、と班別討論で教えられました。講義で聞いた事をそのまま鵜呑にして人に話しているなら、その人は単なるスピーカーでしかない。天皇制の問題、戦争責任の問題等にしても、もつと過去の事実を調べ出さないと正しい結論が出ないと思つた。その結論が出るまで口をふさいでおくほどの勉強量が要る。それが学問だと思つた。班別討論で人から反論される中で、自分の弱点がありありと見えてきた。生まれて初めて心が洗われるような、又心が豊かになりつつあるような思いがして本当にうれしかった。

全体感想発表の時思ひごと

決意あれど人の前では言ふだけの勇氣を持てぬつらき残り

いつの日か我も言はむと思へども今はすべなくもどかしきかな

概念の世界で踊っていた自分が恥ずかしい

(拓殖大学 外国語 二年 大倉裕雅)

初めに講義を聞いた時、私が考えていた事とかけ離れているのに驚かされました。国際化という言葉は全く逆の意味で考えていたのです。そして班別討論で、日本に限らず、中国、韓国等世界各国の理解が必要なのではないか、その上で天皇、大嘗祭の意義も認識されるべきだ、と私の意見をぶつけてきました。その時加納先生が、何も分かっていないと涙を流しておっしゃいました。その時はただ驚くだけでしたが、後にこの合宿に参加している先生方の学識の深さに感銘したのもこのことがきっかけでした。概念の世界で踊っていた自分が恥ずかしくさえ思いました。そして短歌相互批評では、私が二十一年間生きてきて初めて、友情というものを感じさせてくれました。これから加納先生の著書を読んでいき、これを糧にして真の知識と思想をみつけていきたいと思う。

廣木先生の御講義をききて

一瞬の時のあひまに散り行きし父の生きざま今思ふかな



講義の後には各班に戻り、講義のポイントを確かめ合ひながら感想や疑問を卒直に発言するための討論の場が設けられてある。

カメラレポート7

後で分かるかもしれない

(亜細亜大学 経営 三年 石川純也)

この合宿に参加して、通常の生活では学べない事、ふれな
いような事を勉強しました。特に聖徳太子等はあまりかかわ
りがない人だったので、太子の御歌を読み、語り合つて
知識が増したと思えました。しかし正直なところ古文がいや
であつたので、輪読にも身が入らなかつた。また講義が多
く、いろいろな意見を聞くことができた。天皇について特に
いろいろと知る事柄があり、多少成長したと思う。ただ皆さ
んは感動したと言われたが、自分としてはそうではなかつ
た。しかし今はそうではないけれども、後で分かるかもしれ
ないとも思う。

五日間学びつづけたこの土地を去りゆくとき来ぬさびしく思へど

寝ないで友の歌に心を寄せていった

(亜細亜大学 経営 四年 岡山英一)

今年は班長、朝の集ひの司会と大きな役を引き受け、毎日
気が抜けない合宿でしたが、戸惑ひながらも精一杯やつたつ
もりです。班内では初め発言が少なかつたのですが、短歌相
互批評の時には、相手の心持ちを察し、そこで自分ほどのや
うに思ふかをぶつけていく雰囲気になれたと思ひます。合宿

日程も終はりの方で疲れてゐるにもかゝらず、寝ないで友
の歌に心を寄せる努力をしてくれたこと、そして班員それぞ
れの個性がそのまゝ現れてゐる歌を全員が詠み上げられたと
いふ事、それが私はとても嬉しかつたです。上手くないかな
い所もありましたが、班友、国文研の先生方、朝「おはやうご
ざいます」と元氣にあいさつしてくれた皆さん、さういふ
方々の元氣な姿のおかげで、私も楽しい毎日を送る事ができ
ました。ありがたうございます。

短歌相互批評を終へて

坐を正し「ありがたうございます」とふみ友らのすがすがしき声
班室に響くも

歴史について学んでいきたい

(拓殖大学 外国語 一年 稲垣達也)

他の人とまじめに意見を交わし討論し合うという機会は、
普段の生活ではあまり持てないものなので非常に面白かつ
た。しかし慣れていないだけに、本当に自分の言いたいこと
を素直に言うことができなかったし、又人の意見も聞き流し
たりしていたことが残念である。講義、班別討論ではいろ
ろ考えさせられた。日本の文化、伝統を大切にするというこ
とはその通りだとうなずけるが、天皇、国旗、国歌というよ
うな問題はどうもしっくりこないようなところがあつた。し
かし本当の歴史を知らずにイメージで話しあつていたという

ところがあったと思うので、今後もつと歴史について学んでいきたいと思います。戸惑うことも多かったが、いろいろ学ぶことも多かったので満足している。又共に学んだ班友たちとアドバイスをしてくれた先生に感謝します。

短歌相互批評の明け方に至りて

眠き目をこすりながらもおのの短歌を磨きて夜は更けゆく

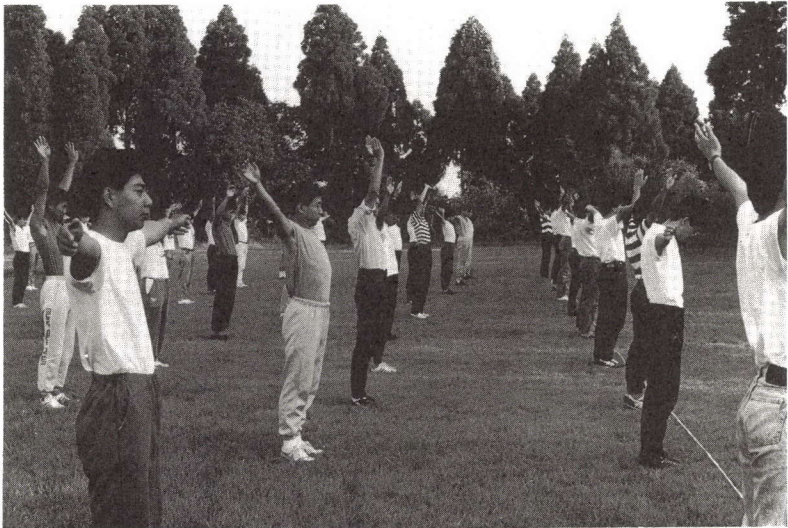
目の前にすることに全力で取りくむ

(鹿児島大学 工 一年 前田徹夫)

大学の小林寺拳法の原先輩は、誰とでもわけへだてなくつきあい、周りを明るくする人で、その人の勧めで合宿に参加しました。しかし天皇に関する講義が多くて面白くなく、ぼけーとしていた自分に班長の岡山先輩が「君の表情は死んでいる。原君は自分の目の前にすることに全力で取りくむ。だからどんな人ともつきあえると思う。」と言われ、これを聞いた時「初めて原先輩に会った時そう思ったなあ」と素直にそう思えたのでした。その後のレクレーションで原先輩に会った時、「楽しそうだな。」と声をかけられ、本当にうれしかった。まだ天皇とか戦争のことに関してわだかまりがあるが、この思いを大切にしていきたい。

元気なき我を励ます先輩の本音の言葉心に残れり

カメラレポート8



夏の朝の澄んだ空気の中でラジオ体操。体調を整えて合宿日程に入る。

お互いの心にやさしい心が生まれた

(早稲田大学 政経 三年 岡田 浩)

私は今年で二回目の参加ですが、昨年は苦しい合宿だったという印象でした。それでも今年も九州まで来てしまったのは、何か魅かれるもの、参加しないと何か非常に大きなものを失なうような気持ちがあったからです。今年は素直に先生方の話に耳を傾けることができ、日本の文化の美しさも感じることができたと思います。勿論納得できない事も多々ありましたが、それを率直に班付の先生にぶつけました。先生方は、ぶしつけな私の質問に逐一丁寧に答えて下さり、深い思い入れの中に、寛容なやさしい心を感じました。そういった先生、班員の皆さんと素直な交流を続ける中で、お互いの心にやさしい心が生まれていくのが感じられました。日本文化を学ぶということが単に知識を得ることではなく、その「心」を感じる事だとすれば、私はこの合宿でその一端に触れることができたのではないかと思います。

夜も明けて白みゆく空見やりつつひざさきあはせ短歌詠むなり

第五班 男子学生

胸の高鳴るような興奮

(福岡大学 人文 三年 山田淳)

僕が歴史上の人物で最も尊敬しているのは吉田松陰先生ですが、松陰先生の妹さんの曾孫で同じ寅二郎の名前の小田村先生が話されている時、松陰先生自らが御講義されているような気さえしました。胸の高鳴るような興奮を覚えました。占領下のわが日本については僕が最も関心のあるところでした。千二百二十七通にも及ぶ占領軍からの指令・覚書等の一つ一つを吟味するには日本と世界の歴史や国際法はもとより、国の理想・理念をふまえた上でなされなければなりません。しかし宗教や霊にも関心のある僕にはとても時間がなげばいいと思っていました。それは間違いで他国のことも自国のことのように考えてゆくようになりたい。祖国を愛することは大事です。と同時に他の国々の幸福をも祈り、世界の平和を祈る心を持って、それを実行することが、昭和天皇、今上陛下の大御心に適うことでもあると思えました。

人の道を踏み行ふが人として大事とひた思ひたりけり

神仏のみ光かがふり人としてまことの道を我は生きたし

自分が合宿にいることの不思議な縁を痛感する

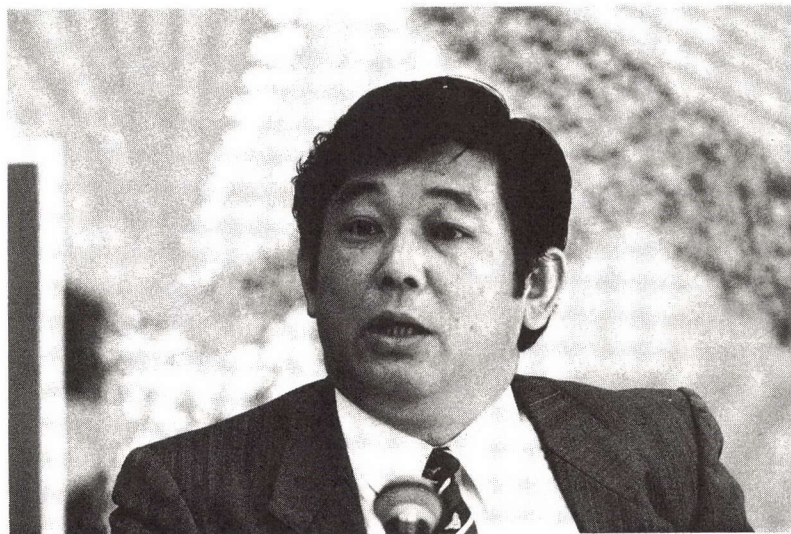
(亜細亜大学 経 一年 濱田雄二)

いま改めて大学内の日本文化研究会に加わり、そしてこの合宿教室に参加してよかったと思っている。ふとしたことから先輩に邂逅し輪読会に参加したのであったが、この合宿に自分がいるということはいくつもの偶然が重なったことである。縁の不思議さを心から痛感させられる。

御講義は大変に価値あるものであったように思われた。「ように思われた」と付け加えなくてはならないのは、自分の未熟さを思い知らされたからである。もっと下積みとなる知識を持ち、睡気を振り払って御講義に気力を集中していたならば、本当に自分のものとなったのではないかと後悔している。

「夜のつどひ」では、せっかく準備した亜大の学生歌を披露できなくて残念。最後の夜で思い出を作る場所なのだから、フレキシブルに対応して欲しかった。

わが詠みしつたなき短歌を夜ふけまで師とみ友らは直してくれぬ
いかならむ縁ありてか集ひきて共に語りし友は忘れし



カメラレポート9

二日目の午前、福岡県立福岡中央高校教諭・占部賢志氏により「ロシアと廣瀬武夫—清く、直く、温かく、しかも力あり—」と題された御講義が行はれた。氏は、明治を生きた一人の男の文章を読み、言葉の広がりや味はひ、心の動きが豊かになってゆく感動を語られ「みなさんもかうした経験をぜひして下さい」と述べられた。

大きなプラスになった

(第一経済大学 経 一年 吉永満男)

合宿に参加するまでは、天皇陛下のことも、わが日本の国のことも、複数の人達と対論することもなく、自分の考えをふりかえったこともありませんでした。しかし、この合宿に参加して、天皇陛下のこと、日本のこと、国語(日本語)のことなどを少しでも考えることができたことは、自分自身にとって大きなプラスになったように思います。そして参加されている学生・社会人・先生方の前向きで熱心な姿勢を見習いたいと感じました。また、人と接する際には温かな心を持って、人の気持ちのわかる「感じる心」を内に備えた日本人へと成長していきたいと思えました。

緑濃き阿蘇の大地にリンリンと虫の音しげく涼を奏^かつる

班の仲間と阿蘇の自然に感謝したい

(九州リハビリテーション理学療法学院 二年 岩見憲司)

合宿が始まるまでは天皇とか国家とかについて考える集まりと聞いていたので、大きな不安を覚えていましたが、実際に始って講義を聞き、そして何よりも班員と話し合いを続けていくうちに、最初に抱いていた先入観が大きな勘違いであったと気づきました。

いま閉会式を数時間後にひかえて、「気づかされた」のではなく、「気づいた」という事実をあらためて考え直しています。講義が終わり、何かよく分らないという気持ちを一方に抱きながらの班別討論で、あらためて講義を思ひかえしつつ、班員の感想や話を聞き、自分の意見を述べていくうちに、先生のおっしゃった言葉の真意に気付いてきました。大変にいい思い出になりました。班の仲間と阿蘇の自然に感謝します。

閉会式を前に

灰皿のタバコの山は友どちとあまたのことども語りしあかしぞ

今までにも増して感じられたこと

(拓殖大学 外 一年 岩沢雄一郎)

すべての日程が終ろうとしている。十回の講義に七回の班別討論、そして輪読と、めまぐるしいまでに詰まった課題を前に、何もかもが駆け足で走り去ったように思われる。しかし、その忙しさが内的な面にも外面的にも、この合宿を有意義かつ充実感を持つものに行っているように思われる。

また「学生」「社会人」「先生」とそれぞれの横のつながりだけでなく、これらの三つが縦につながるといって最近ではあまり体験できないことが体験できて、そのことによって普段あまり聞くことの出来ない数々のお話を聞くという体験もさらに貴重なものとなったように思う。

とにかくこの五日間の合宿で、いろいろな考えを持った人達がいるということが今までにも増して本当に感じられた。

合宿の時は早くも過ぎゆきて友との別れの間近に迫る。

最終日に気づいたこと

(鹿児島大学 農 二年 椎原恒介)

初めはスケジュールも厳しそうだし、真面目な人達ばかり参加するのではないかと心配していましたが、そんなに心配することもありませんでした。

班別の討論や輪読の際にお聴きした山内先生のお話は大変に有意義なものでした。特に導入講義の後の討論では分かりにくかったことなどを聞くことができて良かったと思います。僕は少々臆曲がり、「天皇などまやかした」と言われると「そんなことはないだろう」と思い、「天皇陛下はすばらしい」といわれると「そうまで言うこともなからう」と思います。それは嫌なところからでも良い所を見つけないと努力することだし、好きだからといって依怙蟲屑になりたくないと気をつけることでもあり、自分の欠点だとは思っていません。しかし、「全体感想自由発表」の折、防衛大の学生が「人の話を聞く時には、心を開いてその人の思いを正面から受けとめるようにしなければ、本当に理解することはできないと強く感じた」と発言していたが、僕も最終日になってやっとこのことに気付きました。なぜもっと早く気付かなかったの

カメラレポート10



食事の時間も各班ごとに食卓を囲む。「同じ釜の飯」を食べながら和やかなひとときを過ごす。

かと残念に思われてなりません。

班別短歌相互批評

読みきれぬ己が思ひも語りあひ述べあひゆけば浮びくるなり

全体感想自由発表を聞きて

いま一度初日の朝に戻りたしここで学びし心を持ちて

四回目の参加で思う「本当の学問はこれからだ」

(日本大学 文理 聴講 井坂信義)

「全体感想自由発表」の時、対馬から来られた白井傳先生がまるで新品のような軍靴を出されて「一旦緩急の際にはこれを履いて皆さんの先頭に立って戦います」と話された。その靴の革が本当にやわらかそうであったのが印象に残った。四十数年の間、磨き続けられたのは軍靴ばかりではなくて

国事に殉ぜんとしてられるお心であったと思われた。昨夜の「夜の集ひ」でも横笛を吹いて下さったが、そのせつせつとした調べの中に、国文研の先生方の唱和される声が静かに交じわって、心にしっとりとした感じが残った。白井先生は心の美しい方なのだと感じられ、その美しさは四十数年間も怠りなく磨き続けられた先生の生活から生れてきたのではないかと思った。自分も一日一日を心を込めて生きて行きたい。

四回目の参加で、また阿蘇の地にやって来て原点に戻ったような思いがする。この間、どれだけ自分が進歩したのかはわからないが、いま合宿教室を終るに当って、本当の学問は

これからだ、との思いで一杯である。わが日本の真の独立という小田村先生の願いに応える為に、微力ながら力を尽せる人になりたいと思います。

小柳先生の御講義を聴きて

大君の御歌を読まる師の君の大きな御声は講堂に満つ

御心を仰ぎて読まる師の君の御声は強く吾が胸を打つ

「夜のつどひ」にて白井先生の横笛を拝聴す

桜井の別れを奏する笛の音に低くしづかな声の唱和す

全体感想自由発表

壇上の後輩の言葉は力強く会場のうちに響き渡りぬ

国の為に生きるとふ事を先生の「軍靴」に知るとの言葉雄々しきも

ひきしまる後輩のみ顔の雄々しさに大和男子の面影を見る

我れもまた御国の為につとめむと力尽していよいよはげまむ

印象に残った広瀬武夫中佐

(九州大学 法 四年 三沢茂美)

始まる時には非常に長く感じられた四泊五日の合宿ですがいま閉会式を前に思うと大変に短かったように思われる。

占部先生の御講義で紹介された広瀬武夫中佐のことが強く印象に残っている。お父様が亡くなった時、中佐は御自分の悲しみをさしておいて、お母様や長年仕えてくれたお手伝いさん宛に「貴様の力落しもさぞさぞと察するに余りありて、思はず涙を催し候」と書き送ったというのです。広瀬中佐は本当に人の悲しみのわかる心豊かな人だったのだと思いまし

た。

この合宿では班長を務めました。なかなか思うようにはうまくいかず、班員の皆さんには申し訳けないと感じています。

涙ぐみおのが思ひを語りゆく友のみ姿に身のひきしまる

第六班—男子学生—

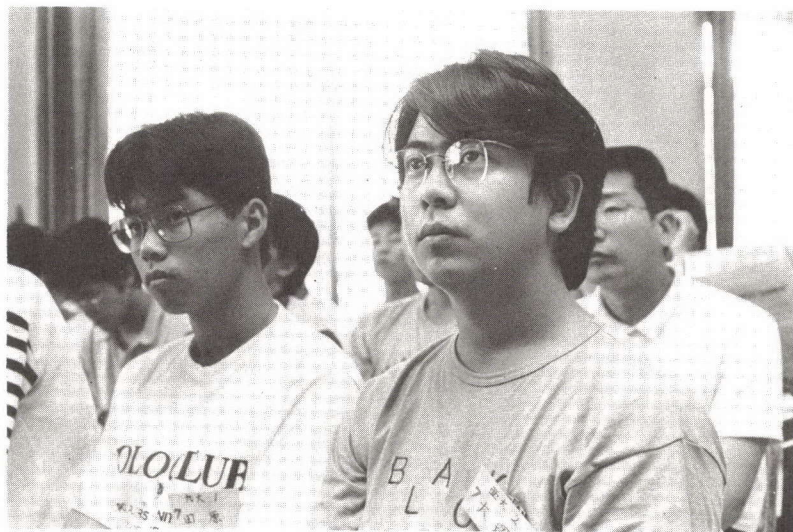
自分は合宿中自分の心の限りを尽しただらうか。

(亜細亜大学 経済 三年 茅野鐘章)

今回の合宿に参加するに当つて、私は明治天皇の御製「むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも」といふお歌を我が心の指針として参加しました。今この御製を読みかへしてみると、班員との生活の中で心の限り尽せなかつたといふ思ひが出てまゐりました。班員や班付の先生の御言葉に対して何を答へたらよいのか、改めて人の話を聞くことの難しさを知りました。けれども、班友が進んで何かを言はうとしてゐる姿は本当にうれしく思ひました。

また、班付の先生方が班友に語りかけられる御姿・御言葉を本当に有難く思ひました。特に占部先生が班友に残されていかれた短歌

カメラレポート11



占部氏の御講義を真剣に聴く学生。

言ひよどむことのあれどもはからはで肚にひびきしおもひ
伝へよ

に示された先生のお気持ちには感謝の気持ちが湧いてきま
す。これからまた東京に帰り活動をしていきますが、尽しき
れなかつたこの思ひをぶつけていかうと思ひます。

班友のため尽せざりしの思はれておのが力のたらざるを知る

こんなに語り合える機会はめつたにない

(拓殖大学 外国語 一年 岩田 稔)

初めての参加であつたが、日程表を見た時は不安でした。
なぜならば、講義がびつしりと詰まっております、それに基づ
く班別討論において、講義の内容をしつかり把握し、それにつ
いての自分の意見を偽ることなくちゃんと発言できるだろう
かと思つたからです。実際、実行することはなかなかできま
せんでした。しかし、皆がボンボンと意見を出し合つてくれ
る雰囲気の中で、少ないながらも自分の発言することができ
ました。一生懸命、真剣に聞いてくれました。難しい話も多
かつたけれども、自分も勉強しなくては、という気持ちにな
りました。現代社会の中で、こんなに心から感情をこめて語
り合える機会はめつたにないと思ひます。だから、これから
も絶やすことなく合宿を続けてもらいたいと思ひます。

班員と心交はした合宿の日々を思ひて別れを告ぐる

先輩の気遣いの有難さに気づく

(亜細亜大学 法 一年 山田 淳)

私が合宿に参加したのは、朝の集いで司会をされた岡山先
輩から誘われたからです。合宿を終える今、気づいた事
があります。それは、岡山先輩は会えばいつでも「おう山田
色がとてもいいな」とかいつも言つて下さつていたので
す。それは私の体調をいつでも気遣つておられたのだとい
うことです。私はこのよき先輩にめぐり会えたことを幸せに思
います。

合宿では、興味深い話をいろいろ聞きました。特に小田村
先生や、山内先生のお話は、法律講座の仲間とすぐにでも語
りたいと思うほど感銘を受けました。班員もみな親切な
方ばかりで、新たに友を得た喜びを感じています。

岡山先輩へ

我が体気遣ひ下さる先輩に有難きかなと思ふなり

虚勢をはらずに研鑽してゆきたい

(防衛大学 理系 一年 白井亮治)

私は恩師の勧めで合宿に来たのですが、当初ただでさえ少
ない休暇の三分の一を拘束されるのは嫌だと思つていまし
た。しかし、実際に来てみるとすぐに解け込め、お互い忌憚

のない意見を交わし合えました。しかし、自分の中に何か物足りなさを感じたまま、最終日の「全体感想自由発表」の時間を迎えました。その時、鹿児島大学のある女性が語った言葉に衝撃を受けました。「自分の言っていることがすべて嘘に思えそんな自分が情けなかった。」私も、全く同じことを思うようになっていたからです。言いたいことは口からべらべらと出てきますが、そのことが本当に自分の心の底から出て来たのか、ただの虚勢ではないかと疑問に思うようになっていたからです。彼女が真心を込めて語る言葉に、私は気づかされました。私は彼女に感謝すると共に「真の心は、人と人との間にある」という言葉を肚に銘じ、この合宿で学んだものが私の血となり肉となるよう日々研鑽に励もうと思いました。

涙して君の語るる真心を思ひとめん我が胸内に

心をくだけ班別討論できた

(九州大学 工学部 二年 船崎好助)

私は今回初めて、本当に心をくだけ班別討論等に積極的に参加できたように思います。それは講義の中で、天皇陛下・広瀬中佐・青年体験発表等を通じてまごころを尽して生きて来られた方々の姿を感じることができたことと、先生方の真剣で誠意を尽しておられる姿に私の心が魅かれたためだと思えます。又、難かしいことだけでも、まごころを込め、相

カメラレポート12



二日目午後、九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生は「今上天皇の御歌」と題して御講義をなされた。先生は偏向したマスコミを通して陛下の御心を付度申し上げる事が如何に難しいかを指摘され、今上天皇の御歌を一首一首詠まれながら大御心を偲んでゆかれた。

手を思い、相手の喜び・哀しみを自分の喜び哀しみとすることが
とができるなら、自ら心を通じあえるんだということが多
少なりと実感できたように思います。このことは歴史を見る
上でも、果ては国のことを考える上でも重要なことのように
思います。現在は心の荒廃が叫ばれているような時代です
が、合宿教室にこんなにも多くの方々が集っているのをとて
もうれしく思います。合宿教室に参加された方々を通して、
大きな和が広がっていくように思います。四泊五日の短い合
宿でしたが、参加することができて本当によかったと思つて
います。

心をは開きて思ひ交はすれば仲間らも同じ思ひにてあり

班員とこれからも会いたい

(拓殖大学 外国語 三年 川見紀継)

合宿当初は、各先生が本当に言わんとする事が何であるかを
理解する事はできませんでしたし、その為、班別討論でも
何を話して良いのか分からずとても苦労しました。しかし、
「書物を読んでの自分の感想や考えを話すのはできることだ
が、本当にしなければならぬ勉強とは、その書や歌をかい
た人の文字や言葉だけを、主観を入れず、素直に読み、聞く
ことだけで、その人の本当の気持ちを理解することである」
と、占部先生の御指導を頂いてから、気持ちが楽になり、合
宿が意味あるものと思えてきました。又、班友はとてもなじ

み易く、人の気持ちを思いやる人ばかりで、彼等との会話は
とても楽しく落ちつけました。彼等の考えはずっと深く、そ
の真剣さ、勉強量には感心させられました。今後何かしら
連絡を取り合い、又会いたいと思います。この合宿にも機会
があったら、ぜひ又参加したいと思います。

夜の集ひにて「勝ます」踊りを踊る

緊張のあまりに舞を忘れはてた大声で歌ひゆきけり

付き合ひを大切に生きてゆきたい

(早稲田大学 文 四年 榎本稔)

「Belief in」といふ言葉を我が身のものとするのは難し
い。四泊五日間でそれを実現できるとは思へない。本心を語
れと言はれて一体自分自身の本心は何だらうと思つて戸惑ふ
ことが多い。国や天皇のことは勿論、自分に確信をもつて語
れない。そのため、班別討論でも班友一人一人を思ひやつて
語りかけることが出来なかつたのではないかと申し訳なく思
ふ。壇上で感想発表する人達を見て、「俺にはあのやうに率
直に語れない」とつくづく思つた。しかし、僕が大事に思ふ
人、僕を必要としてくれる人達との長い、地道な付き合ひが
僕に静かな自信と強い信頼関係を与へてくれると思ふ。僕の
好きな男らしさを実現するのは自分一人の力にかかつてゐる
と思ふと、男らしい明るい喜びをもつてこれからも生きてゆ
けさうだ。

故郷にいます父母なつかしくくさぐさ語らふ夜の待ち遠し

第七班 男子学生

廣瀬中佐の生き方を思う

(中央大学 教職聴講生 三林浩行)

今思い出されるのは廣瀬武夫中佐の話である。中佐は敵の砲撃の音が聞え弾丸が飛んでくる中、三度にわたって杉野兵曹長を捜しに行かれた。僕がもしその場面に遭遇していたならどうであつただろう。一度は捜しに行つたかもしれぬ。しかし弾丸の飛びくる中である。我身かわいさに、まだ兵曹長は船のどこかに生きているかもしれぬと心の中で思ったとしても、それ以上捜しに行けたかどうか。中佐は非常に部下を大切にした人ではなからうか。加えて、生きていく中で出会つたアリアズナ、ヴィルキツキイ、義姉、それに父、祖母、女中さん、それらの人との心の交流の話があつた。中佐はこれらの人達だけでなく、目の前に現われた一人一人の人を本当に大切に生きておられたのではなからうか。

ロシア女性の廣瀬中佐の義姉にあてた手紙

誠実で情けの深きお心を忘れることのできぬと書かる

カメラレポート13



小柳先生の御講義のあと映画「天皇陛下」が上映された。天皇陛下の御姿や御製に触れて、我々国民を思はれる大御心に一同深く感動した。

心の震へを感じた

(熊本大学 法 四年 平田裕英)

今回も合宿で多くの事を学びました。御講義で印象に残っているのは小田村先生の御講義です。先生の「これだけは伝へたい」といふ御熱意を感じとり、心の震へを感じました。日頃如何に心を働かせておられないかに改めて気づかされました。

班友の皆とは一緒に居る時間が少なくて残念ですが、手紙を必ず出しますので今後も付き合つてゆきませう。とてもすがすがしい気持ちで山を降りることができます。ありがとうございました。

太子の御本の輪読

み友らと声を合はせて言の葉を味はひながら読むぞ楽しき

祖国防衛の志を継承したい

(佐賀大学 理工 四年 白木 潤)

今回の合宿教室の中で、僕は広瀬中佐の中にまた小田村先生の中に、祖国への危機感というものを感じました。前者は大国ロシアに対しての危機感であり、後者は日本文化の危機感です。広瀬中佐はたとえ一人でもロシアに行つてロシアの在り方を正して行こうという熱烈なる志を持たれていました。

不幸にして広瀬中佐は敵の弾丸に当たり散華されました。実に悲しい事です。ところが、祖国防衛の志というものは、大東亜戦争を戦われたますらおの心の中に継承され、今また小田村先生の中にも継承されているのだという気がします。小田村先生は僕達が真の日本人としての自覚に目覚め、日本文化を守る事を切実に願われてゐるのだと感じました。僕はその願ひに心えるべく、もっと学問にはげみ、祖国防衛の志を継承したいと思ひます。

小田村先生の御講義を拝聴して

占領の事を語るる先生の我等へ託さる願ひ深しも

先生は日本文化を守らむと先頭にたち戦はるるかな

我もまたあつき願ひに応へんと大学の友へ語りゆきたし

意見発表で前へ出た友等へ

合宿で学び得し事を率直に語る友等の姿うれしき

これからの生き方を変えたい

(拓殖大学 外国語 三年 関 昌明)

短い期間に沢山の講義を聞き、難しさもあつてなかなか集中できず聞き逃がしてしまつた所がかなりありましたが、これからの生き方を変えなければいけないことを強く実感しました。内容が難しくなかなか考えもまとまらず、班別の時もあるように発言出来なかつたことが少し残念でしたが、天皇制などについて表面的にだけでなく内面からじっくり観察し

て親しみをもっている若い世代が多いのには驚き、嬉しくもなりました。

僕自身忘れていた日本の文化を思いだし、これから残さなければならぬものは大切にしていこうと思います。

我が心いつかは自然に帰るときその時本当の幸がある。

歴史を追体験すること

(亜細亜大学 法 二年 大塚たけし)

この合宿に参加して初めはなんだかアブナイなアと思います。日の丸を掲げたり君が代を歌うことに対して、漠然と軍国主義を思いうかべていたからです。しかし、班別討論や講義を通して、自分は何も知ってはいないのだなと思えました。何も考えてはいないのだなと思えました。講義の全てには賛成しかねていますが、歴史を平面に並べて今の目で当時を見るのではなく過去に自分を置いて歴史を追体験しなさいという、小田村寅二郎先生のご意見には深く共鳴をいたしました。

頭の中が黒船来航の騒ぎの様になっておりますが、この合宿に参加していなかったら頭の中はトーフかなんかのままであったと思うと、貴重な体験をしたと思っております。

わがかけのともにあゆみし山道の陽でりいだしてかけに気づきぬ

カメラレポート14



三日目午前、「日本文化と天皇」と題されて作曲家・黛敏郎先生による御講義がなされた。先生は、日本人として生き、死んでゆく私達が自分を把握するには国体観を持っているなければならない、「日本の国体と他国のそれとを区別する拠り所は天皇の御存在である」と述べられ、天皇の持つ政治概念と文化概念の二側面について語ってゆかれた。

自分の中にもう一つの見方が生まれた

(拓殖大学 外国語 一年 吉村和士)

正直言つて始めはいやいやの参加でした。なぜなら僕は天皇あるいは天皇制度に非常に疑問を持っていたのです。しかし、この合宿に参加して先生方の講義の中になるほどとかこういった考えや見方があるのかと納得することが多々ありました。いわば僕の中にもう一つの天皇—天皇制度に対する見方が生まれたといつても良いと思います。しかしまだ納得しない部分が多くある事も確かです。この事はこれからの課題になつて行くと思います。

この合宿に参加して感じたことは、日本の文化を大切にしなければならぬという事です。

始めて短歌を作つた事も大変良い経験になりました。長内先生の短歌には心を打たれました。

苦しんだ合宿終りて我思ふそれも今では良き思ひ出かな

日本人としての自覚

(九州大学 工 一年 田原宣仁)

僕はこの合宿に来る前にある本を読んで、天皇制否定の意見をもちました。しかしこの合宿に参加して、今上天皇の御歌を知り映画を見ていくうちに、次第と自分の持つていた意

見に対して疑問を持ち始めました。その後の班別討論の時に班付の先生方が熱く語ってくださった天皇陛下への思いを聞き、自分の間違いに気付きました。

この合宿に参加させて頂いたおかげで、天皇陛下について知ると同時に、廣瀬中佐の一人一人の人間を思いやる暖かい心、そして日本語が日本の文化であり僕自身の存在でさえ日本の文化を表現しているということを知りました。

今後の生活では、日本人としての自覚と人を思いやる気持ちを忘れないよう努めたいと思います。

阿蘇にてわづか五日の時なれど交はりし友の別れつらきかな

第八班—男子学生—

真剣に語り合える

(亜細亜大学 経営 一年 加賀爪英一郎)

私がこの合宿に参加した理由は、今の政治や世界の動きなどを真剣に考えようとする人が私のまわりにいないからです。

大学では、歴史を暗記ものだと考え、今の世界情勢にどのような影響をもたらしたのかという様な事を考えもしないのです。そして、私が世界情勢や政治のあり方について話し合

おうとすると、白眼視し、まともに取り合おうともしない。しかし、この合宿に来て、その様な事を真面目に考えている人々がいる事を知って、心強く思いました。

いつの日か再び会はむと笑み交はすその顔みれば別れのつらし

伝統・文化を守ろう

(拓殖大学 外国語 一年 野間貴雄)

僕はこの合宿に大学の先生に紹介されて初めて参加したわけですが、初めは講義や討論ばかりで正直な所、いやだなあと思いました。しかし、二日三日と経つうちに、その苦痛も少しずつやわらぎました。また、班にどんな人がいるのかと不安でしたが、会ってみると皆いい人ばかりで、とても良かったと思います。そしてこの合宿では昔からの伝統や文化を我々自身を守ってゆかなければならないということがテーマのように思えたのですが、自分もまさにその通りだと思いません。

討論で言葉出でこめ苦しさを耐へしのみつゝ合宿過しぬ

自分とは何か

(早稲田大学 教育 二年 土生 卓)

僕は、この合宿に参加するに際して、これを学びたいという具体的なものはなく、ただいろいろな人と交わって、自分

カメラレポート15



御講義のあと設けられてある質疑応答の一場面。黛先生は、学生からの質問に対し一つ一つ丁寧に回答下さった。

の大学生活について何か考えることが出来ればよい程度に思っています。しかし、実際に講義を聞いて、この合宿の根本にある、日本の文化・伝統・歴史とは何か、天皇とは何か、さらには日本人である自分とは何かという問いに気づかされた気がします。今の自分に、これらの問いについて、どれほど実感のこもった言葉で話せるか、よくわかりません。自分で体験し、自分で考え、自分で納得できる勉強を大学生活でやってゆきたいと強く思っています。

自分の意志で学ぼう

(西南学院大学 法 三年 田鍋彰司)

合宿も今年で三年目となり、毎年その年のベストを尽くして参加してきたが、今年になって初めて気付いたことが改めて多いのに、昨年の自分との差異を見出しました。一番強く気付いたのは、言葉を自分の知識でいろいろこねくり回して、言葉の本来の意味から遠ざかっていたということです。やつと文章が少しづつ見えてきたような気がします。山を降りて、少しづつ自分の意志で学んでゆこうと思います。

拓大の楽しさをどり来年もここに集ひて見たしと思ふ

今まで気付かなかった事を学んだ

(拓殖大学 外国語 三年 山本誠一)

私はこの合宿に始めて参加し、とてもよかった。なぜなら、私が今まで気付かなかった事をたくさん学ぶ事ができたからである。例えば、言葉の使い方や、人の話はその人の心に近づいて聞く、という事などである。また、夜の集いなど、楽しい企画などもあり、先生方や班友と酒を飲み、とても貴重な時間を過した。

また是非この合宿に参加したいと思う。

「勝チマス踊り」を見て

勝チマスと踊る友らに人生のつらきに耐ふる力感する

時がたつのを忘れる

(福岡大学 経済 二年 梅崎建吉)

私が一番印象に残っていることは、やはり短歌相互批評です。全員の短歌を手直しし終えるのに、五、六時間かかりましたが、あまり疲れは感じませんでした。班員皆が友の短歌の一字一句に心を集中し、どのように感じ、感動したのかと思いを馳せ、正に時のたつのを忘れるという感じだったからでしょう。一人ではなかなかうまく自分の本当の心の動きというものを短歌に詠み込めなかつたものが、皆で時間をかけ

て批評し、友の心を現わした歌になった時は、本当に心がすつきりとした感じで、快かったです。

短歌相互批評の折に

瞳閉ち友の思ひを偲びつゝ、心静めて言葉搜しぬ

人の話を聞く難しさ

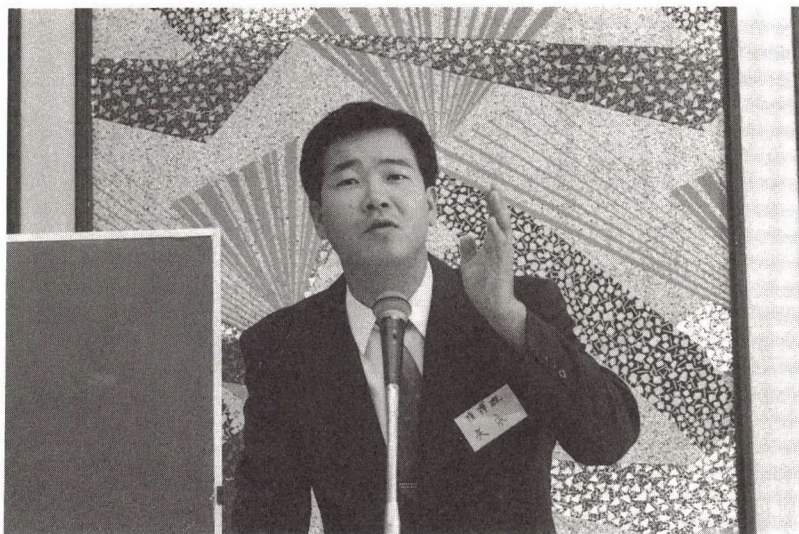
(千葉大学 工 三年 中富 仁)

今回の合宿では初めて班長をやらせていただきましたが、私の力が足りぬために班員のみんなにはとても心配をかけたと思います。今痛切に感じていることは、班員の意見を包み込むように暖く受け止めることができなかつたということです。それどころか、班員がやつと少しづつ語り始め、自由な討論の場が出来つつある時に、先生の御講義の内容からそれではだめだと思ひ、水をさして意見を言いくくしてしまふことが多かつたように思います。班長をやることによつて初めて人の話を聞く難しさを痛切に感じました。

とつとつと語らむとする班友の思ひを偲ぶは難しきかな

第九班—男子学生—

カメラレポート 16



三日目午後、短歌創作前の「短歌創作導入講義」に於て福岡県立玄洋高校教諭矢永誠二氏は、短歌創作の意義、作り方の基本などを具体例を挙げながら判りやすく話された。

人の心情を汲む

(九州大学 法 二年 岸 直也)

この合宿に参加する上で当初一番不安に思っていたのは、日本文化伝統を敬い大切に継承していこうとする活動の中でもしかすると参加者の統制を図ったり宗教的な集団の流布活動のようなものを目標としているのではないかということでした。そういう懸念は「君が代斉唱」や「慰霊祭」実施のことを直前に知ったことから起こったもので、現代の日本国民の大勢を占めている感覚とも言えると思います。そういうわけで講演の後に必ず行われる班別討論の場では、恐らく自分以外の参加者が講演内容に「ごもっとも」と感動し、自分一人だけがどこか納得いかないと思いつつも、周りのそういう雰囲気の水を差す発言も憚られて浮かぬ顔をしている、そんな様子を合宿直前まで想い浮かべていたものでした。実際に参加してみても、国文研に無縁な方が班員の半数を占めており、自分と同じような疑問をこの合宿に抱いているようだったので正直ホッとしました。そして納得がいくまで次に進めない延延としたこだわった議論がなされていきました。班の討論は遅々としてちつとも内容が深まらない、と班付の方に叱られたこともありましたが、自分達にとつてはわだかまりを率直に吐露して討論するこのやり方で良かったのではないかと思います。相容れないと思われる考え方にもその人の心

情を汲んで素直に受け取り吟味するという姿勢は、もっと大切にすべきだったと反省しています。この姿勢を大切に、偏った見方で物事を捉えないように広く学んでいこうと思っています。

み朋友らとまた逢へるのはいつの日か五日といへど睦みし朋友に

歴史を重んじるという姿勢

(早稲田大学 教育 三年 山田雄一郎)

この合宿では様々に講義が繰り返されましたが、それらは一重に歴史を重んじるという姿勢で貫かれていたはずで、過去を惜しむ心こそが現在の私達の心のあり方を決め、未来への知恵をも豊かにするということを感じ、非常に勇気づけられました。講師を初めとして皆さんと歴史に対する思いやりを分かち合えたことが私の何よりの幸せなのです。勇気をもつて社会に飛び立つてゆけそうな気がします。本当に有難うございました。

全体感想発表の折に

壇上で涙流せる娘に見れば迫り来る思ひに言葉出でずも

合宿を終へるにあたって

来年もここで会はむとみ友らと名残り惜しくも心に誓ふ

語らうことの楽しさ

(亜細亜大学 法 一年 江口文章)

私がこの合宿で一番印象に残ったことは短歌創作でした。私の作る短歌はどうも頭で考えて作ったという感じが強く、理屈っぽい歌でした。そして短歌は頭で考えて作るものではないと気づかされ、同時に私の今までの生活を物語っているという感じがしました。心を開き人と接するには、余計なことを考えず自分を率直に語ることが必要なのだと感じます。私は歌を作ることと普段の生活を反省することができませんでした。あまり心を開いて語ろうとしない私に、語らう楽しさを教えてくれたのは班の皆様だということが最終日の今日になって感じられて来ます。これからも短歌を作ることによって、人を思い、思われるような穏やかな人になる努力を続けて行こうと考えています。

合宿も今日が最後と思いつつ迎ふる阿蘇の清々しき朝アソノキヨキヨ

人の話を聞くことの難しさ

(拓殖大学 外国語 三年 長島一馬)

僕がこの合宿で感じたことは人の話を聞くことの難しさと人に自分の言いたいことを伝えることの難しさです。今まで適当に人の話を聞いたり、人に話をしたりしていた気がしま

カメラレポート17



短歌創作を兼ねたレクリエーション。中岳火口への道を友と語り合ひながら登る学生達。

す。常に相手の心を理解しようとするこの大切さを班長さんや班員、そして国文研の方々に教えられました。それからこの合宿に来る前、パンフレットなど見ると、天皇についての内容が多かったので、「やばい」んじゃないかと思っていました。講義や討論を通してその本質に触れることができず、マスコミなどの情報に振り回されることなく、物事の本質を知る必要を感じました。

四泊五日を終へて

一抹の不安抱きて来つれども晴るるが如し今の気持ち

自分の考えに自信を持つ

(東京大学 修士 一年 緒方秀教)

この合宿では心を開いて話し合える多くの友に会いました。ノンポリ少し左寄りの学友達の中で思想的に孤立感を抱いていた私は、自分と同じ考えを持つ若い人達がこんなにもいると知り安心感を覚えました。東京に戻っても自分の考えに自信を持つ勇氣のようなものを得ました。また学問に対する姿勢についても再考させられました。大学では創造性が重視されますが、人の話を聴く、人の文章を読むといった受動的の行為が実はとても難しく精神的努力を要するものだと気づかされました。私心を棄て、真っ白な心で耳を傾け、また文章に向かわなければ見えて来ない。これを実行する精神的努力を班別討論・輪読で少し経験できたと思います。

班別討論にて加藤善之先生の特攻隊勇士への
熱き思ひに触れて

南海に華と散りぬる武士を語る思ひに心打たるる

終戦時に於ける昭和天皇の御製を読み

いばら道歩みし大君今は亡くその真心をいかにか伝へむ

精一杯努力した

(早稲田大学 法 二年 川瀬弘至)

私が今回の合宿に参加するにあたり求めていたものは、歴史の意義とその重要性を知り、それを激動して止まぬ現在の日本国家に生かすべく、班内で討論し、その指針をつかみたいということでありました。残念ながらこの四泊五日を振り返りますと、その目的は半分も達せられませんでした。自分としては精一杯努力したつもりでありますし、悔いはありません。私は今、我が日本民族が誇りを持てるような新日本建設のため活動中であります。今後とも後を振り返ることなく頑張っていく所存であります。

朝霞に煙草の煙がましろひて阿蘇の山々かすみゆくなり

考える機会を与えられた

(拓殖大学 外国語 一年 道旗慎司)

班友の口から出る言葉は私と全く次元の違うものばかり、政治家の演説を聞いているようでした。生きている世界が彼らとは別であると思えず、討論に割って入る余地などありませんでした。苦しくなかったと言えば嘘になりますが、日を追うごとに近付き難かった班友とも溶け込むことが出来、新鮮な気持ちが生まれたこと、また様々な分野で活躍している著名な方々の話を聞き、考える機会を与えられたことは今後の私の大きな財産となっていくものと信じています。

五日間お世話になりし班友らとも別れ近づきて寂しさ覚ゆ

第十班 男子学生

胸襟を開いて話し合うことが出来た

(亜細亜大学 経営 一年 諸藤 護)

私がこの合宿に参加させて頂きましたのは、東中野先生の暖かいお心づかいのお陰で有りました。事前に、この合宿の説明を受けていましたが、これ程真剣な場とは思っても致しま

カメラレポート18



火口より立ちのぼる白煙を背に記念写真。ハイ、チーズ。

せんでした。本当に驚きました。この合宿で班友と共にした生活をふり返り、本当に有り難い気持ちで心は一杯で有りませす。討論の時間においての心の交流。そこでは、各人の思いも折り重なり、人間の微妙な心の動きが現われ、それでも相手の心の底まで立入り話し合うことが少なからず出来た事を感謝致します。以前、この有り難い気持ちを持つ事が出来る場所はどこを探しても無いのではないかと一人高を括っていました。しかし、現に、私はこの合宿で相手に胸襟を開いて話し合うことが出来るという事を知りました。

講義室顔合はせし人多かりき皆と話せず惜しいと思ふ

皆、友の話に心を向けて話し合へた

(早稲田大学 一文 三年 大島伸一)

お金は早々と払ひこんだものの合宿に行くか、田舎で最後まで悩みました。でも実際に参加してみると、思った以上に楽しかったのです。今回、僕は特に身丈に合はない言葉を用ゐないことを心がけてきました。自分が感じたところをいたづらに強調することなく、いままでの素朴な体験にもとづいて話をしました。でも時々、皆によく思はれたといふ虚栄の心が頭をもたげてきて、心の中は悪い意味で複雑で、素直になりきれなかつたところがあります。最近、僕は自分の手や足をつかつて、何かをしてみたいと思ふやうになりました。さかしらな気持ちが強すぎて、あまりにもあさましいいと

感じるからです。同じ班の呉君の拙いけれども、素朴な自然な言葉が心に残りました。

一番楽しかつたのは、中岳登山と短歌相互批評です。僕の班は、何か自然なまとまりがあつて、みんなと一緒に写真をとったり、卓を囲んでたうきびを食べたり、いつも笑顔が絶えませんでした。みんな相手の話に心を向けて（入れて）話し合へてゐたやうに感じます。関東地区の人ばかりなので、合宿後も交流の機会をもつていきたいです。

合宿のときも毎日両親へ葉書出さうと買ひこみきたる

班友のこと詠める歌々書き添へてはるか阿蘇より親へたよりす

壇上で大きな勇氣ふりおこし言の葉さがす班友のなつかし

班友と思ひ定めり九月より歌深めゆく会をもたうと

天皇陛下をお偲びする努力をし続けてゆきたい

(国学院大学 文 二年 森川弘樹)

初めて国文研合宿に参加させて戴いて、とても有難く、また感動を覚えると共に、自分自身に喝を入れていただいた様に思ひます。飽食、無関心、無感動、そういった時代の流れにいつしか、私の在籍する神道学科の学生も、国を思う、天皇陛下を偲ぶ、心より祭に奉仕することを忘れている現況です。そういうものに大変な怒り、憤りを感じつつ、この合宿に参加させて戴きました。先生方の講義一つ一つに、日本の心、日本人としての生き方、日本人としての誇り、そういう

ものをとくに感じた次第です。私たちはそういったすばらしいものを持っていながら、時流に流されて、努力することがまだまだ足りないなど思いました。私たちの日本、日本文化すべての中心にまします天皇陛下をもっともお偲びする努力をし続けていこうと思います。また、小田村先生のおっしゃられた追体験の必要性。立体的なもの（歴史・伝統）を正しく理解し、自分のものにする。小柳先生の日本語の一字の重要性、難しさ。和歌を通して人と人が、また天皇陛下と国民とがつながること。先人廣瀬中佐の清く直く温かく、しかも力ありという武士道。山内先生の情報に対する考え方。思い起こせば、次々と講義が蘇ってきます。ここで学んだ全てを、自分の中に問題として提起されたものを、この阿蘇の山を下りてからも、忘れることなく努力し、また多くの友らに伝えていこうと思います。先生方、班員の皆さん国文研の会員の方々、どうもありがとうございました。

小田村先生の講義を受けさせて戴き

雄々しかる師の君話す言の葉に大和島根のいのちを見たり

白井先生の軍靴を拜して

一日緩急あればと昔の軍靴を手にさるる雄々しき心継ぎてゆきなむ

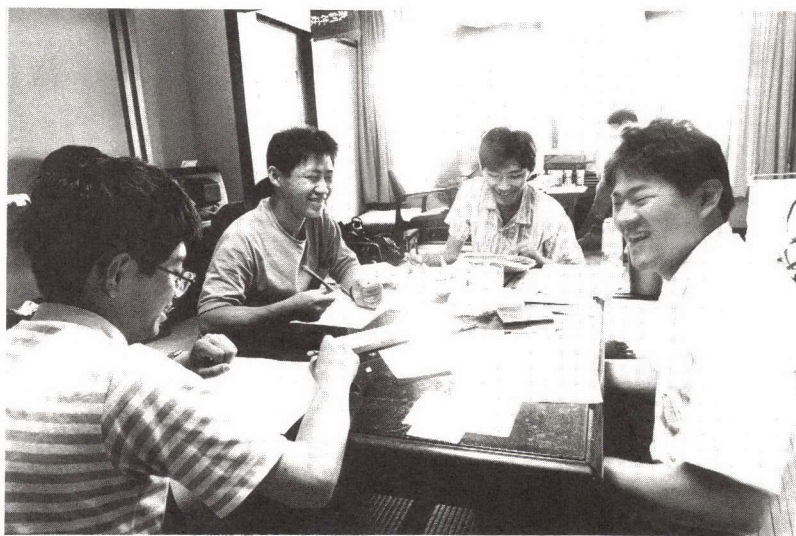
諸藤君へ

涙する君の御心しのばれて幸多かれと我は折らむ

合宿にて

阿蘇の地に四泊五日を共にせし友らと別るることぞ悲しき

カメラレポート 19



レクリエーションから帰って、短歌創作。いざ作らうとすると、自らの思ひを三十七文字に託すのはなかなか難しい。

まだ四日でも五日でもいたい

(中央大学 法 三年 古川広治)

時間のたつのが、早く感じられる合宿でした。また四日も五日でもいたい気持ちです。とても楽しい日々でした。

長嶋茂雄氏のような口調で、いつも皆を楽しませてくれた諸藤君。まっすぐで気持ちの良かった村瀬君。牛のような森川さん。もの静かで真剣な大島君。弟みたいでかわいいな中田君。ハマガキ好きの呉君。のんびりとして大らかなな松さんみなさん、お元気で、またお会いしましょう。

合宿で学んだこと

ああ言つてそのつぎはかうと思ふよりおの心を素直に述べん

「美しく尊いもの」が魂をゆさぶつた

(早稲田大学 社会科学 二年 村瀬廣司)

今回の合宿に参加して、天皇陛下、先人の方々、国文研の先生方、先輩方、参加者の方々の美しい心、美しい理想、美しい生き方に接し、沁々と感動を幾度も体験しました。僕は、どうしても「自分はかくあるべきだ。」といった調子で頭の中で道徳観念をこねくり廻してしまいます。だから、いつも何か窮屈な感じがしていました。しかし、廣瀬中佐の生き様、天皇陛下の大御心に接した時、「美しく尊いもの」が

僕の魂をゆさぶつて、自づとかくありたいという思いにかられました。それは決して窮屈なものではありませんでした。このような感動を味わえたことを本当にうれしく思います。ありがとうございました。

昨年の班の先輩と再会して

あなうれし一年ぶりに再会す先輩の顔に笑みのあふるる

友との一体感もてた

(駒沢大学 文 二年 中田岳志)

今回の合宿は、「非常に短かったな。」と感じました。様々な御講義があり、非常に勉強になりました。何といつても心に残つたのは、短歌相互批評と、全体感想発表の時の白井先生の御話でした。短歌相互批評では、相手の心に自分の心を近づけていくという、非常にすばらしい体験をさせていただきました。その中で、班員の諸藤君が最初、観念的と思われる歌を作っていたので、それを正そうと自分はいろいろなことを言いました。すると諸藤君はいきなり泣き出して、自分の今までのつらかったことを話しました。聞いているうちに、何とかして語句を適切な言葉に変えて、諸藤君の心を表したいと思うようになりました。その時、自分は諸藤君との一体感もてたことがとてもうれしかったです。

白井大人の御話を聞きて

事有らば戦野の前に赴かんと老いたる大人は声高く述べ

大人は今も先の戦^{いくさ}で使はれし軍靴の手入れを怠らずあり
老^{おきな}いたるも武士^{ぶし}の心失はぬ大人の姿は尊^{たか}かりけり
足らずとも大和心を知る我は皇国^{すまみくに}を守りゆきたし

班の友に深く感謝したい

(拓殖大学 外国語 一年 呉 祥慶)

初めての参加です。この五日間、思い出せば恥かしいことの数々。周りの皆さんには、度重なる失礼に、今はもうただただ、お詫びの念で心がいっぱいです。合宿中、素人の私に手とり足とり、何一つイヤな顔をせず、和歌のつくり方を教えて下さった班員の皆さん。本当に優しく知的でありました。班長さんはとても面白い方で、大変優しく、私がこの合宿を楽しく終えたのも偏に第十班の全員の方々のお陰と深く感謝しております。また、この方々と会える日を楽しみにしています。それでは、皆さんの幸せを祈っています。

大好きなあの子の魅力たまらない近づくだけで恥かしくなる

第二十一班 女子学生

カメラレポート 20



「青年体験発表」。右から福岡県立須恵高校教諭・那須三元氏、日本油脂㈱技師上村栄章氏。那須氏は古典を論読し先人の言葉を味はふことで自分の拠り所が与へられた体験を、また、上村氏は病床の御尊父との触れ合ひと、同じく病の母を思ひ詠まれた友人の短歌によって痛切に実感された体験を発表された。

日本の心を大切に生きて行きたい

(株) 橋本染工 橋本加枝 23歳

緊張のゆるむ間もなく、一日一日を班員と共に過ごし、合宿の終えた今、班員の顔を見ると、ほっとすると同時に、皆で力を合わせ出来た事がとても嬉しいのです。

わからない事をわからないと言える勇氣、わかった事をわかったと言える勇氣、心の思いを素直に認められる勇氣、班長であることにとらわれすぎて忘れていたことを、班員の精一杯の姿勢に思いだされ、とても有難く思いました。そして「日本の心を大切に生きてゆきたい。」と沁々思いました。

言の葉は少なく語る友なれど思ひのたけは涙にあふるる

真の友情にふれる喜びを体験した

(鹿児島大学 教 四年 指宿みき)

私はとても幸せであると実感しております。私には多くの友がいるからです。友がいるというよりはむしろ、友がそばにいてくれる、私を友がそばに呼んでくれるという感じですね。私がこの合宿で出会った班友の方々は正にこのような友達と思えるのです。わずか数日にすぎないのに、友の真心を感じることができ、また友も私の心を感じ取ってくれているのです。人との出会い、心が通えるということは、本当に人

間の最も貴い幸せだと思えます。

班付の先生や白井先生がお話をされるお姿がとても心に残っております。優しい笑みを浮かべられ、温かいまなざしでじっと私たちの方をみつめ語って下されました。先生方が私達に語りかけて下さるそのお心を思うと、悲しくもあり嬉しくもありました。

私は合宿で得たものは、友や師、そして大君の「まごころ」です。まごころをただひたすら交わせることによって得られた真の友情です。二十一班の皆さん、白井先生はじめ国文研の諸先生方、そして阿蘇に集った皆さん、どうもありがとうございました。

あなうれしあまたのひとにささへられたふときひびをここにすこせり

真の友にめぐり会えて嬉しい

(東北学院大学 工 三年 小野寺祥子)

何の考えも持たず「真の友達とめぐり会おう」という言葉にひかれてやってきた私にとって、日本人とは？天皇とは？を考えることはとてもつらかった。講義中眠ってしまう学生もいたが私はがんばって聞いた。しかし班別討論の時間となると思っていることが言えず、自分がますます情けなく班の輪からはずれてしまいそうてこわかった。

最後の夜、短歌相互批評で涙が流れ言葉が全然出てこなかった。私を思ってくれる班友のやさしい心が有難く胸がたま

るばかりだった。人と話すことがこんなに感動すること、楽しいことだとわかると、自分の言葉がすらすらと出て、友の言葉も自然と心に入ってくるのがわかった。これが真友かなと思ひ、やっと大学三年になつてこのような友と出合うことができ、とても嬉しくなつた。

阿蘇の地のこの集ひのあとを残したく師の君囲みシャッターを押す

自分自身の素直な心で天皇の御存在を理解したい

(帝塚山学院短期大学 文 二年 葉丸恵美子)

二度目の合宿で、やっと分かったことがありました。それは、自分の心に正直になるという意味での「素直さ」が大切だということです。知識をひけらかすことや、他人に付和雷同することが一番無意味です。人にはそれぞれ個性というものがあり、喰い違った考え、発言が飛び交うのは当然です。意見がぶつかり合っていくうちに、方向性の違う考えをもつ同士がだんだん真つすぐになつていくのだと思います。

こんな風に感じた事はありませんでした。この外にどこにも、心から語り合うことの出来る友はいないと思ひます。

天皇のことはよくまだ分かりません。今の私に分かるのは、こゝに集う人達が、みんなすばらしい方達ばかりで、その方達が天皇を大切に思つていらつしやるということだけです。私は自分で、天皇の御存在を理解できるようにしたい。決してその方達の真似ではなく、自分自身の素直な心で

カメラレポート 21



戦時・平時を問はず、祖国日本の為に尊い御命を捧げられた方々の御魂をお慰めする「慰霊祭」がしめやかにとり行はれた。

理解できるようになりたい。

昨日まで顔も見知らぬ友どちに心のままの言の葉語る

日本のことばを大切にしたい

(中村学園大学 家政 一年 柴田智子)

この合宿において、私は学んだことが多々ありました。その内最大なもの一つは、小田村先生が「言語がほろびれば国は滅亡する」ということです。今の私達がせねばならぬことは日本のことばを大切にすることです。もう一つは、短歌は人の心を引きつけ、みんなの心を一つにさせることが出来るということです。短歌の相互批評では、一人一人の思いが一つに集り、よい緊張ムードが保たれ、しっかりと班友がスクラムをくめた気がしました。

初めての私にとって、講義内容より班別討論、短歌相互批評が重く感ぜられました。講義内容については、家に帰ってから復習したいと思っています。

班友のころなごみて笑みうかべそのあたたかさみな知りけり

他の人を心から思いやる心に触れ嬉しい

(拓殖大学 外国語 一年 松本直子)

今年初めて参加させて頂きましたが、どのような合宿なのか不安がありました。諸先生方の講義ははつきり言って難し

く、今まで考えたことのない内容に、とまどいを感じ、班別討論でも自分から意見を述べたり、質問するといった事がありませんでした。自由時間等では班友と心もうちとけ、講義の内容について自分の意見を言うことが出来ました。

短歌の相互批評において、班友達がまるで自分の歌を作るかのように考えてくれて、その姿が嬉しく、思わず班友達を見入ってしまったました。この時、私は他人を思いやる心、他人の事を自分の事のように考えてくれる心を見つけました。またその心は日本の心でもあるように思われてなりません。現在の日本の中でも、このように他人の事を思ってくれる心があった事を確かめることが出来て幸せに思います。

壇上で涙する班友の顔見れば今日を限りに別るゝは幸し

日本を思う心が大事なことに気がつきました

(尚綱短期大学 家政 一年 橋本かおり)

私はこの合宿には先生の勧めによって参加しました。最初はとまどうことばかりでした。私の今まで信じていた事とは全く違っていたからです。私はお話を素直に受けとれなくて、班別討論でも意見を出すことができませんでした。しかし私の班の方はとても良い方ばかりで、こんな私にも声をかけてくれるのです。私には講義が難かしく、短歌も好きになれませんでした。この班員になれて、皆と会えたことが、自分にとって得るものだったと思います。まだ受け入れられ

ないこともあります。皆の考え方に触れて、外国ばかりにとらわれていた頃に比べて、日本を思う心がとても大事に思えるようになりました。

班友と交はす言葉のやさしさにたたりしくて涙するなり

他の人と共に生きる喜びを感じた

(鹿児島大学 農 一年 古川小由里)

大学に入って大学生活というものを考え、四年間で何をかめるのだろうかと考えた時、大きな不安を感じた。真剣になつて生きたいと思つた。幸い大学の良き先輩と出会い、すばらしいサークルに入ることが出来、自分なりに真剣に生きるということがどういふことか掴めそうな気がしたので合宿に参加した。

日本とか天皇陛下とかいふことを考えることは初めてではなく、抵抗は感じなかったが、人と共に生きる喜びというものを自分なりにつかめたように思う。

合宿を通して私は人の愛を持って語る姿に接した。自分はある人の愛によって生かされ、支えられているのだと思つた。自分は人と接する時、愛をもって接していかうと思つた。人の心を動かすような言葉には、愛があるんだと思つた。大和ことばのすばらしさをあらためて感じた。そしてそのすばらしさを語つてゆきたいと思つた。

御講義をききて

カメラレポート 22



四日目の午前、金文図書出版販売株式会社・廣木寧氏により『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の論読導入講義が行はれた。御講義の中で氏は黒上先生の御生涯やお人柄にもふれながら「黒上先生の御本が難しいのは、自分のみの修業や人格完成を目指してゐる者に対し、厳しくその志の立て方を叱り正さうとされてゐるからではないか」と語られた。

ひたむきに語り給ふ言の葉のあふるる愛に胸せまりくる

感動は己れの心を開くところにある

(尚綱短期大学附属幼稚園 山野晴美 22歳)

この合宿で私は、自分は何にも知らなかったんだということに気がつきました。社会に出てまだ二年しか経っていないのに、「私は一人前の社会人だ」と傲慢な態度でいたことに気付かされた時、あゝ自分なんて愚かだったんだろうと思いました。

人は経験の積み重ねによって、一人前の人間になるのではないかと思えます。様々な障害、悲しみ、苦しみ、それらを乗り越えたときの喜び、それに美しいもの、尊いもの、世の中に存在するあらゆる物事に対して、それらを素直に受け止め感動するたびに、次第に人間というものができてくるのだと思います。

また感動する心は自分の心を開いて、まっ白にしないと生まれないという事も痛感させられました。

明日からまた仕事が始まります。今の気持ちや日々の生活でも持ちつづけられるよう、私自身日々努力していこうと思えます。

我が心開きて友と語らふはかくもすばらしきことにかありなむ

第二十二班—女子学生—

占領政策に驚き憤りを感じた

(鹿児島大学 教育 四年 江口芳子)

来春から社会へ出るひとりの日本人として独立不羈の精神を持ちながら生きてゆく指針作りのために、また学生最後の合宿として気合を入れて参加しました。遅れて来たにもかかわらず班長といふ大役を任せられ心配しましたが、班員の方々に接して暗い気分が吹飛びました。私は班員の皆様とともに一所懸命頑張らう、私が出来限りのことを精一杯やりたいと思ったら、落ち着いてまゐりました。大変多くのことを勉強させていただき満足感が一杯で晴れ晴れとしてをります。特に小田村先生の御講義に深く感銘を受けました。「まほろば」の清水さんの文章を読んで涙が出てなりません。占領政策の数多くの事實に驚くと同時に憤りがわきおこってきました。歴史を平面的にとらへるのではなく、立体的にとらへることが大切だと痛感しました。愛情に満ちた御顔で話してをられた先生の御姿を私は忘れません。人のために、国のために出来る限りのことを毎日やってゆきたい。現実を直視し今何をなすべきか、いかに生きるべきか常に自問

自答しながら安きにつかず真剣に生きてゆかう。国文研の先生方、二十二班の素晴らしい仲間、また他の学生の方々本当にありがとうございました。

全体感想自由発表の折、白井先生の御話を拝聴して
ひとすりにみ国を思ふ師の君のたけきところに涙流れく

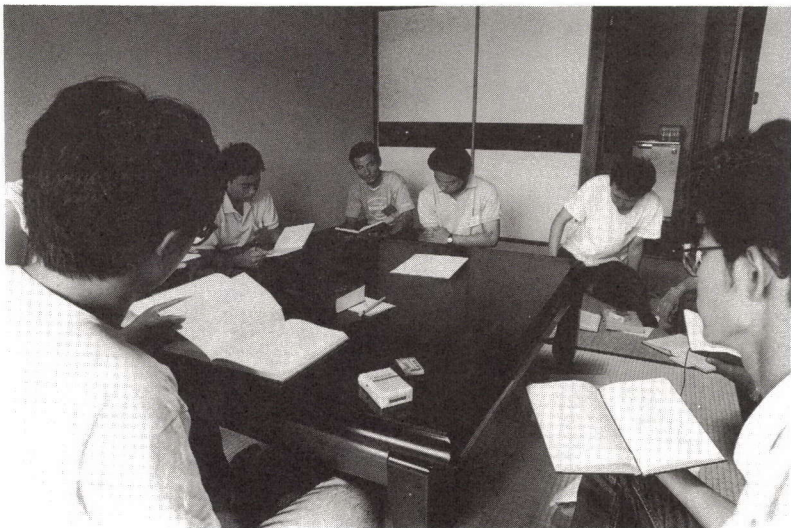
班員が昔からの友達であったような気がする

(日本青年協議会 清水久仁子)

私は二回目の参加ですが、前回(三年前)はすばらしい先生ばかりで驚いたことをよく覚えています。今度もそれには変わりありませんが、特に班の皆さんと心ゆくまで話し合えたことが本当に良かったと思います。みんないろいろな思いを持っていることがわかり、一層親しみが深まりました。班別討論の中で一つ一ついろいろな問題が解決されていたように思います。又、班長さんをはじめ班員一人一人がまるですつと昔からの友達であったような気がしてなりません。このような中で私達にとって大切な学びを、イデオロギー的ではなく、自然に体験と共に学ばせていただいたと思います。来年もぜひ参加させていたきたいと思っています。

班の友初めて会ふとは思へず言ひたき言葉のつぎつぎとわく

カメラレポート 23



廣木氏の御講義のあと、各班に戻り『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の班別論読の時間がもたれた。

美しい日本を心をこめて語ってゆきたい

(長崎大学 教 三年 早田保美)

私はこの合宿に参加して特に感じたことは、人の真心は確かに伝わっていくことでした。大学の友人達と語り合う時、中々もう一步踏み込んで心尽くして語り合うことができず、もどかしい思いをしていました。自分の殻の中にとじこもることの多かった私の心を開かせてくれたのは、ここに集まった参加者の皆さんでした。皆さんは本当に友の言葉に懸命に心を傾むけ、心からの言葉を返してくれました。こちらが戸惑うほどに心通じ合う世界を目の前にしたとき、人間とは本当に素晴らしいものだと感じました。私はこれから、この美しい日本のことを友人達に心をこめて語ってゆきたいと思います。そして自分自身が本当に日本の国の姿をあらわせるような人になりたいと思います。

和歌相互批評にて

わがうたを心合はせてともどちの直し給ひし心ありがたし

言の葉を重ね合ひつつともどちと過せし夜ははや更けゆきぬ

ひたぶるにわが胸内を語らへばうなづき聴ける友いますかも

人との接し方・真心を知る事ができた

(拓殖大学 外語 三年 大塚のりも)

私は大学で学生自治会、日本育英会拓殖大学共励会の執行部に所属しておりますが、この合宿に参加する前には、特に学生自治会の方は人間関係で悩んでいました。というのは先輩と隔たりができてしまい、心身をかたむけて語り合うという事から遠ざかり、自分の立場も見失っていました。しかし、この合宿に参加しまして、人との接し方、真心を知ることができました。私はまだまだ勉強不足で未熟な人間ですが、この合宿で学んだ誠意と真心で後輩と心を開けるよう努力したいと思います。そして再びこの合宿で得た友や先生方とお逢いし、もっと成長した私を見てもらいたいと思っております。

四泊とともに過しし我が友と今が別れ寂しかりけり

感動の廣瀬中佐の劇ができた

(西南学院大学 商 一年 黒木礼子)

班別討論は最初は恐しく感じられましたが、一度述べれば話せるようになりました。そして班友の心に迫った意見を聞くとき、こんなにすばらしい講義を拝聴させて頂いているのに、自分は講義のわずかな部分しか理解できなかったかと淋

しい思いが致します。聴くということは何と精神力を必要とし、話すというのは何と感性が要るのだろうかと痛感しました。そうした中に班友とはいつの間にかすっかかり打ちとけるようになりました。「夜の集い」では感動の廣瀬中佐をやるうということになり、始めは歌おう、いや歌だけではつまらない、劇にしよう、和歌も入れようと話しがどんどんふくらんであの発表になった。班員の廣瀬中佐への思い入れが、喜劇ながらも哀しいすばらしい劇になりました。

「夜のつどひ」にて

劇をはり心ふるへて挨拶せばみな胸手に胸なでおろす

「日の丸」や「君が代」を真剣に話したい

(神田外語学院 英会話本科 一年 古川文子)

私は以前から天皇制や「日の丸」「君が代」に興味をもっていました。今の世の中ではこのような問題について話し合う機会が殆んどありません。また多くの人はこれらのことを避けていると思われます。しかもあれこれ理屈をつけて反対する声だけは大きく、私は大変腹立たしく感じていました。が、うまく言葉にして話すことができず、もどかしさを感じていました、しかしこの合宿に参加して、多くの友が自分と同じような悩みをもっていることを知り嬉しくなりました。そして一人でも多くの人に真心を伝えようと努力している友を見て感動しました。また先生方の御講義を聞き、何度もう

カメラレポート 24



女子班の輪読風景。著者の言葉を正確にたどり、著者の気持ちに迫らうとする。輪読を初めて体験する参加者も多く、共に学ぶ喜びを知る。

なづきました。そして私自身も先生方のように真剣に話してみたいと思います。

真心を開き話したる班友との一年後の再会を願ふ
班友と心を一にとりくみし「夜の集ひ」の忘れざりけり

生まれて初めて自分の歌が詠めた

(尚綱短期大学 家政 一年 森本貞理)

初めてこの合宿に参加し、多くの感動を受けました。参加する前はこの合宿にとっても堅苦しいイメージをもち、不安と緊張で参加しました。最初の講義を受け班別討論のときは、矢張り来る所ではなかったかも知れないと後悔しました。しかし私はあることに気づきました。難しく分からなくても、どこかに共感できる場面があるということです。先生方の話の中にも自分と共感できる所があれば、とても嬉しくなり満足感を覚えるのです。とても不思議な感動だと思えます。もう一つとても感動した事があります。それは自分の歌が詠めたということです。生まれて初めて「自分の歌」を作ったことは、私にとって大きな感動でした。これからはいろいろな出会いを大切にしていきたいと痛感しました。

目を覚まし友の寝顔を眺むれば楽しき日々の思ひ出さるる

はるばると来た甲斐があった

(拓殖大学 外語 一年 松田理香)

卒直な感想として「本当に来て良かった、はるばると来た甲斐があった」ということにつきます。参加する前までは四泊五日もと思っていました。今はたったの四泊五日で大変多くの事を学べ、また班員達と過ごせたことが本当に嬉しい思いがします。とにかくこの合宿が良い体験になったのは、班員と先生方のおかげだと思います。本当に良い班員に出会ったと心から感謝致します。初日から誰とも隔りなく話が出来、心から分かり合える本当に良い人達に出会って良かったと思います。人生の限られた人との出逢いのうちでこんな良い班員達との出逢いは、一生忘れられないものとなりました。この四泊五日の出来事を忘れないでこれからの大学生活に生かそうと思っています。

限りある人との出逢ひ大切に忘れずにあよう阿蘇の友たち

「本当によかった」この一言に尽きる

(尚綱大学 文 二年 白杵直子)

自分を省るとまだまだ自信の持てない、とても小さな人間に思えてならなかった。だから少しでも多くの人の考えを聞き、心から語り合える朋と巡り会いたいと思ってこの合宿に

参加した。こうして取り組んだ合宿を振り返ってみると、本
当に良かった”この一言に尽きる。言葉では言い尽くせない
かけがえのないものを両手いっぱい抱えている。班員の活
発な卒直な意見に初めは戸惑ったが、とにかく吸収しようと
一心に聞き入った。すると卒直に自分の考えを述べることで
でき心から語り合うことができた。これが何よりの感動で
す。心をもって真心でもって接してゆく。そうすれば必ず人
の心に届くものだと分かった。心を開いて多くのことを語っ
てくれた朋。私はかけがえのないものをまた一つ手にし
た。

阿蘇の地のかげがへのない思ひ出はわが心に熱くとどまれり

第二十三班—女子学生—

自分の内で生まれてくるもの

(鹿児島大学 農 四年 山内聡子)

今回で三回目の合宿で、自分は全身を耳にして先生方のご
講義や班友の語る言葉にふれることができました。

この合宿で自分が日本のすばらしい伝統をうけつぐべき日
本人であると本当に心から信じることができました。今まで
日常生活の中で自分にとって、日本について語り、天皇陛下

カメラレポート25



国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生は、講義の中で、祖国日本の歴史伝統に自信
を無くしてゐる現今の学問的傾向の原因たるGHQの占領政策を具体的に迎られた後、占
領政治を終結させるため、祖先の残された言葉により国の姿を感じて歴史を追体験する努
力を国民一人一人が積むことを強く求められた。

をお慕い申し上げることは、何か特別なことであつたように思われます。しかし、班友と語り合ひの中で、私は自分の主張を理解してほしいためにだけに語るのではなく、また、人に同じ考えをしてほしいために語るのでもない、自分の内で生まれてくるもの——それは日本の伝統といつてよい——に對する感動によつて私は語るのだと気がつきました。

友の語るをききて

言の葉にならぬ思ひのあふるれど語らむとする姿導し

夜の集ひを終へて

布団しき枕ならべて友どちと時のたつのを忘れ語らふ

迎田さんの短歌創作する姿を見

消しては書き消しては書きて歌つくる友の姿のほほゑまじきかな

美しい心の実践を

(塾講師 松岡智子 22歳)

今回合宿に参加させていただいて、日本の美しい心、天皇さまの御存在を、班別討論や講義等でお話してくださる先生方や様々な意見を述べる友らの心から、自然に感動という形でしみじみ感じさせていただき、とても感謝しています。

それは、右寄り左寄りの思想やイデオロギーでなく、私たちの生活の中にある思いやりの気持ちや人のいたみをわかっての気持ちにあるのだと実感したからです。今まで天皇さまの御存在や戦争、東京裁判史観等を知識だけで得ようとして、

自分の生活の中にはそうした美しい心を実践していなかつたように思います。それを気付かせてくれたのは、白井先生の陛下を思われ、戦争で亡くなった同胞を思われ、家族を思われ、そして小さな一輪の花にさえ愛を注がれている御姿勢にふれたからです。

全体意見発表の折に

壇上へのぼりて和歌を詠む後輩の清き姿に涙こみあぐ

白井先生の笛の音をききて

笛の音に響くしらべにものふのかななきいのち感じたるかな

師の君の深きまごころのこもりたる笛の音ききて涙あふるる

深く考えさせられた

(九州女子大学 文 三年 大内田輝代)

気持ちの整理もつかぬままこの合宿に来てしまい、戸惑いと不安で一杯でした。最初の班友との顔合わせでも、全国各地の大学から来られているので、恥かしいやら、友達が出来るので嬉しいやらで、あつという間に時間がたちました。先生方のご講義は勉強不足の私には大変難しいもので全くといっていい程理解出来ませんでした。しかし、班別討論で各自の色々な考えを聴くことが出来たこと、また自分の素直な気持ち、「私には解かりません」という言葉が言えただけでもプラスになった気がします。私にとってこの合宿はお国の事とか天皇の事とかよりも、改めて色んな事に関して広い心で

深く考えさせられたことがよかったと思っ
ています。ありがとうございます。

阿蘇の地で班友と語りし我が心語らふごと
くに豊かになりゆく

白井先生に出会った感動

(拓殖大学 外国語 一年 水野丘子)

この合宿でよかった事は、今までの知り合
いとは違うタイプの人を知ることができた
事です。特に白井先生のように真直ぐに生
きていらっしやる方をまのあたりにして感
動のうずでした。自分が恥かしくなりまし
た。班の友達もいろいろな経験をもった人
が多くて、のほほんと生きてきた自分は
何なんだろうと思いました。皆なとても素
直できれいな心の持ち主でした。でも私は
心の中がねじくれてしまっていて、とて
も醒た考えしかできず、感動できないか
らと、泣くことさえできませんでした。

でも、班の友達のことや白井先生のこと
は忘れたくないと、思います。

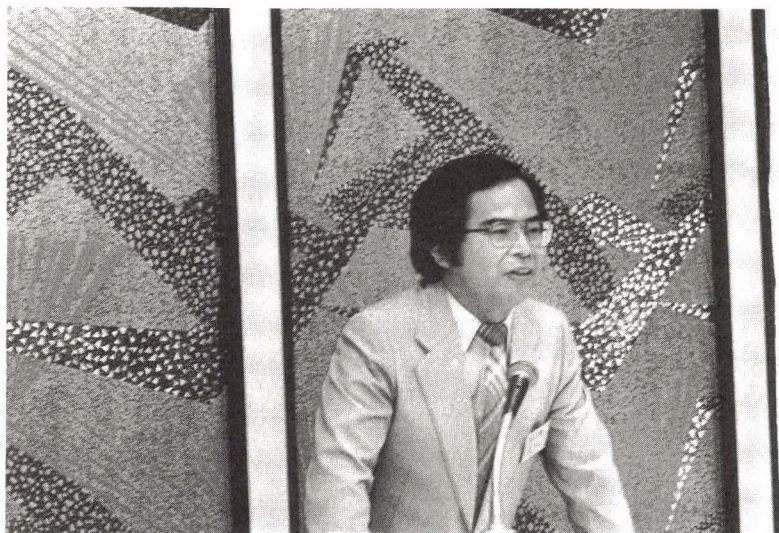
感動を語る友見て我思ふ我が感情はいづ
こへゆきぬ

純粹な心にふれた

(長崎大学 医 一年 合原陽子)

私は父に勧められてこの合宿に参加しま
した。でも父は天

カメラレポート 26



「創作短歌全体批評」をされる青山直幸氏(戸田建設㈱技師)。各班から創作短歌を採
り挙げられ、良いと思はれる歌には感想を述べられ、また作者の心情や実際に見た情景に
合ふやうに一つ一つの言葉を慎重に選びつつ添削してゆかれた。

皇陛下や君が代についてのくわしい話はあまりしてくれませんでした。一方、私は学校でそしてテレビで戦争の悲惨さをたたきこまれてなんとなく悪印象をもつようになっていたのです。

この合宿でいろいろなお話をきいてどんなに今の教育が偏っているのかわかりました。でも正直に思ったことを書くことと偏っていることを伝えるためにされるお話が今度は逆のほうに偏っている部分があると思うのです。

この合宿では本当にきれいな純粋な心にたくさんふれることができました。白井先生のような真心が歩いているような方のお話がきけたことは本当に貴重だったと思っっています。

すみわたる阿蘇のみ空のごとくある友のころにわがころを寄す

真剣に聴いてくれた班友

(実践女子大学 文 二年 大越淳子)

合宿に参加して一番心に残ることは班別討論の時です。いろいろな文献を前にして、いままでの自分なりの考えにとられずに素直な心で読んでゆく、心を寄せて読んでゆくことの難しさを感じました。先生方のご講義をうかがって、その時は感動するのですが、部屋に帰って再び考えると「でも」と感じることもあり、私はどうして素直な心を持ってないのだろうかと自己嫌悪に陥ることもしばしばありました。しかし、そんな私の話を班の人達は真剣に聴いてくれて率直に意

見を述べてくれました。本当にうれしかったです。班の人達とともに忌憚なく話し合っていくうちに自分の心の中にあるわだかまりが消えてゆきました。班長さんの心の美しさにも本当に感銘を受けました。

とつとつと語る言葉に班友の気持ちわたりてうれしと思ふ
語り合ふ友の心にふれしとき素直になりゆく吾に気づけり

来て本当に良かった

(尚綱短期大学 家政 一年 迎田順子)

私が今思っている正直な気持ちは、ここに来て本当に良かったということ。正直な話、来る前は「ああ行くなんて引き受けなきゃよかった、面倒臭いな」と思っていました。

合宿が始まり、初めての班別討論、私は自分から発言できませんでした。講義を拝聴しても意味もわからなかった。頭では考えているのですが、それがうまく言葉にのらないのです。これは私が前々から悩み続けていたことだったので、さらに自分がなげないと思う気持ちがつゆのり、ひどくおちこみました。でもそんな私の言葉をほんとうに心から熱心に耳を傾けてくれる、心温い人々に困まれてほんとうに胸がつかまる思いがしました。それから、天皇様のありがたさ、すばらしさを知ることができ本当に幸せだと思えました。

過ぎさりし日々の思ひを胸に秘めいざ別れゆく時の悲しき
すばらしきお言葉ききて我思ふうつくしき心持ちつづけたしと

きれいな心になっていく自分

(梅光女学院大学 文 三年 倉本由紀子)

この合宿に来る事はとても勇気のいることだった。友人にすすめられパンフレットを見ると難しい事が書いてあったからだ。確かに講義は私にとっては難しく、いろんな事に知識もなかったのも、とても意見のいえる状態ではなかった。しかし班員の方が早い時機に私の心を開かせて下さったので、その後は本当にたいした事でもない意見でも言える様になった。今まで人が自分の事をどう思うだろうかと、とばかり気にしていた自分がばかばかしくなり、それがなくなっただけからは本当に楽になった。どんな事でも熱心に聴いてくれた班友にはとても感謝していると共に、人ってこんなにやさしくなれるのかとひしひしと感じた。最初は正直な気持ち、何か一つの思想を詰めこまれてしまうのではないかと心配であったが、その私の考えを破ってきれいな心になっていく自分が嬉しかった。

心ひらき悩み苦しみを語りたる友のひとみのまぶしかりけり

友の心を知ろうとする努力

(中村学園大学 家政 一年 石橋 円)

私がこの合宿で学び得たものは、諸先生方のご講義よりな

カメラレポート27



自分の短歌が採り上げられるのではとひやひやしながらも、的確でユーモラスな指摘に思はず爆笑する。

により、「友の心を知ろうとする努力」でありました。私は班の中でもいつも意見が一人ちがっていました。いろんな意見があつてよいと思つていましたし、私は私だと思つていました。けれど私には、大事な部分が欠けていたのです。それは「友の気持ちを偲ぶ」ということでした。どんな気持ちで言つたのか、ということを考えることが私にはできていなかったのです。班別討論の中で「人は人、自分は自分で終わつては、この合宿に來た意味がない。少しでもその人の気持ちに近づこうとする姿勢が大事なんだ」と教えられました。本当にそうだと思ひました。

人の心偲ぶことの大切さ身をもて知れり十九の夏に

都合で早く帰りゆく松岡さんを見送りに

文書くと言ひて手を振るみ姿はあふるる涙でかすみたりけり

第二十四班——女子班——

日本文化のすばらしさ

(熊本県岱明町立岱明中学校 山方富美子 25歳)

合宿に参加させていただけ一貫して感じたことは、日本文化のすばらしさです。それをはつきり認識させられたのは、天皇陛下の御歌です。心の機微を細かに表現され、日本人の

心というものが満ちあふれているように感じられます。やまと言葉のもつ神秘さを痛感しました。

短歌創作においては、自分の気持ちを素直に表現することの難しさを体験しました。しかし、自分の胸中を深く探り、その気持ちに忠実に言葉を選び、やがてその生みの苦しみが次第に実を結び、喜びに変つていくことの嬉しさは、何ともいふようがありません。

日頃は「心を働かせる」ことがなく、その心の渴きを潤いあるものに変えて下さつた合宿に、心から感謝します。

日の本の伝統語りし師のみ言葉我が胸ぬちにつよく響けり

数日を共に過せし班友と別れの時の心寂しも

日本人としての思い

(鹿児島大学 教 四年 吉永美紀子)

二度目の合宿参加でした。昨年はただひたすら感ずるがままに自分の思いを語り、非常に心強い気持ちで合宿を終えました。今年もその気持は同じでしたが、自分の本当に言いたい事がうまく言葉にならず、少し、悔しく感じることもありました。しかしその反面、先生方や友らの話をじつと聴き入っている自分がありました。聴きながらハツとして、ああ、私の言いたかつたことはこれだったのだと気付かされたり、そして多くの方々の心より湧き出ずる言葉に涙を流しながら、自分の中の日本人としての炎が、より強く赤く燃えてゆくのが

を感じずにはいられませんでした。

本当に不思議としか言いようのない御縁を今はただかみしめながら、感謝の気持ちを全ての方々に謝してやみません。

まごころこめただいたすらに語らるる友の言葉に涙あふるる
師の君の言の葉かみしめ語らるるをただいたすらに吾は聴き入る

先人の思いを偲ぶ

(尚綱大学 文 三年 浅田千春)

参加者の皆様方の真摯なお姿と若々しい情熱に接して心が洗われる思いがしました。先生方や参加者の方々と話をして、短歌を見ても、先人を偲ぶ気持や温く友を思う気持が溢れているように感じました。この素晴らしい経験と思いを一人でも多くの方々に知ってもらいたいです。またこの合宿で味わったことを、日々の生活の中で考え伝えていくことが私達の大事な役目だと思います。日本の文化を考え、伝統を守り、先人の思いを偲ぶことが大事だと思います。

今回先生方や参加者の皆様方と触れ合うことができて本当に良かったと思っています。皆々様の御健康と御多幸をお祈りしつつ、運営に携われた方々に感謝申し上げます。また病む身をおして来られた徳永先生の御回復をお祈りします。

徳永先生が病む身をおして来られたと聞きて

病む身をば堪へて来られし師の君と聞きて涙をとどめかねつも

カメラレポート 28



「夜の集い」。合宿教室も余す所あと一夜となった。共に研鑽を積んできた友らとの一杯はまた格別だ。

ほほゑみて交はず言葉にやさしさのあふるるばかりのはじめての友

本気で語り合う

(九州女子大学 文 二年 井浦寿美)

日頃の大学生活の中では話す機会のない話題を、連日夜更けまで班の皆さんと語り合いました。山田先生や先輩から「日に日に顔の表情が明るくなつてきたね」と言われましたが、それは班の皆さんと心の隔てなく、本気で語り合うことができた満足感の表れだと思えます。〃本気で語り合う〃ことは素晴らしいことだと実感しました。また言葉では表現することのできないくらいの感動を多く受けました。

先生方のご講義は、初めて聴くことが多く、理解できない部分もありましたが、ご講義で学んだことを自分なりに勉強し、自分の考えや結論を見出していきたいと思います。

班の皆さん、また合宿にお誘い下さった山田先生、ありがとうございます。今後もぜひ参加したいと思います。

み友らの思ひをひたに語る見て我の心も満ち足りるかな

日本を真の独立國に

(武蔵野服飾美術専門学校 一年 茅野由美)

合宿は兄からの勧めによつて参加しました。必携書は難しく最初は読む気になりませんでした。が、電車待ちの時など本

を開いていると、つい夢中になつて読んだりもしました。

最初は不安と驚きで戸惑いましたが、班の皆さんが優しく接して下さつたので次第に不安も消えました。講義で語られることや班別討論での皆さんの意見に感動し、また自分の意見を聞いてもらえることはとても嬉しかったです。

御講義で一番印象に残つたのは、小田村寅二郎先生の「われらが祖國・日本を、真の独立國に立て直すには」でした。

また『國民同胞』の「即位礼」を読み、マスコミの情報の偏りに苛立ちを感じました。服飾が専門ですが、この合宿で古典に触れたので、これからも勉強したいと思えます。

阿蘇に集ひ友らと笑みて語りひし樂しき一夜を我は忘れじ

何が真実かを

(お茶の水女子大学 文教育 一年 栗山敦子)

友人に誘われ、パンフレットの「自分の生き方を見つめ直す」に惹かれて参加したのですが、天皇制や戦後批判をテーマとした講義ということで、最初のうちは半分警戒心を持ち聞いていました。しかし回を重ねるたび、先生方は偏つた意見を押しつけるのではなく、ただ真実を伝えようという熱意で話されていることに気付きました。戦後の何が真実か不明の時代に生き、無抵抗を感じたりする私ですが、班付の松吉先生の「本物は死なない」という言葉は忘れません。これからはいろいろなことを学び、〃何でも見てやろう〃の精神で、

自分の力で何が真実かをつかんでいきたいものです。

先生方や班の友、誘ってくれた友、お手伝いの方々に、感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございます。壇上の友の語るを聞きながら涙こぼれぬ心うたれて

天皇陛下や歴史を語り合つた

(尚綱短期大学事務局 緒方みき 21歳)

軽い気持ちで参加したのですが、最初はすごいショックを覚えました。私は今まで天皇陛下や日本の歴史には関心がなかったのですが、いきなり「天皇陛下は尊い」という様な御講義なので、心の中で「右翼的な集団だ」と怖い思いでした。しかしそれも初めのうちだけで、後では班の人達と気楽にあまり意識せずに、その話題を語り合いました。

もう一つ印象に残つたのは班の人達の事です。たつた四泊五日だったのに昔からの友達のように、自分の心の底まで見せてくれて、そこが本当にうれしかったです。

ご指導下さった班付の先生、御病気なのに私ども尚綱の者の為になぞわざ来て頂き、またこの素晴らしい体験のきっかけを作つて下さつた徳永先生、本当に有難うございました。

昨夜までの友との別れさびしけれど家路と思へば足どりかるし

カメラレポート 29



各有志班、大学別、地区別に思ひ思ひの出し物が登場し、集ひの雰囲気盛り上げる。

第二十五班—女子学生—

素晴らしい経験をした

(九州女子大学 文 三年 坂元麻子)

二回目となったこの合宿に班長を依頼されて、私は果たして班員を引っばっていけるかどうか不安でした。その事を母に話すと、母は、「自分なりに一生懸命やってくればいいじゃないの」と言ってくれました。その言葉で私はすごく気が楽になりました。そして、素敵な班員との出会いによつて班長だからと肩を張らずに今日までやってこれて、今、満足感を強く感じています。

合宿に参加した目的は、「心をきれいにしたい」ということでした。その目的は日々の班別討論や、夜、枕を並べていろいろ語り合ううちに果たすことができずゆくのを感じました。参加できて本当によかったと思います。この素晴らしい経験を今後の生活に役立てていきたいと思っています。

「全体感想自由発表」にて

あふるる思ひ語らむとして手をあげて壇上に向ふ時胸は高鳴る
壇上に立てば思ひのこみあげて言葉つまりつつやうやく語りぬ

心がどんどんきれいになっていった

(鹿児島大学 農 四年 藤原順子)

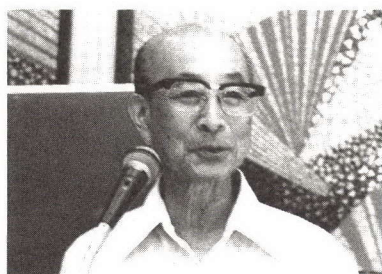
四泊五日のこの合宿の中で、心がどんどんきれいになっていく様でした。そして友人たちも目を追うについて生き生きとして見えました。毎晩遅くまで世の中のタブーなど全く無視して自由に語り合った思い出は、一生心に残るだろうと思います。お互いに心を開いて話をし、また心を開いて友の言葉に耳をすませたこと、それがこれほど短い期間で深い友情を感じた理由だと思ひます。

御講義の中で、占部先生の廣瀬中佐のお話しには強く心をうたれました。これが歴史なのだと思いました。歴史とは何と生き生きと躍動しているのでしょうか。廣瀬中佐という一人の人物を通して明治という時代のすばらしさを知りました。
聖徳太子の片岡山の御歌

しなてる 片岡山に 飯に飢て こやせる その旅人
あはれ 親なしに なれなりけめや さすたけの 君
はやなき 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ
本心に美しい調べだと思いました。そして聖徳太子の御歌を今生きている私たちが味わうことができるのは、ありがたいことだと思ひます。

掃り支度をしながら

ハンガターの服はづしてしまひつつ別れのときのせまれるを知る



「全体感想自由発表」。次々に登壇した友らは、合宿教室を振り返っての感想を湧き上がる思ひそのままに卒直に語ってくれた。

友達の大切さを実感した

(拓殖大学 外国語 一年 松本幸恵)

初めてこの合宿に参加して、何をするのか、意見を述べられるだろうかと少し不安でした。しかし班の仲間と心から分かり合え友達になれたことが一番の思い出となりそうです。友達の大切さを改めて実感しています。

天皇陛下については多くの先生がお話して下さいました。又映画が大変印象的でした。陛下が毎日忙しく国民の為に働いて下さっている事が良く分かりました。私達も一人一人が国の為に、人の為に頑張っていけたら良いと思います。

討論も段々と話せるようになり、真剣に、しかし明るく、楽しく話し合えました。普段学校で話すことのないような真剣な話が出てきて、たった五日間での友達と思えないほどです。新しいことが数多くありました。これからも積極的に学んでいきたいと思えます。

友らみな心開きて語り合ひ厳しき言葉もうれしかりけり

人の心の優しさ、温かさを知った

(鹿児島大学 法文 一年 岩川ちなみ)

私は「感じる心を鍛える」ということが一番印象に残っています。普段先輩に「今、何を讀んでるの、その本について

どう思ったの」と聞かれますがなかなか答えられません。その時「感動する心」「何かを捉えようとする姿勢」がなかったのに気づきました。そして「感動」を表現する「言葉」がないのに気づきました。自分の心が分からないまま言葉を発してしまおうと先輩が「自分の気持ちをよく見つめてみなさい」と指摘されました。合宿への参加を楽しみにしつつ、一方でうまく自分の気持を言葉にできるだろうか、不安もありました。今、改めて言葉の難しさを感じています。

それから班友に接して、人の心の優しさ、温かさを知りました。「知りあい」にすぎない人たちとも、本当の「友だち」になれるように、学んだことを話っていきたいと思えます。

「全体感想自由発表」にて

壇上にあがりて語る友の言葉ききて涙のこみあげてきぬ

次こそと思ひし時に友の手の高く挙がりぬ一瞬早く

人がこれほど大きく見えたことはなかった

(尚綱短期大学 家政 一年 長友桜子)

私はこの合宿で学べたことを嬉しく思います。一人一人の考え方はそれぞれありましたが年の隔たりもなく、正面からぶつければ話し合ったことを非常に嬉しく感じました。班別討論で自分の感動をそのまま語ろうとする真面目さに、正直いって人がこれほど大きく見えたことはありませんでした。

た。私も乏しい言葉なりに話そうと思いました。しかし人に自分の感動を伝えることは非常に難しく、御講義も分からないことが多く、自分の学問の頼りなさをつくづく感じました。でも今日ここまでこれたのも班員のおかげだと思います。

私は、聖徳太子の「人はみな凡人だから、お互い助けあわなければならぬ」というお言葉にすぐ感動しました。一つでも感動したものが見つかったことを嬉しく思います。

良き友を得し喜びを胸にして学びゆかむと心に思ふ

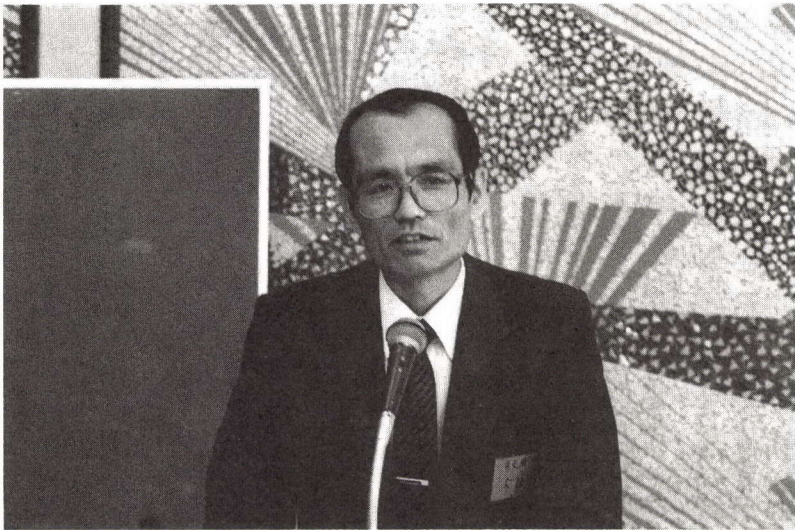
友の素晴らしさが見えてきた

(長崎大学 教育 聴講生 西田佳代子)

今回は三回目でしたが初めて会った人ばかりで、不安な気持ちも少しありました。しかし寢食を共にしていく中で、皆の心が次第に打ち溶け合っていくのが感じられて、とても嬉しく思いました。班別討論は一人一人が自分の素直な想いをポツリポツリと語っていくという静かな雰囲気でしたが、その中に素朴で暖かいものを感じました。

一日、二日と経ていくうちに緊張もほぐれて、時間の経つのも忘れて語り合いました。講義の感想から自分の体験まで話はさまざまでした。みんなの言葉を聞いていると一人ひとりの素晴らしさが見えてきて、優しい心根が伝わってきました。どちらかというところ聞く方が多かったのが心残りですが真

カメラレポート 31



「運営委員長所感発表」。今林賢郁運営委員長は「日本人とは何か、についての糸口をこの合宿で与へられたので、後は自分自身でしっかりと考へていって下さい。」と述べられた。

剣に話し、一緒に過ごせたことに喜びを感じた合宿でした。
縁ありてともに過せし合宿の友は心の宝と思ふ

天皇陛下のことがとても勉強になりました

(香蘭女子短期大学 秘書科卒 西村治美)

今回はじめてこの合宿に参加しましたが、とても勉強になったのは天皇陛下の事でした。日本と共に歩まれてきたということを強く感じたのは、第二次世界大戦に関する話を聞いてからで、映画の内容などもとても印象的でした。また短歌を学ぶことによつて、天皇陛下のお気持ちにふれる事ができるように、また自分も天皇陛下にならつて良い短歌をよめるようになったらいいと思います。

同じ人間であつても、それぞれの時代、立場、考え方の違いによつて生じる生き方のちがいを不思議に感じ、私は何処にいるのかと悩んでいましたが、この合宿で得たことを指針の一つとしていきたいと思ひます。勉強不足で、班の方には迷惑をかけてしまいました。楽しい合宿でした。

班友と語り合ひし言葉胸の底にしみとほるごとく思はるるかな

たくさん好きな言葉ができた

(中村学園大学 食物栄養 三年 古川紀子)

この合宿は実に感動的で、多くのことを学びました。気持

を簡潔に正確に表現することの難しさ、そして難しくさせているのは素直でない自分の心であることにも気付きました。そして私は皆のやさしさ、あたたかさ、先生方の思いやりの中で心がほぐれ、自分の気持ちを飾らずに表現できました。

短歌は作ったことがないので不安でした。読んでも良さが分かりませんでした。しかし「短歌全体批評」の時間に皆の短歌を聞いているうちに、自分の偽らない気持ちを素直に表せたのが良い短歌であることが分かりました。

たくさん好きな言葉ができました。その中からあげます。

「人をおとしめたり疑つたりするのは努力しなくても勝手に出来るが人を信じて敬ふのは努力しなくてはできないことだ」「不請ふじょうの友」。二十五班の皆さん、又、会いましょう。

とつとつと語る言葉を真剣に聞きくれし友の心ありがたし
友みなのがやさしき心忘れまじ今阿蘇の地を立ちてゆくとも

かけがえのない友人を得た

(星陵女子短期大学 経営実務 二年 中田千香)

私は、この合宿に参加して多くのことを学びました。廣瀬中佐や、聖徳太子の御講義では、歴史上の人物から得るものはいかに大きいかを知りました。歴史に名を残した人の生き方を実感しました。歴史上の人物の書物をこれからはしっかり読んでみようと思ひます。

何よりもすばらしかつたのは班員との語りでした。思っ

たことを真剣に話すと必ず真剣に聞いて意見を言ってくれます。これは本当にこの上ない喜びでした。大学の友達とは話せない、真面目な話から何でもない話まで、一生懸命語り合いました。最後の夜は気がつくくと外が明るくなっていました。

この合宿に参加して、かけがえのない友人を得たことに感謝します。二十五班の皆さん、ありがとうございます。

阿蘇の地でも語りしかずかずの言葉笑顔と共に忘れじ

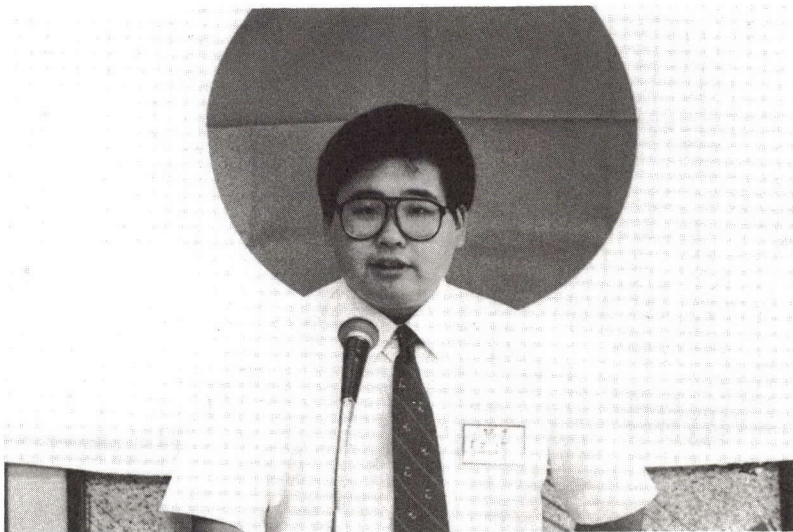
第三十一班 社会人

今まで何を学んできたのか—大きなショック—

(日本殖生園 園 了介 31歳)

実に軽い気持ちで合宿に参加したが、講義が始まり、班別討論をしたら、ちよつと待てよ、三十年以上も何をやってたんだらう、何も知らないじゃないか、と非常に大きなショックを受けた。日本の歴史の重さ、その歴史の中に生きた人々の心、天皇の御心、失われていく日本の言葉……真実を知ることの重要性、祖先より永年受け継がれて来たものを正確に後世に引き継ぐ事の我々の責任の大きさ等々。それらに気づくきっかけを与へてもらったこの合宿教室に感謝したい。

カメラレポート 32



閉会式で学生を代表して挨拶をする九州大学四年の三沢茂美君。「この合宿を通じて印象に残った言葉を忘れずに学問を続けていきたいと思います」と語りかけた。

しかし、短歌創作には本当にまいった。自分の気持ち可言葉として表現できない。いやそれ以前に物を見て感動できない。何と情ないことか、自分の心は貪しいと思うと同時に、昔の人は心が広く、豊かだったのだなあと感じた。

「班別短歌相互批評」にて

友の詠みし歌を心して味はへばうるさき蠅も氣にならざりき

合宿で学んだことを実生活に於て実行したい

(九州日殖(株) 江口勝博 34歳)

この合宿に来て、いろいろ講義を聴いていくうちに日本の歴史、伝統の大切さをひしひしと感じました。私は今まで歴史・伝統について考えることなく社会生活を営んで来ましたが、今ここで子供の時をふりかえってみると、祝祭日にはどこの家でも国旗を揚げていたと思います。現在はこの姿を見ることがまれになってしまいました。常日頃は私も何も感ずることなく見すごして来ていましたが国を愛する日本人として必ず実行していかなければならないことだと痛感しています。

心のどこかに、合宿で勉強したことを、とどめておけばこれからの社会生活を営んでいくうえで間違った事はおのずから見えてくると思います。

父と子が湯舟につかり楽しみに語る姿のうらやましきかな

二つのことを学んだ

(防衛庁航空自衛隊 23歳 村岡正智)

第一点は心を豊かにしようということです。素直に人と物を見つめ、相手に心を開き、相手の開かれた心に自分自身が入って行き、感動を共にする事の喜びを体験できたことは何ものにも替え難いものであります。

第二点は、日本語を正確に話そうという事です。私は和歌を創るという事を通じて、正確な言葉を選ぶことがいかに難かしいかということを経験することができました。そして、正確で美しい日本語を話すことが日本文化の継承につながるんだという事を確信することができました。

以上の二点を実践する事により、現代の日常生活において、ともすれば、殺伐と乾いたものになりがちな、私自身の心が豊かな日本人の心に帰ることができると思います。

白井傳先生の横笛を聞きて

日の本に殉ぜし友を思はるる大先輩の笛の音深し

日本の歴史・文化を大切にしたい

(株)ピコイ 秋場良司 24歳

この合宿に初めて参加してみても感じたのは知らないことがたいへん多くあったということでした。山内健生先生の

講義を聞き、我々が受けていた情報が片寄っていることや不正確であるか、これらの情報により固まっていた自分の考えの浅はかだったことを、知りました。また黛敏郎先生の講義を聞き、日本文化の素晴らしさ、日本人のすごさを知り、ひどく感銘をうけました。現代の我々の生活の中で、いかに日本文化や祖先をおろそかにしていたかということを知り、未来の人々のためにも、日本人として、日本固有の文化を大切にしていかなければならないと思えました。そのためにも本当の日本歴史や祖先の人々のことを勉強し自分自身のできることから少しずつ日本の文化を大切にしていきたい。

ご講義を聞きて心をうごかされる今までの考へいかに浅きかと

先生方の講義に一貫したものが感じられた

(厚木市役所 高橋武男 50歳)

十分な認識もなく、ただ今後の自分の人間形成に役立たせる為、少しでも若者の考え方が把握できればと参加させていたのだが今は恥ずかしい限りです。

山内健生先生の導入講義、二日目の占部賢志先生の廣瀬中佐の御講義、三日目の黛敏郎先生の講義、さらに四日目の小田村寅二郎先生のご講義「われらが祖国・日本を、真の独立国に立て直すには」等々を拝聴してそこに一貫して流れる日本を思われる真情が感じられました。又現在、日本がどのような状態にあるかが理解できました。小田村寅二郎先生の講

カメラレポート 33



「この合宿で出会った友に手紙を書きたまへ。一通の便りがどれほどの力を友に恵むものか」と主催者を代表して話される国民文化研究会事務局長・長内俊平先生。

義にもありましたように、確かにそれぞれの国に個性があり、昔からの伝統文化に支えられた日本人の我々が護り将来に伝えなければならぬと思います。

全体感想自由発表を聴て

若きらが心の底ゆ語ります言葉に感じる明日の日本を

「本当の事・正しい事」を正確に伝えていきたい

(出光興産㈱ 庄子 修 34歳)

自分で考えて「正しい」「同感」と思われる事でも素直に信ぜず、無理矢理疑っていたように思う。今思えば学生の頃からその様な風であったようだ。教育や環境が悪かったのか、自己錬磨が足りないのか定かではないが、世の中全体がそのような風潮になっている気がする。このままで良いのかと思う。「正しい事」が仲々伝わらない環境、「正しい事・信ずる事」を言い出しにくい雰囲気等といったものが蔓延しつつあるのではないか。本当にこのままで良いのかと思う。やはり正していく行動を身の回りからでも、少しずつでも、起こさねばならない。社内において若手社員と少しでも多くの人と一諸に勉強して行きたい。又我が子らにも「本当の事正しい事」を正確に伝えていきたい。後世に伝わるように。

白井傳先生のお話を班にてききて

国思ひ生きます日々暮らしをば師は淡々と語り給ひぬ

淡々と語ります言葉にこめられし熱き思ひにただ圧倒されり

子供らに對島の歴史を伝へむと師は黙々と一人働く
我が国の政事をば正さむと師は政治屋に徹を放ちぬ
我が暮らし師のみ姿に比ぶればただ慢然と過ごす毎日
正しき事を次の世代に伝ふべくまづは身近な事から始めん

違う職業の人々の話を本当に聴いた喜び

(岐阜県揖斐川中学校教諭 30歳 川村吉司)

私にとって、大きく心に残っていることは、班員の方々と
の出会いでした。教員という世界の中で、子供たちや同じ教
員という狭い人間関係の中にあつた私にとって、自分の世界
とは違う世界に生きる人々と出会い、またその人たちが何を
考え、何を思っているのかという、心に触れることができた
ことは、大いに私自身の心の刺激となりました。その人たち
と班別での討論をする中で人の話をわかることの難しさを実
感しました。普段何気なく聞いている人の話をここまで真剣
に、相手の心に迫ろうという気持ちで聴いたのは初めてと言
つてもよいと思います。これが本当に「人の話を聴く」とい
うことであると思ひました。

朝夕を共に語りし同輩ともぢと別れ惜しみつつ阿蘇をあとにす

第三十二班 社会人

短歌創作に興味

(亜細亜大学企画課 長沢克尚 24歳)

二日目くらいまでは、講義内容や班別討論などに大きな抵抗を感じていました。これは思想を押しつけられているのではないかと頭では理解していても受けつけず拒絶してしまいました。自分の気持を素直に言葉にできなくて、それ以上に内容についてゆけなくて、討論は苦しみの連続でした。従って一分一秒までも大変苦痛に感じていました。しかし、自分の臨む姿勢を変えてみると、それまで拒絶してきたものがないとも惜しい気がしてきました。それからは前向きな姿勢で取り組むことができたと思います。

短歌創作には大変興味を覚えました。歌を詠むことで自分の素直な心を見つめ、感動を伝えることができたような気がします。これからも折にふれて作ってみようと思います。

八月七日慰霊祭にのぞみて戦死した祖父と残された祖母を想ふ

ぬばたまの闇に警蹕しみ入りて祖先の御霊ここに迎へん

ソロモンの水漬く屍となりける祖父の御霊を心に感ず

残されし祖母の顔おもひかに刻まれししわの深さは祖父へのおもひか

願はくばしだいに小さくなる祖母を守りたまへや祖父の御霊よ

カメラレポート34



「お元気で！ また会はう。」励まし合った友との再会を約し合宿地を後にする。

「国体」を守り続ける

(日本植生園兵庫営業所 杉山二郎 28歳)

私たちの世代は平和な時代に生まれ、育ち、毎日を平凡に何事もなく苦勞知らずに生きてまいりました。戦争中の御苦勞につきましても表面的な知識しかなく、自分が恥かしい限りでした。今日で合宿は終了致しますが、帰りましても眞実の歴史を勉強し、家族や社員に伝え、微力ではありますが「国体」を守り続けるよう努力致します。

また、各地より集まった班員の方々のいろいろな意見を聞き、勉強になる事が多かったですと感じます。精神的にも助けていただき感謝致しております。

班友と語りし時間は短かくも我が人生のひと節となる

教育者としての使命

(大分県立大分工業高校教諭 藤原耕一 29歳)

この合宿で自分に課せられた教育者としての使命が何であるかを知らされた気がしました。教師は生徒に基本的な知識と人の道を教えなければなりません、私には人としての道を教えることは非常に難しいことでした。言葉が抽象的であると共に自分自身もはつきりとしたことが分かっていなかったからだと思います。しかし、この合宿でその糸口がみつ

かったと思えました。人の道とは日本人としてまず自分が日本の心を身に着けることだと言うことです。生徒が成長するために私が日本の心を身に着け、豊かな心を持った人として成長することだと思えます。今日よりは教師の使命として、知識と共に身をもつて人の道を教えようと思えます。

風邪ひきしわれを気づかふ言の葉に班員の心のあたたかさ知る

日本の文化伝統の継承が民族の使命

(宮崎神宮 河野公俊 29歳)

現在の日本は外からは米の自由化、北朝鮮、韓国からの賠償問題や天皇の戦争責任、内からは極左のゲリラ事件など、様々な問題があり大きく揺れ動いており、将来に不安を感じていたが、御講義を聞き友と語り合っているうちに、皇室を中心とした美しい日本の文化・伝統を継承していく事が我が日本民族の使命であることを感じ、自分は何をすべきで、何を継承してゆけるかと考えるようになり、合宿前の不安ばかり感じていた自分を恥かしく思いました。

仕事に追われ、マスコミに左右されていた私に、このようなすばらしい場を与えていただいた事を感謝申し上げます。

かがり火のほのかに光る亮庭にて警蹕のこゑ静かに流る

我が人生の一転機

(厚木市教育委員会七沢自然教室 飯田俊一 43歳)

この合宿教室は初めてで、今さらこの年になってと思うなど、不安と期待の複雑な気持ちで参加させていただきました。

合宿では日本の文化とは何か、小田村寅二郎先生をはじめ各先生方の御講義を拝聴させていただき、初めて聞く言葉、

初めて知る事件、初めて見る内容とに唯々感心し、自己の勉強不足を反省することの連続でした。

今、私は丁度、人生の折り返しの時期にいます。日頃は仕事や家庭に追れておりますが、最近、何か非常に不安を感じるものがあります。私は今、こう思っております。これから何をするか、本合宿が我が人生の一転機となつたと。

霧もはれ心ますます爽やげど友と別るるは寂しかりけり

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今年もまた、千数百首に上る短歌が創作されてをります。

短歌は、古来、私達の祖先が「しきしまの道」と呼び、言葉の修練、延ては心の練磨の道として、永く守り伝へて来たものですが、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、殊に若い世代には、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌の創作は無縁の感があり、ある種の負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿の日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されてゆく様に思はれます。それに至るまで参加者の合宿課題の数々に取組む努力は並々ならぬものがあるのですが、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題を等閑に付してきた現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも二歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作、そして、その後の参加者同士の班別による相互批評でした。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる様な人間性を取り戻さうとする試みが、細やかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、まさしく忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれたに違ひありません。

合宿三日目の午後、矢永誠二氏（福岡県立玄洋高校教諭）による僅か一時間の「短歌創作導入講義」によつて短歌を作る上での基本的なルールが指導され、その後の散策を経て夕刻には歌稿を提出するといふ慌しい日程の中で生み出された短歌でありながら、作者の集中された内心の働きは、その言葉の端々に充分に表はされてをり、作歌上の巧

拙を超えて、強く心惹かれるものが籠ってをりました。提出時刻間近い夕食前の時間帯は、廊下に行き交ふ人影もなく、合宿所全体がまるで水を打った様に静まり返って厳肅な雰囲気に包まれ、真実の言葉をさがし求めて一人びとりの張りつめた心の動きが、肌に触れて感じられる様でした。

提出された短歌は、その日のうちに国民文化研究会の会員によって選歌が行はれ、翌日謄写版刷りの数百首の歌集となつて全員に配布されました。そして、その歌稿をもとに、青山直幸氏（戸田建設(株)勤務）によって、創作短歌全体に亘る講評が行はれ、短歌批評のポイントについて指導がなされた後、各々の班に別れて、班員同士の濃やかな相互批評が行はれました。ここでは、技巧の巧拙を論じ合ふのではなく、作者の心を偲びながら、その心に添って、言葉を正しく客観化して行くといふ作業が、班員全員の心と知恵とを集めて徹底的に行はれました。さうして、互ひに友達の心に深く触れ合ふことによつて、合宿生活において寢食を共にし、胸中を披瀝し合つてきた友情の結び付きが、ここにおいて一段と深まつて行くことが確認されてゆきました。かうした、短歌創作を通じて展開される、日常生活に於てはまことに稀有な精神生活の体験は、参加者の一人ひとりに、言ひ知れない、ほのぼのとした喜びをもたらしたのみか、学問と友情との分かちがたいつながりをも、自づから、感得せしめるに至るものでありました。

ここに収録された短歌は、その表現形式においては稚拙であるかも知れませんが、参加者各々の切実な情意の率直な表白であり、この合宿教室を通して現出された感応相稱かんおうさうじょうの世界の一大交響楽と言つていいかと思はれます。これらの短歌の中から瑞々みづみづしい貴重な魂の輝きをお読み取り下さり、短歌本来の姿が顕現されつつあることの一端をお汲み取り下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草 (しきしまのみち) 合宿第一回目の創作作品 (参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録)

第一班

九州大法三 大瀬博幸
車窓から外を眺むれば広ごれる阿蘇のすそ野
に町並の見ゆ

日本大文理一 真田詳三
あたたかくつつみこむがごとつらなれる外
輸山のかなたに見えけり

早稲田大教二 玉置泰史
恐竜の背なにも似たる山肌は煙をまきて人を
拒めり

拓殖大外四 鎌田淳一
車窓より草千里をば見渡せば草あをくして心
あらはれたり

同志社大工三 村木隆広
阿蘇山の噴火を神の怒りとぞ信ぜし人の宮居
をつくりし

畏みていにしへ人の祀りにし阿蘇の社に我も
参りぬ

早稲田大政経四 鶴野光博
阿蘇登山

登りゆく道の辺に大き赤茶けし岩そこここに
散らばりてあり

かくも大き岩さへも飛ばす大阿蘇の噴火の様
ぞ如何にと思ほゆ

拓殖大外一 菅原慶一
阿蘇山の煙にいぶられいづること日本を思ふ
心わきくる

防衛大理工二 濱口和久
故郷の阿蘇の山並み見わたせば心はづみて我
を忘れぬ

第二班

中央大文博士前期一 土井郁磨
講義中に花田君の方を見て

お話をしつかり聴かむと針腕にさして眠気を
はらふ君かな

草千里にて
鹿兒島大農四 原一文

見わたせば青き草野のをちここに赤牛たちの
草を喰みをり

早稲田大教一 真庭宜幸

相互批評後

集ひたる広場の前の木立ちよりもる朝日の
すがすがしきかな

班別相互批評の後
亜細亜大経二 福富賢介

きりたてる火口の底の深きより白き煙の涌き
上がり来る

九州大法一 花田芳夫
にぎやかにたはむれごとを言ひ合ひて笑ひつ

つ登る山道楽し
拓殖大外二 矢嶋弘幸

阿蘇の山頂にて
涌き上がる白き煙にむせかへりとどまりあへ
ずおるは口惜し

大分大工三 佐藤健之
不安気に馬に乗る子にその父のよりそふ姿の
ほほゑまましきかな

我もまた我が父親と馬に乗りし幼なき日々の
思ひ出さるる

拓殖大外一 野崎恭裕
班別批評ののち班員に単位取得のために
来しことをうちあけて

来しわけをはずかしさまじりにうちあくれば
あたたかく笑む先輩ありがたし

第三班

亜細亜大経営三 佐藤 順一郎

バスに最後に乗りこみて

我のため席空けてまつ班友の顔を見れば嬉し
き思ひのわき出づ

早稲田大教三 山下 拓男

幾丘のうねりをなせるをちこちに放たれし牛
の草をはみをる

西南学院大経四 田崎 恭士

車窓より外を見渡せばさみどりの阿蘇の草は
らはるか広がる

九州大工一 吉岡 良太

牛二頭共に寄り添ひのどげくも草を喰みたり
青空の下

広島大理一 幸 紀宏

いくたびも見し山なれど緑なす阿蘇の雄々し
き胸にせまりく

壮大で緑美しき阿蘇の地にまた来たしとの思
ひわきくる

香川大農二 森 田 真史

阿蘇の山その雄々しさに比ぶれば今ある我の

なんと小さき

拓殖大外二 森 洋一郎

緑濃き阿蘇の自然に抱かれてしばしくつろぐ
時を持ちたし

第四班

鹿児島大工一 前田 徹夫

向ひあひ語りかけつつ先輩の眼はじつと我
を見つむる

真剣に取りくまぬ我思はるる先輩の声心にひ
びく

長崎大工一 來島 正幸

灰色の雲にかくるる日によりて輝く緑ゆ光も
れ出づ

拓殖大外一 稲垣 達也

バスで阿蘇へ向かふ途中
火の山に近づき心高鳴れど行くてさへぎる赤
牛の尻

バスの前尾を振りながら悠々と行く赤牛もま
たおもしろし

早稲田大政経三 岡田 浩

バスを連ねて阿蘇に行きし折り
さ緑に照りわたりたる草原を走りゆくバスの
小さく見ゆるも

拓殖大外二 大倉 裕雅

討論をかさぬるうちにひしひしと己が勉めの
足らざるを知る

亜細亜大経営三 石川 純也

阿蘇の山登りてゆけば灰ありて時折ふめば舞
ひあがるなり

亜細亜大経営四 岡山 英一

阿蘇中岳を下る

友どちと山おりゆけばチチチと小鳥のさへ
づりかすかに聞こゆ

たたずみて耳をすませばさへづりは野のをち
こちゆ聞こえくるなり

かんだかく小鳥のさへづり聞こえきて阿蘇の
すそ野はのどかなるかな

第五班

九州大法四 三沢 茂美

今上天皇様(当時皇太子殿下)が沖繩を
御訪問されし折に(映画「今上天皇」を
拝見して)

祈られる殿下に向けて突然に火炎びん放りに
ける者あり

御身をばかりみずして案内せし婦人を案じ
たまふ大御心はも

げんさんは大丈夫かと御声かけます深き御心
我が胸をうつ

亜細亜大経一 濱田雄一

気がつけばはやも半ばは過ぎ去りて我がとり
くみを返りみるのみ
いやさらにおのれむちうちとりくまん少なく
なりし合宿の日々を

拓殖大外一 岩沢雄一郎

窓の外との外輪山をみわたせばかみなり雲のを
ちこちに見ゆ

第一経済大経一 吉永満男

火口より白き噴煙もくもくと入道雲のごとた
ちのぼる

鹿児島大農二 椎原恒介

阿蘇に向かふバスより景色ながむれど己が心
はなかなか動かず
さまざまの阿蘇の自然しぜんの美うつくしさを感じる心我
は持ちたし

日本大聴講生 井坂信義

中岳の火口ゆのぼる白煙の空に登りて雲と交
はる

九州リハビリテーション大 二岩見憲司

バス止まりいかなることかと前みれば阿蘇の
赤牛路上に遊ぶ

福岡大人文三 山田淳

大いなる阿蘇の山なみなむれば己の心が広
がるこちす

第六班

早稲田大一 文四 櫻本 稔

サークルの仲間らとともに合宿に参加したる
はひたにうれしも
書かを読み仲間を信じることの集ひ絶やしてなら
じとかたく思へり

防衛大理工一 白井亮次

噴煙は眼下に望む火口より沸き立ち返り天に
登るも

亜細亜大経三 茅野輝章

むせかへる煙りの中に店を出しもの売る人の
たくまじきかな
声高く皆でうたひしバスの中友の顔にもほほ
ゑみの見ゆ

九州大工二 船崎好助

あな雄々し阿蘇の姿をみてぞ思ふおのが心も
かくありたしと

中央大聴講生 三林浩行

いただきゆ火口の底を見んとしてガスにむせ
びて胸痛くなる

阿蘇登山

亜細亜大法一 山田 淳

いただきゆ火口の底を見んとしてガスにむせ
びて胸痛くなる

火口を見ばやと思ひ登れども思ひかなわず悔
しかりけり

拓殖大外一 岩田 稔

咳むせる煙ありても見むとして深き火口を我
はのぞけり

拓殖大外三 川見紀継

広ごれる阿蘇の山々見たせば昔旅せし事浮
かびくる

三年前一人旅せし中国の万里の城の思ひ出さ
るる

第七班

佐賀大理工四 白木 潤

班別討論の折の中島先輩
先帝の神去りましし日の事を語らるる大人の
声はつまりぬ

拓殖大外一 吉村和士

なだからに広がるすそのゆ心地よき風吹き上
げてほほをかすむる

中央大聴講生 三林浩行

しづみゆく船内くまなく三度まで兵曹長をさ
がせし中佐よ

亜細亜大法二 大塚 たいし

ながむればすそのひろがる荒岩に動けるもの

のひとつもなしや

九州大工一 田原宣仁

バスの中で先生方の廣瀬中佐の唱歌を聞き
きて

先生方の心をこめて唱はるる廣瀬中佐の歌に
聞きほる

拓殖大外三 関 昌明

阿蘇の山縁しるけき草はらをのぼりてゆけば
牛の声する

熊本大法四 平 田 裕 英

中岳山頂にて

硫黄の臭ひ立ちこむる中火口より白き煙の吹
きあがりくる

第八班

千葉大工三 中 富 仁

占部先生の御講義で二等水兵中村与太郎
の話を聞きて

祖国よりはるか南の海上で病に倒れし兵士や
あはれ

マラリヤの熱に耐へつつ釣床に上り下りする
苦痛やいかに

拓殖大外三 山 本 誠 一

阿蘇山に出發するをり

初めての短歌創作気になりて胸内さわぎやす
らはぬかな

西南学院大法三 田 鍋 彰 司

足ばやにバスに向へる班友は何を思ひて山に
行くらむ

過ぎし日に友と登りしこの山を息きらしつつ
登りゆきけり

福岡大経二 梅 崎 建 吉

回避壕に降り散らばれる岩々に阿蘇の噴火の
激しさ思ほゆ

亜細亜大経管一 加賀爪 英一郎

はしやぎつつ坂下りゆく子供らの姿を見れば
力わきくる

早稲田大教育二 土 生 卓

中岳山頂近くにて

登りゆく私の目の前をもうもうと白煙大きく
空へわき立つ

拓殖大外一 野 間 貴 雄

さはやかに澄み渡りたる青空のごと我の心を
さらに清めむ

第九班

拓殖大外三 長 島 一 馬

さんさんと降りそそぎくる天つ陽をさへぎら

んとすか阿蘇の煙は

東京大工修士一 緒 方 秀 教

早退されし東中野先生の御言葉と思ひ出
しつつ

置手紙のお元気でとふ言の葉に熱き瞳の臉に
浮かび来

早稲田大法二 川 瀬 弘 至

夏真昼天つ光の輝きて神さび見ゆる阿蘇の山
山

亜細亜大法一 江 口 文 章

火口への道登り行き見上ぐれば白き噴煙立ち
上るかな

早稲田大教育三 山 田 雄 一 郎

山路ゆくバスの窓より見渡せば広きすそ野は
緑さやけし

拓殖大外一 道 旗 慎 司

友ら皆思ひくく語れども言葉出で来ぬ我も
どかしき

九州大法二 岸 直 也

大阿蘇の火口のふちに立ち見れば誘はるるご
と地球の底に

第十班

駒沢大文二 中 田 岳 志

阿蘇に登りて

杉木立ゆ抜け出でてみれば広々と一木もなく
青草の映ゆ

早稲田大一文三 大島 伸一

御自身の危険に遭ふもかへりみずおそばの方
の上を思はる

拓殖大外一 呉 祥慶

楽しいな皆と一緒に美味しいな焼いたたうき
びがつつくこの時

亜細亜大経営一 諸 藤 謙

雲の上ゆすきとほりくるやはらかな御光我の
心を満たす

早稲田大社会科学二 村 瀬 廣 司

大阿蘇の噴煙のぼるその底ゆかすかにガスの
出づる音する

吹き出づる煙のいきほひたちまちに激しくな
りて心をどりぬ

國學院大文二 森 川 弘 樹

山道をのぼりてゆけば道の辺に一声高く牛な
きにけり

中央大法三 古 川 広 治

しめきりのせまりて心せく中にあいらしき花
見ればなごむも

第二十一班

鹿兒島大農一 古 川 小由里

幼くも国思はるるみこころをしのびまつれば
涙あふるる

拓殖大外一 松 本 直 子

むねき目をこすりつつ友と足はこぶ阿蘇のふ
もとの朝のつどひ

帝塚山学院短大文二 粟 丸 恵美子

トローチと思ひて舐めし白粒に唇しびれ酔ひ
止めと知る

尚綱短大付属幼稚園 山 野 晴 美

火口よりふきあげのぼる白煙に山の御神の生
命を感じる

班友に思ひのたけを語らんと思へど心ひらけ
ずくるし

東北学院大工三 小野寺 祥 子

黛先生の御講義をうけたまはりて
神々のはつらつとせし御姿を現に思へば多み
うかびくる

鹿兒島大教四 指 宿 み き

目の前の大きく広き草原にみだれし心落ちつ
きにけり

中村学園大家政一 柴 田 智 子

尚綱短大食物栄養一 橋 本 かおり

吾がために休みつつのぼる友どちのやさしき
心ただにうれしき

第二十二班

拓殖大外一 松 田 理 香

はるばると遠き土地より関門を越えて来たり
ぬ大阿蘇の地に

京都祖青の会 清 水 久仁子

ガスすひて苦しからんを阿蘇岳で物売る人の
なんとたくまし

神田外語学院英一 古 川 文 子

たどりつきし山の頂に開けゆく火口の姿あり
ありと見し

日の光雲の縁よりもれ出でて神秘なる様いと
美しき

尚綱大文二 臼 杵 直 子

合宿に來られざる友を思ひて
ふるさとに残りし友の折々にふと浮かびきて
胸のつまりぬ

長崎大教三 早 田 保 美

友の分も力の限りとりくみて学びしことをひ
たに伝へむ

尚綱短大家政一 森 本 真 理

阿蘇の朝雲あはらの間に湧き上がる噴煙見れば力湧き出づ

西南学院大商一 黒木 札子

風呂上がり一杯の水飲みほせば登山の疲れたちまち癒ゆる

拓殖大外三 大塚 のりも

阿蘇に来て多くの友と交はれば己の甘さ気がつきにける

合宿の友の言の葉師の教へ無駄にするまじ道標として

鹿児島大教四 江口 芳子

映画「今上天皇」を鑑賞して

国民と歩み給へるみ姿に心うたれて涙あふるる

班別討論の折に

み友らと御歌を拝したてまつり大御心に胸せまりくる

第二十三班

梅光女学院大文三 倉本 由紀子

霧かかり見るをえざりし米塚を晴れし今日の日あざやかに見つ

尚綱短大家政一 迎田 順子

大いなる阿蘇を背にして草原に草はむ牛に心

ひかるる

実践女子大文二 大越 淳子

阿蘇の登山道にて

ゆうゆうと阿蘇の舗道を歩きゆく牛の姿に我驚きぬ

中村学園大家政一 石橋 円

車窓より青き草原ながむれば黄色き花の風にゆれある

雪山のごとく真白き灰のふる乾きし地にも草生ひにけり

拓殖大外一 水野 丘子

煙見え火口近しと思きらし急ぎ登れり我を忘れて

鹿児島大農四 山内 聡子

班別討論にて白井先生のお話を聞きて

陛下さまにお歌つくりて捧げます師の御心の尊かりけり

塾講師 松岡 智子

山道を行きつつ牛を見つけてははしやぎて寄りぬ後輩らとともに

よろこびて牛に近づき写真撮る後輩らの笑顔のすがやかに見ゆ

九州女子大文三 大内田 輝代

中岳は訪ふ度ごとに姿かへ我を迎へてくるはうれし

長崎大医一 合原 陽子

大いなる阿蘇の自然に身をおきて今さら思ふ小さきおのれを

第二十四班

鹿児島大教四 吉永 美紀子

中岳に友らと登ればはりつめしころやはらぎ話はずみぬ

尚綱短大事務局 緒方 みき

大阿蘇の思はず見入る山肌を覆ひつくせり灰色のよな

岱明町立岱明中教諭 山方 富美子

大阿蘇を友と語りひ登りゆく声高らかに笑ひ絶えなし

日を重ね友の笑ひの声高きさまみて嬉し阿蘇の集ひは

九州女子大文二 井浦 寿美

み友らと阿蘇につどひて夜更けまで時を忘れて語りなごみぬ

お茶の水女子大教一 栗山 敦子

不安消え心開きて語り合ふこの喜びをいかに伝へむ

武蔵野服飾美術専門学校一 茅野 由美

窓越しに緑目に映えこちよき阿蘇の恋唄が

イドの歌ふ

第二十五班

尚綱短大家政一 長友 桜子
草千里緑広がり登りゆけば阿蘇の噴煙白く昇
れり

鹿兒島大農四 藤原 順子
友どちの思ひを込めて語る言葉まぶたを閉ぢ
てひたすらに聞く

拓殖大外一 松本 幸恵
山の上からりと晴れてのどかなり空はるばる
と澄みわたりたる

香蘭女子短大秘書科卒 西村 治美
みはるかす芝草はらに食む牛のいろあざやか
にのどけかりけり

鹿兒島大法文一 岩川 ちなみ
とろとろと歩める牛を眺めつつバス進みゆく
のどけかりけり

長崎大教職講生 西田 佳代子
大空にそびゆる山をながむればおのが心もひ
ろがりにけり

九州女子大文三 坂本 麻子
中岳を息はずませて班友と語り合ひつつ登り
行きたり

星稜女子短大経営二 中田 千香
討論の友の言葉はうれしかりもだせる我に勇
気与ふる

中村学園大食物栄養三 古川 紀子
かずかずの御講義聞けば宝物を得た思ひなり
ありがたきかな

第三十一班

出光興産(株) 庄子 修

熱っぽく己が思ひを伝へます大先輩の言葉沁
みくる

(株)ビコイ 秋場 良司
初めての阿蘇の登山に心はつむ山の緑の鮮や
かにして

揖斐川中学校教諭 川村 吉司
活き活きと噴煙上ぐる阿蘇の山かくのごとく
に我もありなむ

日本植生(株) 園 了介
火の山に登りし後に牛乳を飲めばうましも渴
きいやされ

九州日植(株) 江口 勝博
雄々しかる中岳の姿眺むれば生きゆく力湧き
あがりくる

防衛庁航空自衛隊 村岡 正智

火の国に雲立ちのぼり雄大な阿蘇の姿に心打
たるる

厚木市役所 高橋 武男
阿蘇山に登らんとして見あぐれば山の緑の鮮
かにして

第三十二班

亜細亜大学企画課 長沢 克尚
汗ふきてよな踏みしめて登りつつあふぐ噴煙
いまだ遠しも

見おろせばよな舞ひかすむ山裾に陽はかたむ
きて赤牛まどろむ

日本植生(株) 杉山 二郎
火の国の山に登りてふりかへれば下界のあつ
さしばし忘るる

宮崎神宮 河野 公俊
草や木の姿も見えぬ砂千里自然の力に心うた
るる

大分工業高校教諭 藤原 耕一
夏山を汗にじませて登りつつ踏み出す足のな
にと重きか

出光興産(株) 津田 忠雄
声を上げとびはねをりし子供らも硫黄の臭ひ
に大人しくなりぬ

厚木市教育委員会 飯田俊一
二十年の再会うれし阿蘇の山その雄大さ今
もかはらず

事務局

福岡県立明善高校二合 原順子
つどひへと目をこすりつつ出でゆけば朝日を
あびて今日を思ふ

福岡県立城南高校二 稲田靖子
景色見て胸に迫り来るこの想ひ言葉にできず
もどかしかりき

福岡県立新宮高校一 西崎将
仕事終へ阿蘇の空気を吸ひこめば忘れてしま
ふ何千もの紙
たくさんの仕事を終へて友達とゆぶねにつか
りて疲れいやすも
福岡県立新宮高校一 長谷川和也
見はたせば阿蘇の草原えんえんといと美しく
広がりてあり

写真班

佐藤写真事務所 佐藤道明
ホテルへ向かふ途中車が故障して

見ず知らぬ友への叫び暗やみに無線機かた手
にこころのみ前へ

国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村寅二郎
三十あまり五つの集ひをみ友らと重ねてわれ
は七十あまり七つ
四十あまり三つの歳かも霧島のみ山への宿に
て開きし初回は

若きらも四十路五十路と齡をば重ねたまひ
ぬ一筋の道に
かたじけなき思ひしじなりみ友らのあつきみ
なさけかがふり生き来て
このちもはげみてゆかな若きらのひた走り
ゆく道のかたへに

栞宝辺商店代表取締役 宝辺正之
夜深き阿蘇の国原わたりゆく月かげ白く部屋
にさし入る
安らかに寝ぬる合宿の友らの上はれしみ空に
月かがやきぬ
ひる中は霽かかりしに夜ふけて月すみわたる
阿蘇岳の上

(二回目の作品)

終りて後

遠くより相見手を振りゑみかはす友と共にぞ
過ぎしけるかな

若きらが面かがやかし語り合ふそのまごころ
に生きしめられし
日の本の民のころにふれなむとしつつ涙す
若き友どち

うつくしき直きしらべに君が代は千代八千代
にと歌ふもろ声
閉会と高らかにいふ声きけば力しづかに胸に
満ちくる

九州造形短期大学教授 小柳陽太郎
班別討論に加はりて

新しき友にいま会ふと班室の扉ひらけば心を
どるも
坐りたる坐布団を直ちに我にゆづる友のこ
ろのうれしかりけり
未だ見しらぬ友にはあれどなつかしきおもひ
あふれつ時経るままに
語りゆく我を見つむる若きらの目のかがやき
のすがしかりけり
奇しきえにしにつながらる友よと若きらの面
を胸にきぎみつゝ見し
たまゆらにあひにしものをこのえにしかりそ
めならずとつしみ思はむ

(二回目の作品)

一年のおもひかたむけし合宿も今し終りてひぐらしなくも

友去りしホテルのあたり夕日かげしづやかにしてひぐらしなくも

さはりありて合宿に来ざりしみ友らを遠憶びつゝ仰ぐ夕空

今日もまた夕立ち来らしみはるかす高岳の上に黒雲迫る

九州女子大学教授 山田 輝彦

占部君の講義を聞きて

少年の日ゆしたひ来しいくさ神広瀬武夫はなつかしき人

ひとひらの肉片残し旅順口波間に消えしあはれますらを

波洗ふデッキめぐりて杉野呼ぶみこゑ真闇をつんざきにけむ

その昔小学校の学び舎にうたひし友よはや老いにけむ

プーシキンの心漢詩に託しつゝロシア乙女に贈りまししか

アリアズナ年十八の令嬢の花顔微笑の面輪うかびく

浪漫とはかくの如きか異国の乙女恋ひつゝみいくさに死す

荒城の月の作者と軍神を生みし竹田の町の恋

しき

明治てふ御代なつかしもかくのごと大いなる人さばに生みたる

(二回目の作品)

残されし日はいくばくぞたどり来し道を思へば夢のごとしも

よべ降りし雨に洗はれ中岳の嶺の巒々げざやかに見ゆ

年ごとの重きつとめをなしとげしこの安らぎを何にたとへむ

国民文化研究会事務局長 長内 俊平

妻への便りに

むせかへる暑きなれども仰ぎみる阿蘇のみ山のみどりしるけし

夏の陽をあびて輝くみどり葉のそのしるけきを吾妹にもがも

今生のかたみとなりし阿蘇の地にわれ一人きてみ山に向ふ(青砥宏一兄のことを)

くれおそき夏の一日もひぐらしのなく音かなしくくれゆかむとす

(二回目の作品)

夢のごと日にちはすぎて合宿の終り刻々と迫りくるかな

幾年も見ざりし友もはせ来り力合せきその昔のごと

み国いまただならぬをば自づから感ずるありて馳せきしならむ

日の本を支ふる子らに与ふべき何ほかにあらむやこれのわれらに

来ん年の集ひに今ゆ友らみなふるひつつあらむわれもおくれじ

銀杏の葉末にそよぐ風ありて仰ぐ阿蘇の峯ただ静かなり

㈱日商岩井大阪エネルギー第一部部长

澤部 壽孫

バスの中で白井博先生のご指導に合唱す

友皆とたからかに唱ふ青山にとどけとばかりに広瀬中佐を

師の君のはづむみ声のよろしくてふたたび唱へば心放たる

緑なす山広がりてかすみたる阿蘇の国原夏盛りなり

(二回目の作品)

上村栄章君の「青年大体験発表」を聞きて父君の深きみこころを語ります友の言葉に胸

ふたがれぬ眠る間もなきかの如くつとめます友語ります

思ひをこめて今は亡きわが父母のうつつにも思ひ出されて

涙こぼれつ

今 林 賢 郁

あらたなる友も迎へて今まさに合宿教室開かれんとす

きびしかること次々に起りたるこの一年のひととせ日々を思ひぬ

さはあれど友ら集ひて阿蘇の地に合宿教室開くうれしき

（二回目の作品）

み友らの心を支へにひたすらに進みゆくのみきびしかるとも

（株）講談社広告局広告企画部・部長

磯 貝 保 博

まむかひに朝日仰ぎてすがすがし心もかろく我れ体操す

澄みわたる朝空のもと若人の体のびのびはつらつとみゆ

（二回目の作品）

「事務局」で今林賢郁運営委員長の「合宿をかへりみて」（所感）を開きつつ

出会ひとは未知なる友との学問と呼びかくる御声力強しも

このさきの合宿めざし心して取り組まむと思ふ君の声ききつつ

神奈川県立湘南高校教諭兼亜細亜大学非常勤講師

班別討論

山 内 健 生

新しきことどもあまた教はりていかにあるらむ友らの胸内とまどひもさぞやあるらむ若きらの苦渋を浮べしみ顔しめれば

さはあれどひとことひとことかみしめつしぼり出すがに語る若きら

口数はたとへあまたはなけれどもいで来る言の葉心して聞く

（二回目の作品）

「閉会式」を前に

この夏も若き友らとくさぐさのことども学びて胸内すがし

ともすればゆるみがちなるわが胸に生き抜く力の甦り来ぬ

福岡県立新宮高校教諭 小 野 吉 宣

大阿蘇の朝の涼気はさはやかにただよひてをりつどひの広場

神さびし杉の木立ゆやはらかき木洩日させり朝日あたりて

露おきし芝生に立ちて東の朝日ひんがしに向ひ手を合はせけり

しづしづと昇る日の丸仰ぎつつ心を込めて君が代歌ふ

（二回目の作品）

八月八日午後の「班別討論」

「何よりも自分が大事」と言ふ友に自分とは何かと重ねて問ひけり

自分などよくわからぬと複雑な己が胸内を友に語りぬ

正確に自分をみつむるむづかしさを友等と語りあらためて知る

窓の外は暗くなりたり稲妻のパツと光りて雷鳴とどろく

ザアザアと雨足しげし草や木は一と月ぶりに潤ひを得る

降る雨を眺めてをれば草や木の喜ぶ姿のうつのごとし

カサカサに乾ける大地に雨降れば我が心まで潤ふ心地す

元（株）特金属工業常務取締役 加 納 祐 五

合宿初日

よりつどふ友なつかしみ語らむと阿蘇にまゐりこしことのおうれしき

山もまたなつかしきもの見むとすれど霧たちこめて見えわかずけり

つれなくも山は見えざれ晴ればれと友ら笑みたまふころにぎはし

三日目朝のつどひにて

澄める空げざやかにかぎる杉むらの梢とほし
て朝の日はてる

大御歌さながら澄めるけきの空にさぞや晴れ
なむ友のころも

(二回目の作品)

はらからのあつきいたつきかかふりて学びの
つどひ終るうれしき

ころかたむけ語りしく日おもひつついま
わかれゆく西に東に

西東わかれすむともけふの日をおもはばこ
ろつながりてあらむ

よしゑやし目に見えずともまことのいのちこ
こにうまるとわれら信ぜむ

閑不動産コンサルタント代表取締役

松吉基順

亡き加藤敏治大兄を偲びて

君逝きてはやひととせかこそぞの夏妹君訪ひて
奥津城詣でし

在りし日に君つとめましし営みを妹はしぬび
て阿蘇にきましぬ

阿蘇に集ひ語らひなごみし在りし日の君がゑ
まひをうつつに思ふ

空港に君送りくれしすぎし日の阿蘇の集ひは
はるけくなりぬ

君がみ霊天翔けりまして大阿蘇のわれらが集

ひ護りあまさまむ

(二回目の作品)

乙女らに乞はるるままに小夜ふけて語りあひ
にきしきしまの道

乙女らはしきしまの道難しとてこもごも問ひ
かく夜もふけしに

いたらざれど思ひのたけを乙女らにひたに語
りぬ時を忘れて

佐賀県立佐賀商業高校講師 末次祐司

緑こき阿蘇の山みちなつかしく友と登りしこ
しかたを偲べり

いくそたび登り来にけむ阿蘇山のひろきふと
ころに心安らふ

今は亡きなつかしき友の偲ばれて遠き山々静
かに眺む

(二回目の作品)

「班別短歌相互批評」に於いて

友のいなく胸の苦しみを己が身にうつしかは
して歌作りゆく

歌つくる苦しみを共に分けあひつ班員の心は
通ひゆきけり

心通ふその喜びに班員の顔も明るく笑み溢れ
来ぬ

閑サンデン交通取締役兼閑山陽自動車学校社長

加藤善之

鉾杉の並立つしじまひぐらしの鳴く声しげし
阿蘇の高原

あさまだき鉾杉の原はるかにも阿蘇外輪山に
朝日輝く

なつかしきひぐらしの声今年又阿蘇高原に聞
くがうれしき

(二回目の作品)

うつそみの世はしげくともわかきらと語らひ
ゆけば心なごむも

若きらの燃ゆる生命に我が生命託さんものと
ただに眞向ふ

戦ひに敗れし日より求め来し国の生命よ若き
生命よ

心とは人と人との間かんにありと訴へ涙す若き友
かな

わが友の涙はわれの宝とぞ涙し語る若き乙女
よ

元熊本県砥用町立砥用東中学校長

北島道治

薄霞む光を浴びて山道をバスは続けて今登り
ゆく

阿蘇山の草に放てる赤牛の点々と見え原は広
がる

青草の繁れる中に白花のこもりて咲けり名を
し問はばや

草千里縁ひろがる中にして水はわずかにありと見えたり

(二回目の作品)

はつらつと力みなぎる若きらと共に学ぶは嬉しかりけり

四泊五日永しと思ひし合宿も息つく間なく果て終りけり

家を出て幾年月も経し如く思ひは遠く蘇よみがへりくる

国民が一つ心に定りて御即位を祝ひ奉らむ

人権擁護委員 白井 傳

阿蘇登山バスの車中にて

三號車バスのマイクをたにぎりて廣瀬中佐のおんどとりけり

おほあそのみどりひろぬにかぜわたる廣瀬中佐のうたとどろきぬ

むねをはりこゑはりあげてうたひけり一兵の日はろかしぬびて

みはるかすくさせんりをゆくおほのはらうしはらうしがくさはむのどけかりけり

うしとともわがのるバスもゆきゆけるくさせんりみちうれしかりけり

おほいなるひのやまあそにもゆるいのちひそともひつつここにきにけり

わがむねのもゆるおもひとうたひける平野次

郎(国臣)をおもほゆるかな

(二回目の作品)

「別離」

しくしくにおもひかなしもふたたびをあはむもひつついざわかれなむ

おほあそのねにつちかへる友情をいまのうつにおもひてゆかむ

わかるるはまたあはむひのたのしみとおもひしみじみわかれてゆかむ

あめあがるあそ外輪のやまなみもすがしきあさをわかるかなしも

おほき師よやさしきともよふたたびのなつをきしつづいざやわかれむ

うらかたにてつしたまへるしきはんのとものおもひがむねにしむがに

ばんこくのおもひしくしくふたたびをあはむひもがなただにいのらむ

すめぐにをもりてゆきけるなきともいのちしつぎてふみゆかめやも

阿中央塩ビ製作所代表取締役 星野 貢

ころこめ友らと共に汗ながし齋場ゆには作りの作業に勵む

雨雲の東の空に広がるを見つつしきりに晴るを願ひぬ

(二回目の作品)

書き終へて窓辺ゆ見れば杉の木の小枝のみどり眼まなこにしむる

吹く風に杉の小枝のさゆらぐは生きのしるしか風のまにまに

元法政大学人事部長 香川 亮二

阿蘇に向ふ

眺めやれば西空にまろく朱き日のかかりて今日も暮近づきぬ

群山のうへ朱々と夏の日の今ししづみゆく筑紫国原

あまた友の鎮まりゐます不知火の筑紫の国を車かけりゆく

み国の命守り伝へむとこの夏も大阿蘇に友ら集ひますといふ

この集ひ年の始といふ友にしたがひてわれも加はらんとする

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」

次々に壇に上りて胸の思ひ語る若きら雄々しと思ふ

さはやかに語りし友よ涙して語りし友よともに忘れじ

心こめ友は語りぬ若きらの言葉われらに力授けたまふと(閉会式)

阿蘇の地を巣立ちゆきたる若き友らまたも相

見むその日を思ふ

舞岡八幡宮 宮司 關 正 臣

第一日朝

爽やかなあしたなるかな我が疲れ我が種々の
思ひ消失せて

部屋内にやすらひ居つつ遙かにもしき鳴く蟬
の声に聞き入る

(二回目の作品)

新聞にもテレビにも触れず過しける日々なり
しかなおもひ返せば

友どちと語らふことに全力を注ぎつつ来し
日々なりしかな

世の中の事を忘れて合宿の友の上のみ思ひつ
づけし

女子班が廣瀬中佐の寸劇を演ずるのを見つつ涙あり
はも
八十年にあまる昔の物語受止めくれし女子等

日本銀行監事 小田村 四 郎

中岳山麓に軍馬鎮魂碑あり昭和十四年以降、北、中
支、ビルマ、マレー半島を馳駆してたふれたる山

(野 砲兵三十七聯隊の軍馬一千四百四十五頭の霊
を弔ふといふ

噴煙の毒気激しく中岳の火口ゆすぐに山を下
りぬ

山麓に建てし軍馬の鎮魂碑を探し求めて友と

詣でぬ

鎮魂のいしぶみの上に座しませり金色輝く馬
頭観音像

過ぎし日の大みいくさに大陸を馳けめぐりけ
む馬を思ふも

子の如くいとしみし馬を弔ふといしぶみ建て
し勇士の心よ

みいくさにいのち捧げし馬たちの魂鎮まらむ
このいしぶみに

(二回目の作品)

清水公子女史「若き日の大東亜戦争」(まほろば)
第四十五号)を十班で輪読す

真実を歪ぐる文さにはびこりてまことを語
る人の少き

たたかひの厳しき日々の国民のまことの姿を
しるし給へり

国民の一つところに勤めあひしいくさの日々
を若きらも知りぬ

国ごぞりまこと捧げて扶けあひ励ましあひし
これの日々はも

美しくよき時代なりきと宣べ給ふ君の言葉の
有難きかな

かくまでに勤めし民のまごころを後の世まで
も伝へてやむべき

浄土真宗本願寺派光隆寺僧侶 岡 棟 猛

登山バスで

バスに乗る友のみ顔におぼえあり去年の集ひ
に会ひし友なり

ゑまひつつ乗る顔みればうれしけれ変らぬ姿
にゑまひ交すも

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」を聞きて

次々と壇上に立ち思ひのぶる若きら見れば涙
流るる

若きらのあとにつづぎてもろともにみ祖の道
を歩みゆきなむ

航空自衛隊航空教育隊 村 山 寿 彦

風そよぎ緑ひろがる草千里に放牧の牛群れ遊
ぶ見ゆ

一步一步火口を目ざし登りゆく吾が足もとに
火山灰舞ふ

登り来し阿蘇中岳の山頂はイオウのにはふガ
スただよへり

地の底ゆ風にまじりて聞える無気味にひび
く阿蘇の地鳴りの

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」の折、白井傳先生のお話を

聞きして

表情はおだやかなれど祖国を思ふ熱きみここ
ろの胸にせまりく

外国の軍艦の行きかふ島にあれば国の大事も身近かなるらむ

戦争なき世とはなりても軍靴を大事にそなへみがきてありしと

先生のみ手に持たれし軍靴は新しきがに輝きて見ゆ

過ぎざりし戦の日の軍靴四十年を経へていままも輝く

齢召せど今なほ猛き心もて夷狄にそなふるみころかかしこし
平らけき世にはあれども日の本の大事にそなふる心ばへはや

新技術開発事業団管理部業務課・課長

野間口 行 正

み友らに励まされては思ひ切り合宿に來にけり十数年ぶり
久しくも会はずはざりし友と語りゆけば自づと忘るその年月を

(二回目的の作品)

「廣瀬武夫中佐」の寸劇を第二十二班で企画す

「夜の集ひ」に参画せんとさまさまに思案めぐらす若きらとともにはからずも「中佐」の大役与へられ若きをとめにしぐさ教はる

師の君の「よくできた」とのみ言葉を班の友

らに疾く伝へたし

拓殖大学外国語学部教授 松本幹男

朝の集ひに

朝の日のみ光あびて今日の日の今はじまりぬ心豊かに
ふりむけばま近にせまるうすあをき阿蘇の山

なみ朝もやの中に

(二回目的の作品)

「夜の集ひ」

若きらが心をこめてつくりたる拓大の旗をうち振り躍る

富山県立富山工業高校教諭 岸本 弘

十三年ぶりに合宿に参加して

なつかしき人らに会へば年月を隔てしことも忘れゆくなり
つい昨日別れし人に会ふごとく言葉交しゆく会ふ人ごとくに
不思議にも思はるなりおのづから合宿の中にとけこみてゆくは

(二回目的の作品)

四班の学生と共に過した日々を振り返りつつ

幾度かゆきづまりつつも苦しさにたへつつ若き友らと過せり

幾度か叱らるる思ひす率直に述べてくる友の言葉を聞きて

合宿につらなる縁この後もながくつきあひ友となりたし

(株)BBS金明代表取締役 中田 一 義

ほんたうによくきてくれたとねざらひの言葉をかけし友のみなざけ

(二回目的の作品)

阿蘇合宿に参加させていただいて

かばかりにお世話くださる師や友のあつき御心ただありがたし

東急建設(株)東京支社建築部審査課課長

奥 富 修 一

(二回目的の作品)

言の葉にすぐにならねどなつかしき友の面輪に逢ふぞうれしき
かけがへのなきこの合宿を來る年も開かん思ひのいよ湧き來る

中島法律事務所弁護士 中島 繁 樹

班別討議

おづおづと思ふがままの疑問をば述ぶる君はも素直なるかな

日頃より懐きしことをうちつけに述ぶるときこそ樂しからむ

(二回目的の作品)

東京ゆ來しとふ君のとつとつと語る姿の思ひ出さるる

みこころの直なる君ともろともに学びの道を歩みてしがな

戸田建設開発事業統轄部 青山直 幸
幾たびの噴火の故か山肌はうすねずみ色の灰におほはる

大自然の力すさまじかつて見し溶岩台地の今見えずとは

思はずも心をどりぬ火口より白き煙のわき立つみれば

(二回目の作品)

宝辺矢太郎兄と共に「創作短歌全体批評」の準備を夜を徹して行ひし折に

参加者が詠みたる歌は集められはやくも歌稿となりて届きぬ

歌稿開き歌詠みゆけばみ友らのくさぐさの思ひ伝はりにけり

美しき阿蘇の自然をこまやかに歌ひし友もいと多かりき

部下思ふ廣瀬中佐の生きざまに心打たれて歌ふ友あり

あまたなる歌をみ友と詠みゆけばいつしか夜は明けそめにけり

部屋内うちも明るくなりてやうやうにみ友らの歌読み終へにけり

夜を徹し手伝ひたまひし我が友のまごころひ

たに有難く思ふ

熊本市役所・技師 折田豊生

(二回目の作品)

慰霊祭のありしゆうべを想ひつつ夜つゆにぬるる広場にぞ立つ

新しき道開けなむみ友らのさきくこそあれ我もつとめむ

福岡県立福岡中央高校教諭 占部賢志

第六班の諸兄に

合点のゆかぬことあれば偽らず我わからずと言ひ放つべし

心の内うつろなれども言葉のみ巧みに操つることはやめたし

言ひよどむことのあるれどもはからはで肚にひびきしおもひ伝へよ

(二回目の作品)

思はざりき教へ子二人集ひ来てともに學びゆく奇しき縁よ

熊本県立第二高校教諭 白浜裕

広瀬中佐の文を読む

異国とくにゆ中佐偲びて文遣れる乙女心の何といとしき

敵味方さかあひ離るとも国思ふ心は同じ文読みみければ

はらからにまた異国の人々にこそそげる中佐の

まごころ尊し

(二回目の作品)

徳水正巳先生御入院

み病の床にありつつ合宿のくさぐさのこと氣遣ひたまひぬ

心労の募りて起りしみ病の癒ゆる日近きをひた祈るなり

熊本県立球磨農業高校教諭 田之上 正明

三年前ながめし様とうち変り中岳の斜面は灰におほはる

火口近く登るにつれて鼻をつくにほひたち込めせきこみて来る

(二回目の作品)

天皇陛下(当時皇太子殿下)が沖繩を訪問なされた

時(映画「天皇陛下」拝観)

すめらぎは石投げられても県民の中に入つて行きたしと語りたまひぬ

ひめゆりの塔に花束捧げられ御霊を弔ふみ姿あほぎぬ

火炎ビン投げつくる者ありたちまちに回りの様の騒然となりぬ

ひるまるるそぶりを見せずすめろぎは案内の人をきつつかひたまふ

遺族会の人々にお言葉を賜ふ(同右)

遺族会の人らに会はれそれぞれにみ言葉かけ

らるるみ姿拝しぬ

暑き中流るる汗もぬぐはれず遺族の人らにみ言葉たまひぬ

国民と共に歩まるるみ姿を拝しまつりてありがたきかな

山口県立高森高校教諭 宝 辺 矢太郎

白井傳先生の御話をおきして

大君にささげたりとふうたぶみの和とじ三冊われらにたひぬ

をみならはためいきまじりのこゑをあげ珠にさはるごと文をひらきぬ

毛筆のみあととはしるくひとひらのかたばみ押し葉目にしみるかも

(二回目的作品)

二十三班の皆様へ

ころころめかたるすがたにむねせまることいくたびかわするべしや

あたたかきみおもひにふれこのへやにまゐるえにし得しさちおもふかな

久留米大学附設高校教諭 名 和 長 泰

外輪の緑美しとおぼえしを山崩れしかあとの白きは

齋庭より中岳見れば満月の赤くかすみて雲にかくれぬ

(二回目的作品)

合宿教室に参加してから十年を経る

十年経て思ふはあまたの師と友に導かれきし道わが進む道

三十五回かさねし集ひをみ友らとひたもりゆかむみ国のいのちと

金文図書出版販売(株)教育部青雲学園中央青雲学園

館長 廣 木 寧

黛敏郎先生のお話しを聴き

ドイツ語になりてもひびけいざなみといざなぎの神の傳へかしこし

(二回目的作品)

小田村寅二郎先生が御講義の中でフイヒテの『独逸

国民に告ぐ』にふれらるるをききて

フランスの軍の民の靴音のきこゆる中に獅子吼せしとふ

外国の民の支配をうくるとも母国語まれと獅子吼せしとふ

福岡県立水産高校教諭 菅 原 亨 二

久々にまみえし友との語りひに心のみぬ大阿蘇の集ひ

(二回目的作品)

阿蘇の地の合宿の日々も過ぎ去りてはや別れゆく時とはなりぬ

大分県立大分豊府高校教諭 石 井 雅 晴

かごしまのともらとふたたびあふことのかな

ひてうれしはなしせずとも

ともらみないまよりまなぶよろこびのおもわにあらはれいきいきとみゆ

(二回目的作品)

合宿に集ひし若人よ師と友と共に学びしことな忘れそ

(株)日本興業銀行広島支店営業課長代理

小 柳 志乃夫

(二回目的作品)

與島誠次兄と話して

合宿に忙殺されて自らの求むる学問をできずと訴ふ

学生の指導に尽して疲れしとふ君が言葉よ聞けば泣かるる

北九州市立八幡病院 森 田 仁 士

露うけし芝生に立ちて見わたせばあかね色せし陽の輝きぬ

(二回目的作品)

白井傳先生のお話しをお聴きして(一全体感想自由発表)

西のはての対島にいましてそなへます一旦緩急あれば立たむと

油ぬり手入れとどきし軍靴をば師は壇上ゆ示し給ひぬ

七十路を過ぎて今なほ師の君は国の守りにつ

とめますなり

大阪府立交野高校教諭 絹田 洋一

岸本先輩にお会ひして

折にふれて思ひ出しをりし先輩と今またまみえ語らふうれしも

先輩の富山の家をおとなひてもてなしうけし

ゆ十年たちしか

同じ班の班付になりしもたゞならぬ縁えだしとおぼえてうれしかりけり

輪読の折眼の悪い岸本先輩が本を読まるゝを聞きて

平仮名のやさしき言葉もつまりつゝ、小さき声で文を読まるゝ、

朗々と文を読まれし先輩のみ声は今も耳に残るに

かくばかり病重きかつまりつまり読まるゝ聞けば胸もふたがる

(二回目的作品)

「班別短歌相互批評」の折に

もう一度自分で作り直さむと友らふたたび歌

よみ始めぬ

苦しみて作り直せしみ友らの歌のしらべはみな高くして

み友らの言葉に耳をかたむけていつしか夜を明かしをりたり

倉岳町立倉岳中学校教諭 松岡 幹雄

映画「第二五代天皇陛下」を拜見して

沖繩の民の心にせまらんと新帝陛下は琉歌創ります

車椅子の若き人らに大君は笑顔たたへて御手拍ち給ふ

(二回目的作品)

「短歌相互批評」も深夜に及ぶ

とつとつと時にくちびるふるはせて己が胸内かたりゆく後輩

思ふこと言葉にならずかの後輩は肩をふるはせ嗚咽したまふ

福岡県立須恵高校教諭 那須 三二

慰霊祭の折に

人々はすでに集ひて三年ぶりの御霊祭りのさまなつかしき

御製拜誦(明治天皇 虫の声)の折(慰霊祭)

朗々と詠みます御歌に合はすごとにはかに虫の鳴き初めにけり

(二回目的作品)

「全体感想自由発表」の折、対馬の白井傳先生のお話をお聞きして

国境の島に住みまし奉公の深き覚悟に生きます師はも

すぎし日のいくさのにはで身につけし軍服の繕ひいまでも続けらるとふ

いつにても履けるやうにと軍靴には油を塗って手入れせしとふ

壇上で示さるる軍靴は新しきものの如くに輝きて見ゆ

この他にさらには水筒飯盒も日々手入れして行李の中に

ひとたびも緩急あらばこの軍靴をはきて奉ずと師は語らるる

年めされ物腰やはく小柄なる師の胸内にみてる覚悟よ

話さるる師のみ姿の尊くて思はず涙す胸あつくなりて

㈱日立製作所エネルギー研究所 松井 哲也

広瀬中佐

祖母君を失ひ給ひて泣きとほしつひには御目を病み給ひしといふ

(二回目的作品)

黒上正一郎先生

己が身のためにのみする学問を直ちに看破し正されしといふ

親鸞の御文持たせて相共に読みゆき叱り給はれしといふ

廣木重先輩の「輪読導入講義」

この御文学が初めにしみづからの学びのえにしを語り給ひぬ

壇上に立ちて語らるる先輩に導かれつつ読みし日なつかし

この先輩に導ひかれつつこの御文を読みゆきし日々^の思はれてならず

御講義を聞きゆくほどに己が身の力衰へしを正さるる思ひす

ふたたびもみたびも己を鞭うちてともに進まむ学びの道を

（附）日本油脂技術研究職 上 村 栄 章
発表の折に

ガンバレと声かくる友のありがたし高ぶる心もおちつきゆきて

師の君の顔をし見れば我知らずあがる心もなくなりゆきぬ

（二回目の作品）
別れる折に

ひたすらに感想文のペンを執る友の面輪のすがしく見ゆる

うちとけし友との別れの近づきて笑ひ声にも淋しき覚ゆ

福岡県立玄洋高校教諭 矢 永 誠 二
正面のポールに掲げし大御歌は白き布地にしるく書かれし

大御歌にうたはれしごときはやかに集ひの空はずみわたりけり

（二回目の作品）

上村栄章君の「青年体験発表」

切々と父君のこと語りゆく君の言葉の胸に迫りぬ

病床に臥し給ふそのかたはらに君書きし手紙のおかれしといふ

父親の気持ちは僕の胸内に生きてゐますとふ思ひぞたふとし

（二回目の作品）

二十一班指宿みきさん（鹿児島大四年）の感想発表

を聞いて

去年の夏は直き^{なほ}がままに感動を語り得ざりしがくやしかりきと

福岡市立奈多小学校教諭 是 松 秀 文
噴煙を背にして皆で思ひ出の写真をとりしことぞうれしき

（二回目の作品）

「別短歌相互批評」にて

みともらの一つ一つの言の葉にこめし思ひをしのびゆきたり

しのびゆくうちに心の通ひ合ひなごみゆきたりうれしきひととき

早稲田大学大学院生 八 木 秀 次

映画『天皇陛下』を見て

沖繩の戦に散りし乙女らの霊なごめますわが大君は

沖繩の民の上思ふ御心を知らぬ輩の火炎びん放つ

爆裂の激しき中につきそひの女の生命^{ひといのち}を氣遣ひ給ふ

（二回目の作品）

今林賢郁・廣木寧・小柳志乃夫・森田仁士・松井哲也・竹内明彦の諸兄と帰路の電車内にて

車中にて大吟醸を酌み交はし会の行末論ずるは榮し

この面々で合宿ができると豪語してつひに一升飲み干すわれら

立喰ひのうどんを車中に持ち込みてうましと汁を譲る友はも

（附）竹中土木工事本部 國 分 俊 喜
（二回目の作品）

阿蘇行きの列車に乗れば大きな荷物をかかへし学生のあり

過ぎし日の我も同じくバック持ち期待と不安で列車に乗りたり

なりはひを持つ身となりて初めての参加となれば心高鳴る

阿蘇駅に降り立ちて見れば出迎への友の笑顔に心やはらぐ

福岡県立山田高校教諭 與 島 誠 央

矢水先輩の短歌導入講義を聞きて

この日まで発表にこころくだかれし先輩の苦
勞の思ひ出さるる

指揮班の仕事はとみに忙しく心を統ぶる間も
なかりしに

発表よ成功しませと祈りつつ先輩の話に耳を
傾く

発表の終りて駆け寄り「良かったです」と笑
みて告ぐれば先輩笑み返す

(二回目の作品)

「閉会式にて長内俊幸先生の御話をお聴きして

まつすぐにわれら見つけて語らるる先生のお
姿ひたに見つむる

孫娘のたびし手紙のひとふしに支へられしと
読み上げたまふ

学生にまじりて笑ふおぢいちやんの姿思ふと
ふすなほなる文

合宿の準備ゆ学生と共につとめます先生思へ
ば泣かゆこの文

御話を聴くに涙はとどまらず大声あげて泣く
をこらへつ

閑不動産コンサルタント 松 吉 基 光

佐藤カメラマンと再びお会いして

約束を守りて阿蘇へこの夏も来し友どちを有

難く思ふ

(二回目の作品)

「慰霊祭」にて

見上ぐれば星ただ一つ光りをる伯父のみ霊に
今日も守らる

伯父上のみ霊に守られ父の声いと伸びやかに
齋庭に満てり(父、御製を拝誦す)

尊くもかしこきみ霊に守られて生きしめらる
るをありがたく思ふ

九州大学院文二 竹 内 昭 彦

慰霊祭準備

戦ひにみ命捧げし人々の面輪しのびて齋庭造
りぬ

丹念にメ縄むすばれる師の君の細かき手つき
見れば畏し

師ら友ら共に集ひて魂祭る齋庭造りに汗を流
しぬ

(二回目の作品)

短歌相互批評の折、山本誠一君(拓大三年)を見て

指折りに歌直しゆく班友の健気な面輪親はし
きかな

福岡県立玄界高校教諭 日 比 生 哲 也

S・L阿蘇ボーイを見る

青々と水田ひろがる阿蘇の野を黒煙噴き上げ
走るS L

高らかに汽笛鳴らしつつ迫りくる雄々しき姿
に力みなざる

(二回目の作品)

閉会式直前の「班別懇談」にて

もろともに学び合ひたる友どちの語る言の葉
沁み入りて来る

千葉県船橋市立古和盆小学校教諭 竹内 孝 彦
こぶしふり廣瀬武夫を朗々と歌はるる師を思
ひ出づるも

敵提督とあひまみゆるを深く期す閉塞作戦成
功の暁

もののふの武夫が胸に抱きたるねがひはかな
く神あがりましき

さにつらふ露西亞乙女子アリアズナ武夫とか
はす戀の文はも

ふるさとにとつくににあてし数々のみ文を讀
めば涙たりくも

日本青年協議会 佐 瀬 竜 哉

夕食に白井先生とお話しして

死而後已の四文字は死してなほやまぬことな
りと師は話されし

松陰にかなはぬ身なれど松陰に続かんと思ふ
と師は話されし

ひとすちに道求め来し先生の姿を知りてわが
身はづかし

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」の時間に白井傳先生のお話を聞きて

皇国に事あるときは最前に自ら立つと師はのたまひぬ

大戦に使ひし軍靴を今もなほ手入れしをりと師は見せられし

国守るとはいかなることかと身を持ちて我らに教へ示されたまふ

おだやかに己が思ひを語らるる師の御言葉に心たださる

神奈川県立津久井高校教諭 大日方 学

到着し休む間もなく指揮班の仕事を努める新しき友

新しき友と語りつつ山道を登りてゆけば心すながしき

(二回目の作品)

「閉会式」での長内俊平先生のお話をお聞きして

己が身に流れる血潮はみ祖より受け継ぎしものぞと師はのたまひぬ

身の内のふるへる思ひす日の本の血潮の我に流れてあれば

己が身に充つる血潮にはづるなく学びてゆかなむ友らと共に

㈱東和銀行昭島支店融資課 長場 真一

アルバイトの高校生と阿蘇に登りて

若人と語り登りてみる景色実にうつくしく素晴らしきかな

熊本県教育庁文化課囃託 久保田 真

一年半ぶりに中澤兄と逢ひしが父上の急病で二日目の朝に帰る

四日間思ひのくさぐさ語れると夜の時間を楽しみにせしを

嬉々として合宿参加を喜びてはしゃぐがごとき君にてありしを

母上に病みて学生時代に苦しみしが今度は父上が病になるとは

(二回目の作品)

合宿を終へたる我ら堂々と胸はりてゆかむすめこの道

愛媛県八幡浜地方局総務福祉部 鳥生 秀雄

阿蘇登山終へて帰りのバスの中「廣瀬中佐」を皆で歌へり

(二回目の作品)

「指揮班」の班室にて

合宿は今日もて終るも日々^{にち}の己れが学問続け行きなむ

航空自衛隊幹部候補生学校学生 佐藤 信知
われひとり遅れて参加の合宿は足が重たく敷居は高し

久しぶり交はず言葉のはしばしによりみがへりくる心のかよひ

(二回目の作品)

「よかつた」との友の一言を耳にして眠さも疲れも失せ行きにけり

㈱橋本染工社長秘書 橋本 加枝

(二回目の作品)

言の葉をとつとつ語る友どちの思ひのたけは涙にあふるる

あとがき

秋も日毎に深まってまゐりました。皆さんその後いかがお過ごしでせうか。雄大な阿蘇のふもとで共に学び合った「合宿教室」から早や三カ月が過ぎやうとしてをりますが、やうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来ることになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に「走り書き」して戴いた感想文と和歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班付（社会人班の場合は班長）の方々（国民文化研究会員の助言者）に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のもった文章・和歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使い、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心を打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを

基本方針としました。ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづから」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二) 「和歌」について

合宿では二回にわたって和歌をつくりましたが、第一回のは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊の巻末の「和歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折にくだっていた第二回目の和歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班付および社会人班の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力をいただきました磯貝保博、工藤千代子、宍知浩一、石井義昭、菊池正浩、大日方学、長場真

一、に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成に御協力いただいた国民文化研究会員の諸氏、および第一回目の和歌の編集にご尽力いただいた広島の小柳志乃夫、神奈川の国武忠彦さんに厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は福岡の佐藤道明さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった感想文集を、ご精読下さるやう切願ひしてやみません。

「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦って来る事と思ひます。三カ月前に阿蘇で得た感動を単なる「思ひ出」に終わらせることなく、合宿教室で得た真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈つてをります。むほ、ご精読後には、是非とも班付（又は班長）の方々に一筆御礼状を差し上げていただきたくお願ひ致します。

（上村栄章記）

〔資料〕

第三十五回「合宿教室（阿蘇）」感想文集

非売品

平成二年十一月十五日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七〇一〇一八 柳瀬ビル

電話〇三―五七二―一五二六(代)

FAX 〇三―五七二―一五二七

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 上村 栄章・北浜 道

大日方 学・吉川 理夫

秋山 信之・國分 俊喜

